

(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書 第8集

広島市佐伯区五日市町所在

有井城跡 発掘調査報告

1993・3



有井城跡全景（北から・航空写真）

は し が き

広島市佐伯区の北西部にあたる石内地区は、古代山陽道が通り、古くからの交通の要衝であったといえます。そのため、山城など多くの遺跡の存在が確認されており、有井城跡は、その石内の中心部に築かれた中世の居館城です。

このたび、道路建設に伴い、その用地内に所在する有井城跡について記録保存を図るため、発掘調査を行いました。その結果、多くの遺構・遺物が発見されました。なかでも、城の防備を固めるための石垣や水堀、当時の生活の一端を知らせる硯や毛抜き、金銅製の飾り金具、大量に出土した輸入陶磁器などは、この城の性格を考えるうえで貴重な資料となるものです。

この報告書が、市民の方々の歴史学習や、郷土理解を進めるうえで役立つことができれば幸いに存じます。

終わりに、本調査にあたり、ご指導、ご協力をいただいた関係者、ならびに発掘作業に従事くださった方々に厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

財団法人 広島市歴史科学教育事業団

例 言

1. 本書は、広島市佐伯区五日市町石内における道路改良工事に伴い、平成3年度に実施した一般 県道原田・五日市線（石内バイパス）道路改良工事事業地内遺跡（有井城跡）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、広島市佐伯区役所土木課から委託を受け、財団法人広島市歴史科学教育事業団が実施した。
3. 本書はⅠ・Ⅲを脇阪伯史が、Ⅱ・Ⅳ・Ⅴを稲葉瑞穂が執筆し、稲葉が編集した。
4. 遺構の実測及び写真撮影は、稲葉・脇阪・稲垣美和が分担して行った。
5. 遺物の実測及び写真撮影は、稲葉・脇阪が分担して行った。
6. 図面のトレースは、稲葉・脇阪・岡野孝子が分担して行った。
7. 本書掲載の航空写真撮影はスタジオ・ユニに、写真測量は国際航業株式会社に委託した。
8. 第1図に使用した地図は、国土地理院発行の5万分の1の地形図を80%に縮小し複製したものである。

目次

| | | |
|-----|----------|----|
| I | はじめに | 1 |
| II | 位置と歴史的環境 | 5 |
| III | 遺構 | 12 |
| IV | 遺物 | 57 |
| V | まとめ | 88 |

挿図目次

| | | | | | |
|------|----------------|----|------|-------------|----|
| 第1図 | 有井城跡周辺遺跡分布図 | 3 | 第19図 | 石垣6～8立面実測図 | 49 |
| 第2図 | 有井城跡周辺地形図 | 4 | 第20図 | 第4・5郭実測図 | 51 |
| 第3図 | 有井城跡遺構配置図 | 9 | 第21図 | 石垣9実測図 | 53 |
| 第4図 | 有井城跡断面実測図 | 11 | 第22図 | 第2号井戸実測図 | 55 |
| 第5図 | 第1郭実測図 | 23 | 第23図 | トレンチ内遺構実測図 | 56 |
| 第6図 | 第1号土坑実測図 | 24 | 第24図 | 土師質土器実測図 | 61 |
| 第7図 | 第2～6号土坑実測図 | 25 | 第25図 | 土師質・瓦質土器実測図 | 62 |
| 第8図 | 第2郭実測図(南西側) | 27 | 第26図 | 陶器実測図(1) | 63 |
| 第9図 | 第2郭実測図(北東側) | 29 | 第27図 | 陶器実測図(2) | 64 |
| 第10図 | 第2・3郭土層断面図 | 31 | 第28図 | 陶器・磁器実測図 | 65 |
| 第11図 | 第1号井戸実測図 | 33 | 第29図 | 磁器実測図(1) | 66 |
| 第12図 | 通路状遺構2・木戸跡実測図 | 35 | 第30図 | 磁器実測図(2) | 67 |
| 第13図 | 通路状遺構2・石垣断面実測図 | 37 | 第31図 | 土製品・石製品実測図 | 68 |
| 第14図 | 石垣2～5立面実測図 | 39 | 第32図 | 石製品実測図 | 69 |
| 第15図 | 第3郭実測図 | 41 | 第33図 | 金属製品実測図(1) | 70 |
| 第16図 | 堀切状遺構実測図 | 43 | 第34図 | 金属製品実測図(2) | 71 |
| 第17図 | 通路状遺構3実測図 | 45 | 第35図 | 金属製品実測図(3) | 72 |
| 第18図 | 通路状遺構3・石垣断面実測図 | 47 | 第36図 | 古銭拓影 | 73 |

付表目次

| | | |
|-----|----------------|----|
| 第1表 | 有井城跡出土遺物観察表 | 74 |
| 第2表 | 有井城跡出土金属製品類観察表 | 84 |
| 第3表 | 有井城跡出土古銭観察表 | 87 |

図版目次

- 巻頭図版 有井城跡全景（北から・航空写真）
- 図版 1 a 有井城跡遠景（北東から・航空写真）
b 有井城跡遠景（今市城跡から）
- 図版 2 a 有井城跡全景
（北から・調査前・航空写真）
b 有井城跡近景（北から）
- 図版 3 a 郭畝状堅堀（西から）
b 同 上（北から）
- 図版 4 a 第1郭第1号土坑（東から）
b 同 上（北から・完掘後）
- 図版 5 a 第2郭全景（南から）
b 第2郭石垣検出状況（南西から）
- 図版 6 a 石垣の崩落状況（東から）
b 第2郭石垣及び通路状遺構 2
（東から）
- 図版 7 a 第2郭石垣及び通路状遺構 2
（南西から）
b 第2郭石垣の構築状況
（左から石垣3・4・5，南東から）
- 図版 8 a 石垣3北東面検出状況（北東から）
b 同 上（北西から）
- 図版 9 a 通路状遺構2の木戸跡（北東から）
b 同 上（北西から）
- 図版 10 a 石垣4断面（南西から）
b 石垣5断面（東から）
- 図版 11 a 第2郭3区東側土層断面
b 第2郭3区西側土層断面
- 図版 12 a 通路状遺構1（北西から）
b 第2郭西端部（東から）
- 図版 13 a 第1号井戸（南西から）
b 同 上（完掘後）
- 図版 14 a 通路状遺構3（南から）
b 第3郭石垣検出状況（南西から）
- 図版 15 a 虎口（第2郭北端から）
b 通路状遺構3（虎口から）
- 図版 16 a 石垣6（西から）
b 堀切状遺構（東から）
- 図版 17 a 堀切状遺構西端詰石検出状況
（西から）
b 同 上（完掘後）
- 図版 18 a 第4・5郭調査範囲全景（東から）
b 同 上（西から）
- 図版 19 a 石垣9（南から）
b 第2号井戸（東から）
- 図版 20 a 第2号井戸（完掘途中，東から）
b 同 上（完掘後）
- 図版 21 a 第5郭堀中土層断面（東から）
b 第5郭堀外土層断面（東から）
- 図版 22 a 虎口下堀中土層断面（東から）
b 虎口下礫群検出状況（北東から）
- 図版 23 a 虎口付近完掘状況（北から）
b 第3郭東側トレンチ内堀検出状況
（東から）
- 図版 24 有井城跡出土遺物（1）
- 図版 25 有井城跡出土遺物（2）
- 図版 26 有井城跡出土遺物（3）
- 図版 27 有井城跡出土遺物（4）
- 図版 28 有井城跡出土遺物（5）
- 図版 29 有井城跡出土遺物（6）
- 図版 30 有井城跡出土遺物（7）
- 図版 31 有井城跡出土遺物（8）
- 図版 32 有井城跡出土遺物（9）

はじめに

広島市教育委員会では、佐伯区五日市町石内に一般県道原田・五日市線の道路改良工事として、石内バイパスを建設する計画があることを知り、その事業地内に有井城跡をはじめ多くの遺跡が存在していることを確認した。

以後、有井城跡の取扱いについて、事業主である広島市佐伯区役所土木課と再三協議を重ねたが、計画の変更が困難であったため、記録保存もやむなしとの結論に達した。

これをうけて、広島市佐伯区役所土木課は、財団法人広島市歴史科学教育事業団に発掘調査を委託して行うこととし、現地調査は、財団法人広島市歴史科学教育事業団において平成3年5月から平成4年3月まで実施し、平成4年度に報告書を作成した。

なお、調査関係者は次のとおりである。

調査委託者 広島市佐伯区役所土木課

調査受託者 財団法人広島市歴史科学教育事業団

調査担当課 財団法人広島市歴史科学教育事業団文化財課

平成3年度 片岡 寿一 常務理事【現 広島市在宅福祉サービス協会 常務理事】

調査関係者 若野 健二 文化財課長【現（財）広島アジア競技大会組織委員会報道課長】

幸田 淳 文化財課係長 若島 一則 文化財課主査

調査者 稲葉 瑞穂 文化財課主事 稲垣 美和 文化財課学芸員【現 退職】

脇阪 伯史 文化財課学芸員

平成4年度 松原 明二 常務理事 半田 淳 文化財課長

調査関係者 幸田 淳 文化財課係長 若島 一則 文化財課主査

調査者

(報告書執筆) 稲葉 瑞穂 文化財課主事 脇阪 伯史 文化財課学芸員

(整理担当) 岡野 孝子 文化財課学芸員

調査補助員 (順不同)

杉田 春人, 田中 孝雄, 横山 茂, 木村 武勲, 大背戸千香子, 岡野 慶子, 国本 敬子, 阪部 照美, 長力 初枝, 西垣内やす子, 本田 春子, 道添キヌ子, 吉谷美佐子, 森崎 幸江, 広田 武子, 木下 一人, 塚井 数馬, 森野 逸夫, 中本 太和, 柚上 光子, 森下 静江, 小方 照子, 小野 圭, 横山 吏志, 小松 宏昭, 南畑 安弘, 筒尾 俊宏, 神田 剛, 山川 賢治, 原口 敦彦, 岡本 剛明, 岡本 典親, 新田 浩治, 福崎 總子, 原田千代子, 松本千恵子, 大内 敏弘, 柳本 竜生, 住川香代子, 山本 都, 佐伯ひとみ, 河合 淳子, 中田 妙子, 栗林 隆幸, 河瀬 陽子, 中本 智子

調査にあたっては、広島市佐伯区役所土木課、広島市教育委員会、石内公民館及び広島市立石内小学校の職員の方々をはじめ、広島市文化財保護指導員三野丈一氏、和泉産業株式会社及び周辺住民の方々ほか多くの方々から調査を円滑に進めるために多大なご配慮、ご協力を頂いた。また、調査中、広島大学文学部考古学研究室、財団法人広島県埋蔵文化財調査センター松村昌彦氏からは広範なご教示を頂いた。さらに、報告書作成

にあたっては、東京国立博物館陶磁室長矢部良明氏、財団法人倉敷考古館長間壁忠彦氏、間壁葭子氏、愛知県陶磁資料館主任学芸員井上喜久男氏、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所指導主事鈴木康之氏から広範なご教示を頂いた。ここに記して謝意を表したい。



1. 有井城跡 2. 水晶城跡 3. 串山城跡 4. 今市城跡 5. 狐ヶ城跡 6. 長尾城跡
 7. 徳美城跡 8. 宮尾城跡 9. 釈迦ヶ岳城跡 10. 己斐城跡 11. 京良木城跡 12. 口和田
 土塁 13. 鬼ヶ城跡 14. 鈴ヶ峰城跡 15. 草津城跡 16. 西ヶ城跡 17. 高城跡 18. 野登呂
 城跡 19. 山根城跡 20. 土井岡城跡 21. 深入城跡 22. 池田城跡 23. 月見城跡 24. 長野
 遺跡 25. 五日市城跡 26. 海老山城跡 27. 桜尾城跡

第1図 有井城跡周辺遺跡分布図 (S=1:62,500)



第2図 有井城跡周辺地形図

II 位置と歴史的環境

有井城跡は、広島市佐伯区五日市町大字石内に所在し、石内川の沖積地東側の河岸段丘とその背後の低い独立丘陵からなる山城である。佐伯区は広島市の西部に位置し、東は釈迦ヶ岳山塊、北は窓山山塊、西は極楽寺山塊に囲まれ、その間を八幡川や石内川が河岸段丘を形成しながら貫流し、五日市の沖積平野を進んで南の瀬戸内海へと達している。釈迦ヶ岳山塊の西端に位置する当城跡の最高所の標高は約59mで、周囲の水田面との比高差は約28mである。城跡からは眼前に石内の谷のほとんどが見渡せ、遠く五日市西部にひろがる極楽寺山からの山麓緩斜面を眺望することができる。

さて、本城跡周辺には古代における条里遺構が見られ、石内川の右岸に沿って通っていた古代山陽道もこの条里を基準としてつくられたと考えられる。また、この石内の谷の条里が八幡川に接する付近には「郡（こおり）」の小字名が残っており、ここが『倭名類聚抄』の大町郷の比定地の一つとする説もある。中世においては旧佐伯郡のほとんどが巖島神社領（神領）となっており、神領衆と呼ばれる巖島神主家の家臣団が押さえていたが、後述するように安芸武田氏の度重なる押領や、周防大内氏の勢力の伸長のなかで複雑な様相を呈してくる。中世の山城跡として石内の谷周辺で確認されているものは10か所以上を数える。また、佐伯区全体を見れば20か所以上にのぼる。これらの城跡の分布は、低丘陵の先端部や頂部に立地するもの、眺望のよい高地に立地するもの、海岸沿いに立地するものがあり、特に旧山陽道沿いの低丘陵に集中して分布しているといえる。旧山陽道沿いの低丘陵に立地するものには、今市城跡・串山城跡・水晶城跡・有井城跡・長尾城跡・徳美城跡・池田城跡・月見城跡などがある。高地に立地するものには、釈迦ヶ岳城跡・狐ヶ城跡・京良木城跡などがある。海岸沿いに立地するものは、海老山城跡・五日市城跡などがある。

これらのうち、発掘調査が実施され又は実施中でその概要が判明した城跡としては、有井城跡のほか今市城跡・水晶城跡・長尾城跡・池田城跡・月見城跡がある。今市城跡は、旧山陽道が石内の谷から北の大塚・伴方面に向かって進むところを直下に見下ろす位置に築いており、掘立柱建物跡などが検出され、室町時代中葉の備前焼播鉢が出土している。水晶城跡は、石内川を挟んで有井城跡の真向かいの丘陵上に位置し、戦国時代の文献に登場する石道本城或いは石道新城として比定されており、この地域では最も規模の大きな山城である。丘陵全体に多くの郭を配し、土塁、堀切、竪堀などで防備しており、文献上の考察から永正～大永年間の築城と考えられている。長尾城跡は自然地形を巧みに利用した山城で、これも文献上の考察から嘉吉～永正年間に機能していたと考えられる。池田城跡は、石内方面を意識した郭配置をしており、礎石建物跡や掘立柱建物跡などが検出され、15世紀後半～16世紀の特徴を示す備前焼が出土している。月見城跡からは、室町時代後半期の古墓が検出されている。このほかの中世の遺跡としては、鎌倉時代の瓦が出土した円明寺遺跡、掘立柱建物跡、井戸跡、石垣が検出され16世紀中葉の土豪層の屋敷跡と推定される長野遺跡などがある。

本城跡のある石内地区は、中世においては石の多い険しい道であったために石道と呼ばれていたようである。しかし、有井城の名称は当時の文献には見られないため、その

由来は不明である。なお、城主には有井三郎左衛門尉と山県備後守の名が伝えられている。有井氏は、『太平記』巻21の先帝崩御事に「安芸ニ有井」の記載があることから、延元3年（1338）頃に南朝方として活動していたことが知られるのみで、その外の記録は見られない。一方、山県備後守は、毛利元就の家臣の山県備後守（就延）と考えられる。山県氏は、戸坂を本地とする川内水軍のひとつとして武田氏の家臣であったが、毛利氏の進出とともに、毛利氏の触頭として佐東衆を統率する存在となっている。その山県氏の一族が城主であったとすれば、毛利氏が佐西郡に進出してくる天文23年（1554）以降のことであろう。また、中世の石道において文献にあらわれる国人領主として小幡氏がみられる。小幡氏は武蔵児玉党の一族秩父行高の子行頼が、上野国甘楽郡小幡の地に拠って小幡氏を称したのにはじまると伝えられており、その一族が、おそらく南北朝初期までには地頭職を得て安芸国に西遷してきたのであろう。文献上では、文和元年（1352）11月の『足利義詮下文』、『沙弥某施行状写』に「安芸国兼武名小幡右衛門尉跡」とあるのが初見といわれている。当時の兼武名の性格・所在地等は不明であるが、おそらく国衙領の別名と思われる。戦国時代において、小幡右衛門尉の系譜を引くとみられる石道の小幡行延が廿日市の洞雲寺との所領争いの中で、円満寺分并丸山名に対する自分の権利の正当性を主張する論拠として、そこが兼武名の内であるとしていることは、この兼武名が、小幡氏の一貫した勢力基盤であったことを窺わせる。また、石内地区のなかに丸山という小字名があることもそれを首肯させるといえよう。さらに、応永11年（1404）の当時の守護山名氏に対抗するため安芸国人領主33名が結んだ軍事的盟約である『安芸国人一揆契状』に巖島安芸守親頼（巖島神社神主藤原親頼）とならんで小幡山城守親行の名があることや、大永3年（1523）の友田興藤の大内氏に対する反乱のとき、石道の小幡興行が大内氏与党として武田氏から攻撃され、三宅の円明寺で親類8人とともに切腹させられていることは、小幡氏が佐西郡内にありながら神領衆とは異なり、神主家とは自立した立場であったとみることができる。その後、大永7年頃に大内氏の家臣三井三郎二郎とともに小幡四郎が城番として石道新城に入城し、天文12年（1543）頃に小幡山城入道が石道に新たに関所を設けている。しかし、これ以降明確に石道の小幡氏を示す文献史料がなくなり、石道の小幡氏を示す確証は得られないが、天文20年（1551）の陶晴賢の謀叛の際、大内義隆が大寧寺で自殺する時に小幡四郎の名があることや、小幡山城守も津和野に逃れるとき途中で自殺したと伝えられていることから、大内氏の滅亡とともに、その被官となっていた小幡氏もともに断絶したとする説もある。

さて、大内氏が安芸国に進出し始める南北朝期以降の佐西郡と石内地区の歴史的動向を概観してみよう。

観応の擾乱期に大内弘世は周防・長門に勢力を広げ、周防・長門さらに石見の守護に補任され、応安元年（1368）にかけて東西条を拠点として安芸国に進出した。当時の安芸国守護は武田氏信であったが、大内弘世は幕府から国人領主による国衙領違乱の停止を命ぜられ安芸国の守護的役割を行うようになり、以後、大内氏はその滅亡にいたるまで安芸に大きな影響を与え続けることとなる。巖島神主家は、大内氏の安芸進出と同時に大内氏との関係を深めていき、さらに国人領主へと変容していく。応永6年（1399）の応永の乱に際しても、神主家は大内氏に従って堺に籠城し幕府軍と戦ってい

る。応永の乱後、幕府内部において細川氏と山名氏の対立が現出し、大内氏の勢力に脅威を感じていた安芸の国人領主たちは、安芸国守護職となった山名氏と結ぶ大内氏に対抗するため細川氏との結びつきを強め、安芸国内には、山名氏と結ぶ大内氏と神主家、細川氏と結んで分郡守護となった武田氏と国人領主という二つの勢力の対立の構図が形成された。この対立は、宝徳2年（1450）の『巖島神社神主藤原教親申状案』にみられる武田氏による石道などの神領の押領から、長祿元年（1457）の長祿合戦へと発展し、佐西郡の保井田・釈迦ヶ岳城・己斐城、ついで佐東郡の山本・鳥屋尾・十王堂などで神主家と大内氏が、武田氏と毛利・吉川・小早川などの国人領主と衝突している。この対立は、応仁・文明の乱（1467～1477）においても続いていくが、乱後は、反大内氏の国人領主たちも次第に大内氏の勢力下に入っていくものが多くなり、永正5年（1508）、大内義興が足利義植を奉じて上洛したときは、安芸の国人領主のほとんどが義興に従ったと考えられる。このとき神主家の藤原興親は、京都において病没し、興親に後嗣がいなかったため、その跡目をめぐっての争いが表面化し、国元に残っていた神領衆が東方・西方にわかれて数年に及ぶ抗争を始めた。このとき武田元繁が東方に合力し、西方の拠点であった己斐城を包囲した。これに対して大内義興は、武田氏側として己斐城を守っていた山県民部の居城有田城を、毛利・吉川氏に攻略させる。その後、武田元繁は永正14年（1517）の毛利氏との有田合戦において敗死してしまう。その後、永正17年（1520）に大内義興は、東方・西方の愁訴を退けて神主を置かず神領を直接自己の支配下に収め、石道本城に杉甲斐守、己斐城に内藤孫六、桜尾城に嶋田越中守を城番として置いて武田氏攻略への布石とし、大永2年（1522）には、広島湾頭や石内・大塚で武田氏と合戦している。翌大永3年（1523）4月には、神主家の一族の友田興藤が桜尾城に入城して自ら神主を称し、武田光和の後援を得て大内氏に反旗を翻した。このとき、桜尾・己斐城番は追放され、石道本城の杉甲斐守は武田方に討たれ、南北朝以来、神主家によって大内氏のために開かれていた安芸への陸の入口が閉ざされてしまう。この時期を逃さず、出雲の尼子氏も同年8月に大内氏の拠点鏡山城（東広島市）を攻略するために安芸に進出している。翌大永4年（1524）、大内義興は桜尾城の友田興藤と講和し、同6年にも豊後大友氏の援軍を得て、広島湾頭と石内・大塚の二方面から武田氏を幾度か攻めたようであるが、享祿元年（1528）に義興が病気になるって帰国したため安芸攻略は一時頓挫することとなる。しかし、天文10年（1541）4月、大内氏が尼子氏と武田氏に攻められていた吉田郡山城の毛利氏を救援に向かったとき、再び、友田興藤が尼子氏と呼応して大内氏に反旗を翻したが、尼子軍敗走の後、大内氏の攻勢を受けて興藤は切腹させられ、承久3年（1221）以来300年余の藤原姓神主家は滅亡し、その直後の同年5月には、鎌倉時代以来、安芸守護職としての伝統を誇った武田氏も滅亡する。なお、神主家滅亡のとき、神領衆の多くは大内氏に帰順したため、その後も旧来の所領を大内氏から認められたようである。また、武田氏滅亡後に一時の安定をみた天文12年頃には、前述した石道の小幡氏とともに毛利元就が伴に、大塚神五郎が大塚に関所を設けていたことが知られている。天文20年（1551）に、陶隆房（晴賢）の謀反により大内義隆が切腹させられるが、この陶氏も、弘治元年（1555）には巖島において毛利氏により滅ぼされる。この前年、佐西郡に進出してきた毛利氏は石道や五日市でも陶氏方と合戦している。この後、佐西郡は戦乱の

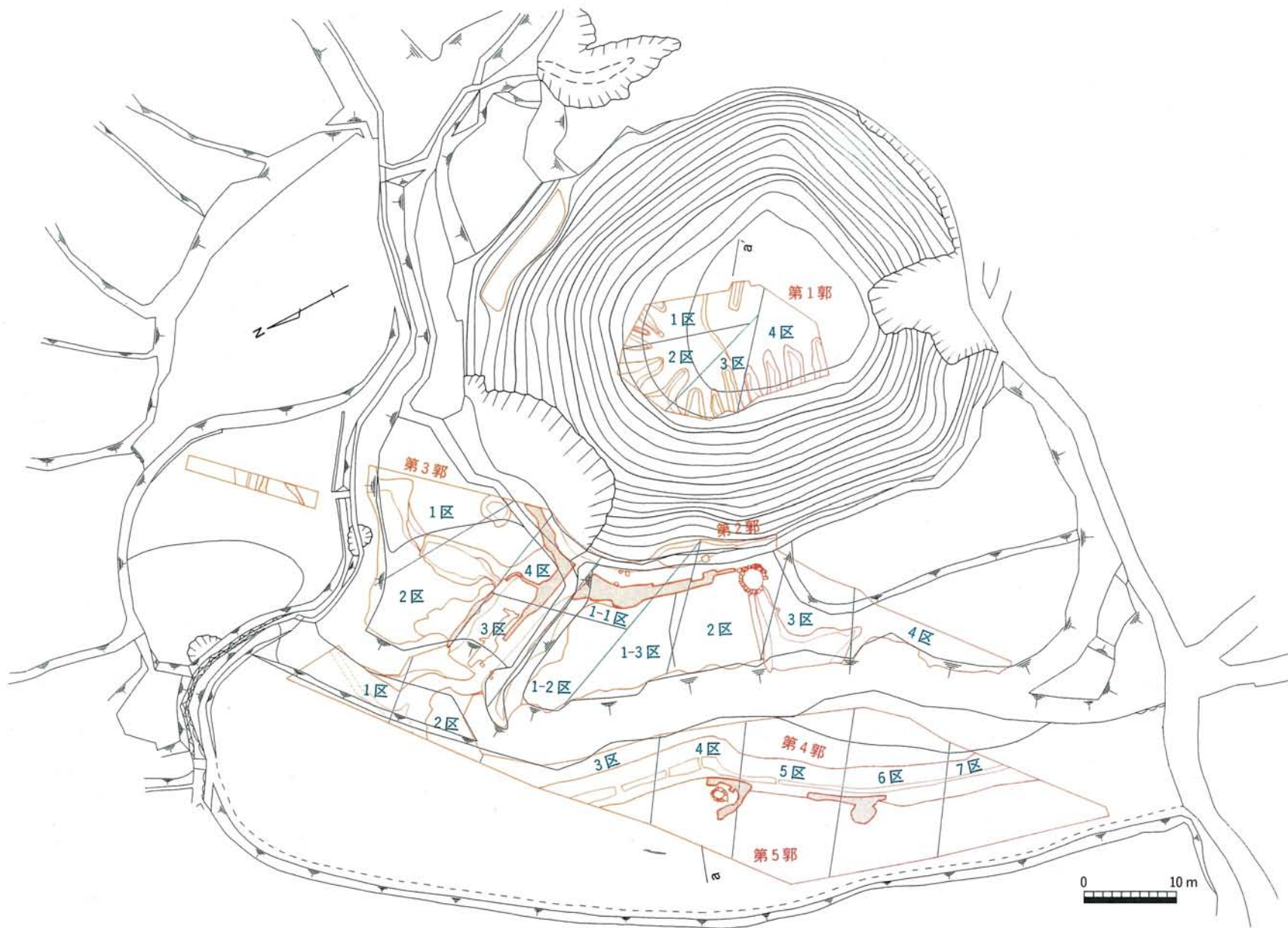
時期を終えて毛利氏の支配地として安定していったと考えられ、主要な交通路として石内を通っていた中世山陽道も草津・五日市を通る海岸沿いの交通路にその重要性が移っていき、石内地区の山城はその役割を終えていくことになる。

注

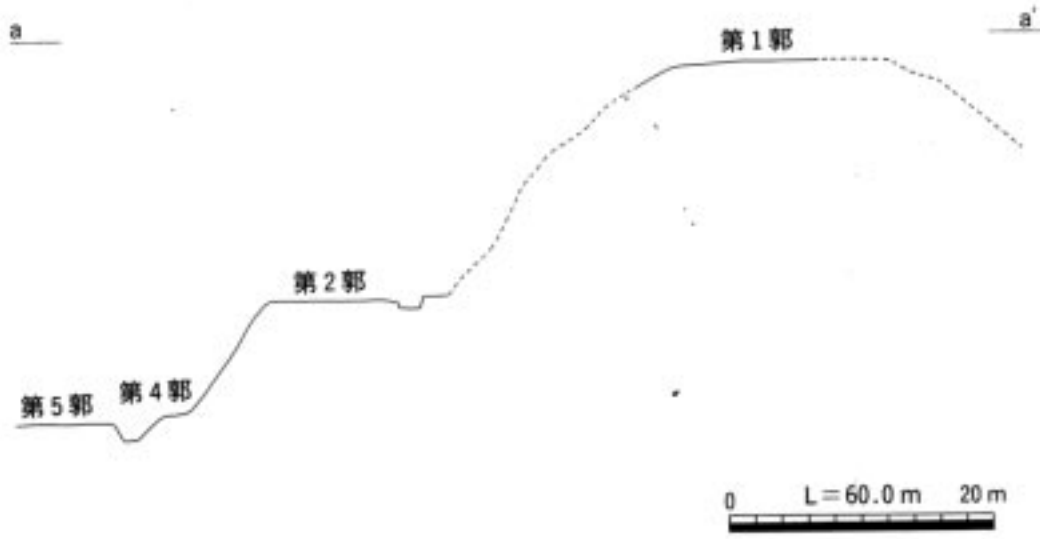
- (1) 米倉二郎「安芸広島付近の条理」『広島県史』原始・古代 1980
- (2) 角重 始「厳島社領」『広島県史』中世 1984
- (3) 広島市教育委員会『広島市遺跡分布地図』 1990
- (4) 平成4年度(財)広島市歴史科学教育事業団において調査を実施した。
- (5) (財)広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』 (Ⅲ) 1986
- (6) 注(5)に同じ。
- (7) 広島市教育委員会『池田城跡発掘調査報告』 1986
- (8) (財)広島県埋蔵文化財調査センター『月見城遺跡』 1987
- (9) 広島県教育委員会『円明寺(延命寺)遺跡発掘調査報告』 1971
- (10) 五日市町教育委員会『長野遺跡発掘調査概報』 1985
- (11) 石内村『国郡誌御用二附下知ラ遍書出帳写』
- (12) 五日市町誌編集委員会『五日市町誌』上巻 1974
- (13) 注(11)に同じ。なお、『芸藩通志』では山県備前としている。
- (14) 広島県『広島県史』古代中世資料編Ⅰ 1974
- (15) 『萩藩閥閥録』巻133「山県四郎三郎」
- (16) 注(15)に同じ。
- (17) 吉川弘文館『国史大辞典』第2巻 1990
- (18) 『小早川文書證文』65号
- (19) 『小早川文書證文』437号
- (20) 河村昭一「安芸の諸豪族」『広島県史』中世 1984
- (21) 『洞雲寺文書』21号
- (22) 『毛利家文書』24号
- (23) 『房顕覚書』15
- (24) 『大内氏実録土代』所収文書 近藤文庫7号
- (25) 『厳島野坂文書』45号
- (26) 『房顕覚書』29
- (27) 『大内様御家根本記』
- (28) 注(20)に同じ。
- (29) 『卷子本厳島文書』15号
- (30) 『房顕覚書』14
- (31) 注(23)に同じ。
- (32) 『熊谷家文書』128号

参考文献

広島県史中世編, 廿日市町史



第3图 有井城跡遺構配置図



第4图 有井城跡断面实测图

III 遺 構

調査の概要

本城跡は当初、調査区内において地表観察によって3つの郭が存在することが想定されていたが、調査区外においてトレンチによる遺構確認を行ったところ、堀の存在が確認された。このため、調査区域を一部西に拡張して調査を行った。

この結果、5つの郭と竪堀群1、堀切状遺構1、通路状遺構3か所、石垣4か所、井戸2基及び、堀並びに多数の溝を検出した。また調査区外の地表観察によると第1郭東側に帯状の平坦面があり、帯郭の存在が予想される。しかし、今回行った調査では各郭とも調査範囲の関係から部分的な発掘調査であるため、本城跡の全貌は明確にしえなかった。

本城跡は独立丘陵を利用して造られており、郭は最高所にある郭を第1郭とし、第1郭の北西側において通路状遺構3を挟んで西側に第2郭、その東側に第3郭が検出された。また、第2郭の北西側に第4郭、さらに東西に走る堀を挟んで第5郭の順で検出し、第3郭の東側においては第4郭と第5郭を隔てる堀の延長部分を検出した。なお、第5郭については、堀の外側に位置するが、地山を削平した平坦面などから多数のピット等が検出されたことなどから本城跡と一体のものとして扱うこととした。

この外、竪堀群は第1郭の周囲をとりまく形で、計13本確認された。通路状遺構1は第2郭平坦面中央部分から、通路状遺構2は第2郭南東側から、通路状遺構3は第2郭と第3郭の間から検出した。堀切状遺構は第3郭のほぼ中央部分を東西に切る形で検出された。石垣は通路状遺構2及び3に伴って検出された他、第5郭南側の堀に伴って検出された。井戸は第2郭及び、第5郭から検出した。

遺物としては、土師質土器、瓦質土器、備前焼、青磁等多数の陶磁器類、釘等の鉄製品、鋳等の銅製品及び、飾金具等の金銅製品が出土した。

第1郭

第1郭は本城跡最高所に造られた郭で標高は最高所で約59mである。

本郭は本城跡のある丘陵の山頂部平坦面に位置しているが、平坦面の内南東側約2分の1が調査区外のため未調査である。本郭は調査区中央より西側がほぼ平坦で、平坦部の東側では高低差約20cmの段をなして緩やかに傾斜している。この段は調査区外に伸びるものと考えられ、調査区外の地表観察からも北東側を意識した段が認められることから、本郭は大きく2段に分けられるものと考えられる。更に郭の北東側縁辺部においても、一部分ではあるが高低差約20cmを計る段を検出した。

また、調査区内郭縁辺部分は竪堀が巡らされており、縁辺部からは小ピットが検出され棚等の杭跡の可能性が考えられる。

本郭からは、竪堀群の他、土坑が6基及び、小ピットを検出した。遺物として青磁、土師質土器、備前焼、鉄製品、銅製品等が出土した。

第1号土坑

調査区の南端に検出された土坑で、プランは長方形を呈する。長軸はN34°Wの方向を示し、検出面での幅約120cm、深さ約55cmを計る。長さは本土坑が調査区外にも延びているため不明であるが、調査区内において約300cmを計る。本土坑の

北側の上部に集中して20cm前後の大きさの礫が多数検出され、底からは最大で17cmの厚さを計る粘土層が検出された。遺物としては粘土層上の黒色及び暗黄褐色土層中から大量の土師質土器の細片とほぼ完形の土師質の皿(1~7)、備前焼片、青磁鉢底部(51)、鉄片及び銅製小柄(110)等が出土した。また、粘土層中からは鉄釘が出土した。

遺構の形態及び、規模は古墳の主体部に似ているが、中世の遺物以外には出土していない。このことから本土坑は中世の墓壙の可能性が高く、検出された礫は被覆石等が落ち込んだものと考えられる。

第2号土坑～第6号土坑

平坦面のほぼ中央部分から第2号～第5号土坑が検出され、第6号土坑が平坦面北端の豎堀の先端付近から検出された。第2号土坑から第6号土坑はほぼ円形のプランを呈し、直径50～80cm、深さ30～40cmを計る。遺物として第2号土坑から銅製目釘(114)、第3号土坑から鉄釘、第4号土坑からは土師質の皿(8)及び、鉄釘が出土した。

第2号・第3号土坑、第4号・第5号土坑がそれぞれ近接して位置しており、土坑の中心を結ぶ線はほぼ平行である。また第4号土坑を除く3基の土坑からはそれぞれ大きさにばらつきが見られるものの数個の礫が検出された。第6号土坑の内部からも数個の小礫が検出された。これらの土坑の性格については不明である。土坑のプラン、規模から掘立柱建物の柱穴とも考えられるが、第4号または第5号土坑の対角線に同規模の土坑が検出されていないこと、第6号土坑の位置が郭の平坦面の端であることなどから掘立柱建物の柱穴の可能性は低いと考えられる。また、形状、規模から墓壙と考えることもできるが、遺物に乏しく、炭等も検出されていないことから断言できない。

豎堀群

第1郭の縁辺部を取りまくように連続して配された豎堀は、各堀間が畝状の土塁となるような形で計13本検出された。検出した豎堀は、幅50～400cm、深さ20～40cmを計り、断面はU字型を呈するが、地形が急斜面で危険なためその長さ等の全容は明らかにしえなかった。この検出された豎堀群のうち最も西側の豎堀の上端部から備前焼の甕の破片が出土している。

第1郭の調査区は頂上平坦部の北西半分のみであるが、調査区内全体から豎堀が検出されていることから豎堀群は山頂部のかなりの部分に配されていると推測される。

第2郭

第2郭は、第1郭の北西側に配された郭であり、第1郭との比高差約18mを計る。現況では、調査区外の南西方向に畑地が広がっており、本郭についても南西方向への拡がりが見られる。本郭の調査範囲のほぼ中央に第1号井戸を検出し、この井戸から北に延びる小規模な通路状遺構1とこれに続く小規模な平坦面が検出された。本郭はこの通路状遺構1の西側と東側では郭の様相を異にしている。第2郭の通路状遺構1の西側と東側を概観してみると、西側部分では通路状遺構1の北側に配された小平坦面を含めて細かく5段の平坦面が検出されたのに対して、東側では概ね一つと考えられる大きな平坦面が検出された。ピットは西側、東側とも多数検出されたが、東側平坦面のピット数に対して西側はピット数は比較的少ない。

東側平坦面から検出されたピット群は底面レベルが南西から北東に向けて低くなる傾向を示すが、これは平坦面が北東側に向かって低くなっていることによるものと考えられる。これらのピット群のうち、小ピットについては形状、深さから柱穴あるいは棚の杭跡と考えられ、また、何らかの建物が建っていたことも想像されるが、柱穴の組み合わせを明らかにすることは困難である。

なお、第2郭東側平坦面の北東側端より約1.5m低い所から外側が若干高くなった長さ約15m、幅20～110cmを計る帯郭を検出した。

西側の平坦面はレベルの高い順に平坦面1・2・3・4・5とする。平坦面2からピットの他に溝1～3が検出され、東側平坦面南側からは溝4～9が検出された。この溝は排水のためのものと考えられるが、溝2・3についてはほぼ直線的に延び、溝に沿って多数の小ピットが並んで検出されたことから、溝の南側と北側を区分するための直線的に延びる何らかの構築物の存在を予想させる。

平坦面1のレベルで平坦面2の東側に広く焼土面を検出した。平坦面5の土層観察からは平坦面2と同じレベルに遺構面が認められ、また、東側平坦面の西端から幅20～50cmの帯状の平坦地を平坦面2と同じレベルで検出していることから、平坦面5及び通路状遺構1を埋めて平坦面2を造成しており、その場合、平坦面2の東端は前述した東側平坦面の西の段まで延びていたものと考えられる。また、その平坦面の20～30cm高い平坦面1とほぼ同じレベルに焼土及び、炭化物を含んだ土層があり、平坦面1とほぼ同じレベルの東側平坦面においても平坦面直上から焼土面が検出されたことから、西側平坦面が東側平坦面と同じレベル、即ち先述の焼土面に当たる面が一続きの平坦面として使用されていた時期があると考えられる。焼土面より上層では遺構面は検出されておらず、前述した一続きの平坦面が最終的な遺構面になると考えられる。また焼土面と同じレベルから礫群が検出されており、そのうちの数個については礎石と考えられるが建物のプランは復元しえなかった。第1号井戸の造られた時期については、通路状遺構1を埋めて井戸の石組の一部が築かれ、また、石組の別の部分では平坦面2直上に築かれていることから、通路状遺構1を埋めて平坦面2が拡張された後の築造と考えられる。

焼土面上から土師質の皿(17, 18)、瓦質の鍋(29)、備前焼播鉢(42)、中国製染付碗(74)、銅製筭(109)、銅製鞋(115)が出土した。この他、焼土面以外の遺構面上からは土師質の皿(9, 13, 21～23)、備前焼壺(33)、青磁碗(57)、鉄鏟(91)、小札(99, 100)等の他、鉄釘多数が出土した。

第1号井戸

第1号井戸は地山を掘り込み、掘り方上端部の周囲のみに1～2段の石組を設けたが、基本的には筒型の素掘りの井戸である。直径は最上部で約2.2mを計る。深さについては約4mまで掘り下げたが崩落の恐れがありこれ以上の掘り下げを断念したため明らかにしえなかった。石組に使用されている石は長さ50～60cm、幅20～40cm、厚さ10～30cmの花崗岩質の角礫及び、10～20cm四方の河原石である。土層観察によると井戸の上端から3.2mの深さまでは砂と薄い粘土の瓦層でその下には20～50cmの厚さで粘土層が観察された。この粘土層中からは備前焼の大甕の底部(39)が出土している。なお、この粘土層の下には灰白色の単純砂層が確認されたため、こ

の粘土層が井戸の底であった時期があると考えられる。また、井戸の東西両側から一対の柱穴が検出された。現状では東側の柱穴が石組の石材の下に隠れているためその性格について疑問は残るが、柱穴と井戸との位置関係と柱が井戸側へ傾くように掘られていることから、ある時期井戸に伴う施設があった可能性がある。

通路状遺構 1

通路状遺構 1 は井戸が検出された部分から北西に緩やかに下りながら延びて第 2 郭下段の小規模な平坦面 5 に続いており、北端では第 2 郭西側平坦面 2 との高低差は約 1 m を計る。検出状況から、平坦面 5 から第 2 郭上部平坦面へ上がるための機能を持っていた遺構と想定される。通路状遺構 1 は南側で井戸によって切られているが、前述の遺構の検出状況から通路状遺構 1 が井戸に先行するものと考えられる。通路状遺構 1 の断面形は逆台形型を呈する。平坦面 5 は南北約 3 m、東西約 7 m の方形のプランを呈する。通路状遺構 1 北端付近には約 20 cm 角の深さ 30～35 cm の小ピットが 2 か所検出され、何らかの施設があったものと考えられる。この場合、位置関係から考えて木戸などの施設を考えるのが妥当であろう。通路の地山直上から中国製天目茶碗（50）、平坦面 5 からは銅製鋌（111）が出土した。

石垣列（石垣 1～5）

石垣列は井戸から北東方向に約 3 m の所を西端として第 2 郭平坦面南側に検出された。この石垣列は配列及び配置から全部で 5 つのブロックに分けられる。これを第 2 郭平坦面側から石垣 1～石垣 5 と呼ぶこととする。石垣の石材は花崗岩の自然石で、積み石は 10～70 cm 四方の角礫及び河原石を使用し、積み石の石材と比較して裏込め石の大きさは小さいものを使用している。

石垣 1 は石垣面の方向が N 27° E で 1～4 段積みである。石垣 1 の北側の端は石垣 2 以降の石垣列の裏込め石の中に延びていることが確認された。石垣の高さは南側で約 30 cm、北側で約 90 cm を計り、遺存する石垣の最高所は第 2 郭東側平坦面とほぼ同じレベルであった。断ち割り部分の観察によると石垣は地山を削り斜面に張り付ける様に積まれており裏込め石等は確認されなかった。

石垣 2 は石垣 1 の西端から約 2 m 東側の地点から N 27° E の方向に約 5.9 m にわたって検出された。1～5 段積みであるが、南端から約 4.5 m の地点から北側では上部 1 段のみの石列となり、石列下には高さ 20～30 cm の盛土が検出され、石垣は検出されなかった。高さは南側で約 40 cm、中央部分で約 90 cm を計り、石垣上面のレベルは第 2 郭東側平坦面とほぼ同じであった。

石垣 3 は石垣 2 が石列に変わる地点から石垣 2 のすぐ前面に N 20° E の方向に向かって延びており、断ち割り調査により、その南端から 4 m の地点に、更に N 40° W の方向に延びる約 1.5 m の石垣面を検出した。石垣のコーナーの遺存状況は良くなかったが、全体の検出状況から一体のものと考えられる。1～4 段積みで、高さは南側で約 30 cm、北側で約 70 cm を計り、石垣上面のレベルは第 2 郭東側平坦面より約 50～70 cm 低くなっている。

石垣 4 の南側積み石は石垣 3 の北端から約 2.5 m の長さで N 60° E の方向に延び、東側積み石はその北東端からほぼ直角なコーナーを造って約 2.7 m の長さで N 26° W の方向に向かって延びている。断ち割り部分の観察によると、石垣 4 の北東側石垣面

は地山面から直接積み上げられていることが確認された。石垣4の高さは南西側で約70cm、北東コーナーで約80cmを計り、4～10段積みであり、通路側に遺存している石垣上面のレベルは石垣3とほぼ同じである。

石垣5は石垣4の北東側前面に接する様に築かれており、南側面は石垣4からN70°Eの方向に約0.7m伸び、ほぼ直角に近いコーナーを造りN10°Wの方向に約3.5mの長さで築かれている。

高さは南東側で約80cm、北東側で約100cmを計り、5～6段積みであり、残存している石垣上面のレベルは第2郭東側平坦面より約1.5m低くなっている。石垣3・4・5については共に裏込め石が検出された。これは石垣3・4・5が他の石垣より、より堅固な造りを必要としていたことを示していると考えられる。石垣5の上面の石垣4との境目から青磁碗(55)が出土した。

ここで石垣の築成について考えてみたい。石垣の検出状況から石垣列は一時期に構築されたものではなく、石垣の配列からみて石垣1・2・3・4・5の順で築かれたものと考えてほぼ間違いないと思われる。このうち、石垣1については単独で築かれていることから第1次の築成と考えられる。石垣2・3・4の関係についてみると、石垣3は石垣2の前面に築かれ、一部ではあるが石垣2と石垣3は重複している。このため、一見すると石垣2・3は構築の時期が異なる様に見えるが、石垣2は石垣3の裏側に当たる部分から先が簡素な造りになっており、現況では盛土の上に1列の石列が検出されたのみであった。このことは、石垣2は前面に石垣3が造られることを前提として造りを一部簡略化しているように見える。また、石垣2は通路状遺構2の途中までしか築かれておらず、隅石などによる端の造りも検出されなかったため、このままでは石垣としては十分に機能を発揮しえない。以上のことから石垣2・3は一連のものとして構築された可能性が高いと考えられる。この様な石垣の造り方の理由として、地形に沿って僅かにカーブを描く通路状遺構2に対応して石垣を築くために、石垣の方向を途中から変えざるを得なかったことが考えられる。石垣3と石垣4の関係についてみると、石垣4は石垣3の途中から方向を変えて派生する様に築かれているが、石垣3には前述のとおり、一度コーナーを造って第3郭からの侵入に対する防御ラインを形成していたと思われることから、同様に第3郭からの侵入に対する防御ラインを意識して築かれたと考えられる石垣4は石垣3の改修によるものと考えられる。このことから石垣2・3を第2次の築成とし、石垣4を第3次の築成とする。

最後に石垣5の築成について見てみると、先に述べたように石垣4は石垣5の上に築かれたものではなく、地山面から築かれている。このことから、一度は石垣4までが築かれ機能し、後に石垣4の前面に石垣5が築かれたことが分かる。従って石垣5が第4次の築成といえる。

先述したように、石垣1～4の遺存している部分では最上部のレベルと第2郭東側平坦面のレベルがほぼ同じか僅かに低いレベルを示している。また、通路状遺構2の埋土中には石垣に使用されている石材と同種・同規模の礫が大量に検出された。この礫は石垣に使用されていたものが崩れたものと考えられ、当時、石垣の上面と第2郭東側平坦面のレベルはほぼ一致しており、石垣は第2郭東側平坦面を拡張・補強するために築かれたものと考えられる。しかし、石垣5の上面はほぼ平らに検出され、第2郭北東側の

帯郭とレベルがほぼ一致することから、帯郭を意識して造られた可能性が考えられる。

最終的には石垣5までの拡張が行われるなかで、石垣1・2・3・4の構築が第2郭北東側コーナーに対して中途半端な位置で終わっている理由については、問題が残る。これについては、次の通路状遺構2の項で併せて考察することとする。

石垣列の南側起点部分では石垣1及び石垣2の配列が通路状遺構2に向かって「コ」の字状になっており、通路状遺構2のレベルが第2郭東側平坦面と同じレベルになる部分であることから第2郭への入口となる施設があった可能性が考えられる。また、入口部分の西側にも約2.5mに渡って地山上に石列が検出された。

通路状遺構2

通路状遺構2は第2郭平坦面南東側に沿って長さ約22mに渡り検出され、幅80～190cmを計る。深さは先述の第2郭平坦面の入口にあたる部分で平坦面と同じレベルとなり、これより南西側では徐々に高くなり、北東側に向かっては低くなる。北東端での第2郭平坦面東端との高低差は約2.5mを計る。

第2郭平坦面から検出された溝6～8は通路状遺構2にも伴うものであるが、石垣列の裏側に位置していることから、石垣の構築される以前にも通路状遺構2は使用されていたと考えられる。また、通路状遺構2の南東側からは溝10が検出された。幅25～40cm、深さ10～20cmを計り、通路状遺構2に沿って造られているが、さらに山裾に沿って調査範囲外へ続いているものと予想される。おそらく、第1郭斜面から流れ落ちる雨水を通路状遺構3方向へ排水するために造られたのであろう。なお、同溝内からは16世紀前半に比定される備前焼の甕(40)が出土している。

通路状遺構2の北東端から約4m南西側の部分から4個のピットが検出され、更に隣接した石垣下からも4個のピットが検出された。この計8個のピットは通路に対して直交する方向に並んで検出されたため、通路にともなう木戸跡の柱穴と考えられよう。通路は先述のとおり石垣を築くことによって何度かの改修を行っており、木戸についてもこれに伴い造り変えられたものと考えられる。築造の過程を検討してみると、まず、石垣が築かれる以前に地山を掘り込んだ通路に伴いP1-P3-P4-P7・8の中の2個以上を柱穴とした木戸が設けられたと考えられる。このときP3は他の柱穴と比べて浅いため補助的な機能を持った柱として使用されていた可能性もあろう。またこの時点では石垣は築かれておらず、排水には溝6が使用され、溝10はまだ造られていなかったものと考えられる。次いで、この木戸の位置に規制を受けた形で石垣1が築かれるのに伴い、溝6に代わって排水には第1郭側に新たに造られた溝10を使用したと考えられる。この溝10の新設以後石垣2・3の構築に伴い木戸の位置はP5-P6に移動したと考えることができよう。なお、P2の用途については不明である。また、石垣4・5の構築後の時期における木戸の存在は明らかではない。

なお、第1郭からの斜面と通路状遺構2の間に長さ9m、幅2mの小規模な平坦面を検出した。溝やピットは検出されなかったが、通路状遺構2とこの小平坦面のレベルがほぼ同じになる部分に溝をまたぐように60cm四方の平らな石が地山を掘り込んで据え置かれており、通路からこの小平坦面へ上がるための施設ではないかと思われる。このことから、この平坦面は溝10が使用されていた当時使用されていたと考えられる。

第3郭

第3郭は通路状遺構3を挟んで第2郭の東側に位置する郭で第2郭平坦面より約1.4～1.5m低くなっている。調査範囲内では東西約10～25m、南北約15mで台形のプランを呈しているが、本郭南側には未調査部分が有り、調査前の地形観察からは第3郭平坦面が南側に広がるのが推定できる。第3郭平坦面からは石垣6、堀切状遺構1か所、土坑1基、大小のピット多数が検出された。また、堀切状遺構の東側から第3郭平坦面との比高差約60～70cmの一段低い長さ約4m、幅約2mを計る平坦部を検出した。この平坦部からは小ピットが僅かに検出されたのみである。

第1郭及び、第2郭は花崗岩の地山を削って平坦面を造り出していたが、第3郭においては平坦面の北東側の地山面の自然地形は北東に向かって急激に落ち込んでおり、その先の平坦面は盛土となっている。土層観察によると、斜面を埋めた土には大量の粘質土が含まれていることから人工的に盛土が行われ、第3郭の東側の拡張が行われたものと考えられる。この拡張は堀切状遺構の機能している間に行われたとすると、堀切状遺構の機能は大幅に低下するため、拡張は堀切状遺構が機能しなくなった後あるいは、堀切状遺構が埋められるのと同様に行われたものと考えられる。

第3郭平坦面にも第2郭平坦面同様、大小多数の小ピットが検出された。ピットの形状、規模から柱穴と考えられるが、建物等の柱穴の組み合わせを明確にすることが困難なため、建物等の形態、規模等は推定しえなかった。

堀切状遺構

第3郭平坦面のほぼ中央の東端から約5mの所から西の方向に延び、長さ約9.5mで幅は東側で約2.5m、中央部で約4mであるが、西端から約2.5mの所から狭くなり、その西端は溝12の直上で途切れている。深さは約40～80cmで、底部はほぼ平らであるが東側から西側に向かって緩やかに低くなっている。また、中央より東においては幅5～20cm、深さ約10～20cmの溝が2本検出されている。

遺存する深さが最大でも約80cmと浅く堀切としての防御性に疑問は残るが、本郭の拡張に伴ってその役割を終えており、土層観察等によれば上面を削平されている可能性を有していることを考え合わせれば、外部からの侵入を防ぐ機能を想定することが自然であると考えられる。

堀切状遺構内埋土中からは若干古式の備前焼播鉢が出土した。

第7号土坑

堀切状遺構の南側の平坦面から検出された土坑で南北250cm、東西約320cm、深さ約40cmを計り隅丸方形の平面プランを呈する。底部には厚さ2～15cmの粘土層が検出されたことから水が溜まっていた可能性が考えられるが用途については不明である。土坑の北西肩には幅約10cm、深さ約7～10cmの溝2本が約3mの長さで検出されたが、その用途についても不明である。

石垣6

第3郭平坦面の西側から検出された石垣で、石垣面の方向はN10°W、残存する石垣の長さは北側先端部から約7.5m、地山面からの高さ70～100cmを計り、花崗岩の自然石を2～6段積み上げている。石垣の上面最高所のレベルは第3郭平坦面より約50cm低い。石垣の南端では地山の急斜面に張りつくように築かれており、裏込め石は使われていない。北側部分では石垣面から3.5～4.5mの後方から地山が少

しずつ落ち始めており、石垣と平坦面との間に部分的に石列が検出された。検出された石列は2列で30～60cmの角礫と河原石を使い、長さ110～150cmを計る。

通路状遺構3及び石垣7・8

通路状遺構3は第2郭から下ってきた通路状遺構2とほぼ直角に繋がっており、約16.5mの長さではほぼ南北に延びている。その北端からやや急な階段状の窪みをもった斜面を下りれば第5郭へ向かうことができたと考えられる。現状では通路の幅は0.8～1.5mを計り、通路の西側には幅約20～40cm、深さ約10～20cmの排水のためのものと考えられる溝11が検出された。この溝は通路状遺構2に伴う溝10につながるものである。この溝内より李朝井戸茶碗(48)、青磁碗(58, 62)、鉄鏝(97)、鉄製毛抜き(105)が出土した。

通路の北端から南へ約1mの地点で通路の両端に隅丸方形のプランを持つ小ピットが検出された。P1が25cm×30cmであるのに対してP2は40cm×50cmとやや大きいが底面レベルはほぼ同じである。この2つのピットは通路を挟んでほぼ同じ位置にあること、底面レベルがほぼ同じであること等から木戸の柱穴と考えられ、郭の配置等からこの部分が当城の虎口の役割を担っていたのではないと思われる。先述の通路状遺構2に木戸の存在が想定されているが、通路状遺構3の北端に設けられた木戸が通路状遺構2の木戸と同時に機能していたものか、あるいは通路状遺構2の木戸が機能しなくなった後に新しく設けられたものかは明らかではない。

通路状遺構3の東側からは石垣7・8及び、石積みが検出された。石積みは通路状遺構3の南端から約1mの地点を起点として約7.5m築かれ、これより北側8mに石垣7・8が築かれている。石積みは高さ約70～80cmを計り、10～50cm四方の角礫及び河原石を乱雑に積み上げた非常に簡単なもので、他の部分に見られる石垣とは対照的である。石垣7部分の現状は石垣面のラインと石積み部分最下部のラインとが一致しておらず、石垣面の方が石積みのラインよりも東側に約1mほどずれ、通路部分が若干広がっている。石垣7は地山面から約50cmほど盛土をした上に築かれており、30～70cmの高さで自然石を2～3段積み上げている。

石垣7の南端から約3.5mの地点で再び西側に張り出している部分の石垣を石垣8とする。石垣8は地山面から4～6段の石が階段状に傾斜して積み上げられている。石垣8最下部の石垣のラインと先に述べた石積み部分のラインとはほぼ一致している。通路状遺構3に伴うこれらの石垣には裏込め石は検出されなかった。

また、石積みから石垣7に変わる部分、石垣8に変わる部分及び、北端の部分にもそれぞれ一部分ではあるが東西方向の三つの石列が確認された。また土層観察によると石垣の積み方が変わる部分の石列に対応して平坦面が存在していることが確認された。このことから、第3郭を南側から北側に向けて石列の位置に対応した3回にわたる石積みあるいは石垣を使用した段階的な拡張の過程を想定することができ、石垣7のラインが石積み・石垣8のラインと一致しない理由は通路状遺構3の整備と第3郭の西側への拡張状況を反映したものといえよう。

なお、虎口の斜面下付近に大量の礫が検出されたほか、土層観察からも平坦面先端部分に礫群が認められることから、平坦面の北端には第3郭の拡張が行われた際に石垣或いは石積みが築かれていた可能性も考えられ、斜面下から検出された大量の礫は廃城後、

これらの石が崩れたものとも考えられる。また、通路状遺構3の埋土中からも大量の礫が検出されたが、これらは形状及び大きさから通路状遺構に沿って構築された石垣から崩落したものと考えられることができる。したがって、通路状遺構3に伴う石垣の上面は現状では第3郭平坦面よりも低い、最終的には第3郭平坦面とほぼ同じ高さであった可能性もあろう。

石積み・石垣7・8の裏側の埋土の下の地山面は第3郭及び北側に向かって緩やかに傾斜した幅1～2.5mの平坦面となっている。平坦面と先に述べた第3郭平坦面との比高差は南側で約2m、北側で約2.5mを計る。この平坦面の第3郭寄りの端には幅30～50cm、深さ約10～20cmの溝12が検出された。この溝12は平坦面の北端まで延びており、形状、規模から平坦面に伴う排水のための溝と考えられる。また、この平坦面は、通路状遺構3及び、石垣等が造られる前には第2郭と第3郭との間を分ける堀切の機能を有していたと推測される。通路状遺構2に伴う溝10の延長線上からは通路状遺構3を横切り、石積みの方向に向かう溝の痕跡が僅かに検出されている他、石積みの後ろの盛土の下から第3郭の石垣下に検出された溝12につながると考えられる溝が検出された。このことから、第3郭が拡張される以前は通路状遺構2の溝10は溝12とつながっていた時期があると考えられ、後に第3郭が西側に拡張され、溝12が機能しなくなるに伴い溝11が新たに造られ機能したものと考えられる。また、通路状遺構2の溝6の現況は溝11で切られてはいるが、そのレベルから溝12への連続性が推測され、通路状遺構2の石垣による改修が始まる前には溝12につながっていた可能性が強い。さらに、溝11と石垣5の位置関係から、石垣5は溝11に規制され通路状遺構3が整備され第3郭が西側に拡張された時期以後に築かれたものと推察することもできよう。

以上のことから、次のような石垣と通路状遺構2・3及び第2・3郭の関連を想定することができると思われる。

- (1) 石垣の伴わない通路状遺構2の構築に対応して、同じく石垣を伴わない通路状遺構3が構築される。
- (2) 通路状遺構2が石垣を持つようになって、通路状遺構3には石積み・石垣7・8のない時期がある。
- (3) 第2郭の石垣による拡張と前後して、第3郭の石垣による拡張も行われる。

なお、通路状遺構3を北から南に向かって進むと第1郭丘陵斜面に突き当たるが、その東側には通路に伴う溝がないため明確に判断できる程ではないが、第1郭斜面と石積みの間に第3郭へ上がる通路状のものが確認された。

この外、第3郭遺構面からは土師質の皿(25, 26)、青磁碗(61)、小札(101)、鉄製刀子(103)等の外、鉄釘が多数出土した。

第4郭

第2郭の北西側に配された郭で第2郭との比高差は約8.5mを計り、東西に延びる堀によって北西側の第5郭と隔てられている。

第4郭はほぼ平坦である。長さ東西約27m、幅は調査区内のほぼ中央部分が約6mと最も広く、西側は調査区外にも平坦面が続いているものと考えられる。本郭の東側は幅1～2mと次第に狭くなって通路状となり第3郭側の虎口への上がり口へとつながっ

ている。

平坦面からは、南北方向に幅約30cm、深さ約5cm、長さ約5mを計る溝と、堀に沿った方向に幅40～60cm、深さ約5cm、長さ約8.5mの溝、平坦面中央の堀側に長径2.5m、短径1.6m、深さ10～15cm、及び長径1.7m、短径1.2m、深さ15～20cmの窪み、平坦面東端から長径1.7m、短径1.2m、深さ20～30cmの、10～15cm程度の小角礫が充満した土坑を検出した。いずれもその性格は不明である。また、遺構面からの出土遺物はほとんどなかった。

堀

堀は第4郭の西側から北側にかけて検出された。長さ約46m、幅3.5～4.5m、深さ0.8～2.8mを計る。堀埋土の土層観察によると、堀の底には粘質土層及び砂質土層が検出され、現在でもかなりの湧水があるので、当時は水堀であった可能性が高いと考えられる。堀の方向は検出された堀の北東端から約15mの地点までは概ねN26°Eを示すが、これより南西側ではN50～35°Eを示し大きく変換している。また、変換部の第4郭側の土坑内には先述の礫群が検出され、対岸の第5郭側にも長さ約5m、幅0.8～1mを計る石積み状の礫群が検出された。さらに、堀のほぼ中央付近の第5郭側に長さ9mを計る石垣9が検出された。断面形は南西側ではV字型を示す薬研堀であるが、第4郭側の堀肩から約1m低いレベルでV字の角度が広がる交換点が明瞭に確認された。また、堀の方向の変換部付近を境として堀底の幅が広くなり、箱薬研状の堀となる。さらに、堀の深さもこの変換部より約10m北側で約1mの急な段差がついて0.8～1.1mと浅くなっており、堀底からは粘質土層等は検出されなかった。

これらのこと及び土層断面の観察から、堀は少なくとも1回以上の改修が行われていることが考えられる。当初は、方向変換部南西側、第4郭を囲む位置に造られたV字型の深い堀が埋まっていった後に、何らかの情勢の変化のなかで北東側へ拡張されたものと考えられる。その際の堀が、深さ1m前後と浅い箱薬研堀である。

第3郭北西側からも溝状の落ち込みの一部が検出された。調査範囲外に北側の壁があるため幅については明らかではないが、検出した部分からの推定では4m以上あるものと思われる。深さは第3郭側堀肩から約2.5mを計り、方向は概ねN80°Wであるが、西端において北方に大きく変換している。形状及び規模から堀の一部と考えられる。土層観察によると、粘質土及び砂質土の堆積が堀底と堀肩から約1.5m下のレベルで認められることから、第2郭側から検出された堀と同じく水堀であった可能性が高く、先述の第4郭周囲の堀と同様に改修があったと考えられる。

なお、第2郭側及び、第3郭側から検出された堀の接点は検出されなかった。調査区外にある可能性も考えられるが、第2郭側の堀の深さが北東側で浅くなっていることから土橋の存在も想定できるが、調査区内では土橋を検出するには至らなかったため断言はできない。

この堀の延長部分を確認するために、第3郭の東側においてトレンチ調査を行った結果、上部幅2.4～2.7m、底部幅約0.4m、深さ約1.9mを計る堀の一部と考えられる落ち込みを検出した。形状、規模が第4郭周囲から検出された堀とほぼ一致することから、第3郭北西側の堀の延長部分となる可能性がある。

また、第3郭北西側の堀の南側には通路状遺構3から虎口を通り、堀底まで下っ

く階段状の遺構が検出され、第2・3郭と堀底を結ぶ連絡路とも考えられるが、水堀であった堀底に下りる必要性について疑問があり、その性格については明言しがたい。なお、階段状遺構が平坦地にさしかかる部分で両側に30～40cm四方、深さ約40cmを計る一対の小ピットが検出された。形状、規模からは柱穴と考えられ、階段状遺構の途中に設けられていることから木戸に類するものを想定することもできよう。

堀中の埋土からは、瓦質の鍋(30)の外、備前焼の破片等が出土した。

第5郭

第5郭は堀の北西側に配された郭で第5郭の平坦面は調査区外北側にも広がっている。調査前の地表観察によると調査区外の北側及び調査区の西側で明らかな段が認められ、また、この段は検出された堀のラインに概ね沿ったものであることから、第5郭の範囲はこの段と堀に囲まれた部分と考えることができよう。

本郭は、調査区の北東・南西側では地山を削った平坦面が検出されたが、中央部分の遺物包含層の下は堀付近から北側に向けて地山が急激に落ち込んでいた。この地山の落ち込みは第3郭東側同様自然地形と考えられ、かつてこの部分は谷地形であったと思われる、その谷部分を埋めることによって調査区内の第5郭のほとんどは造られたものと考えられることもできる。第5郭と第4郭との比高差は約30cmを計る。

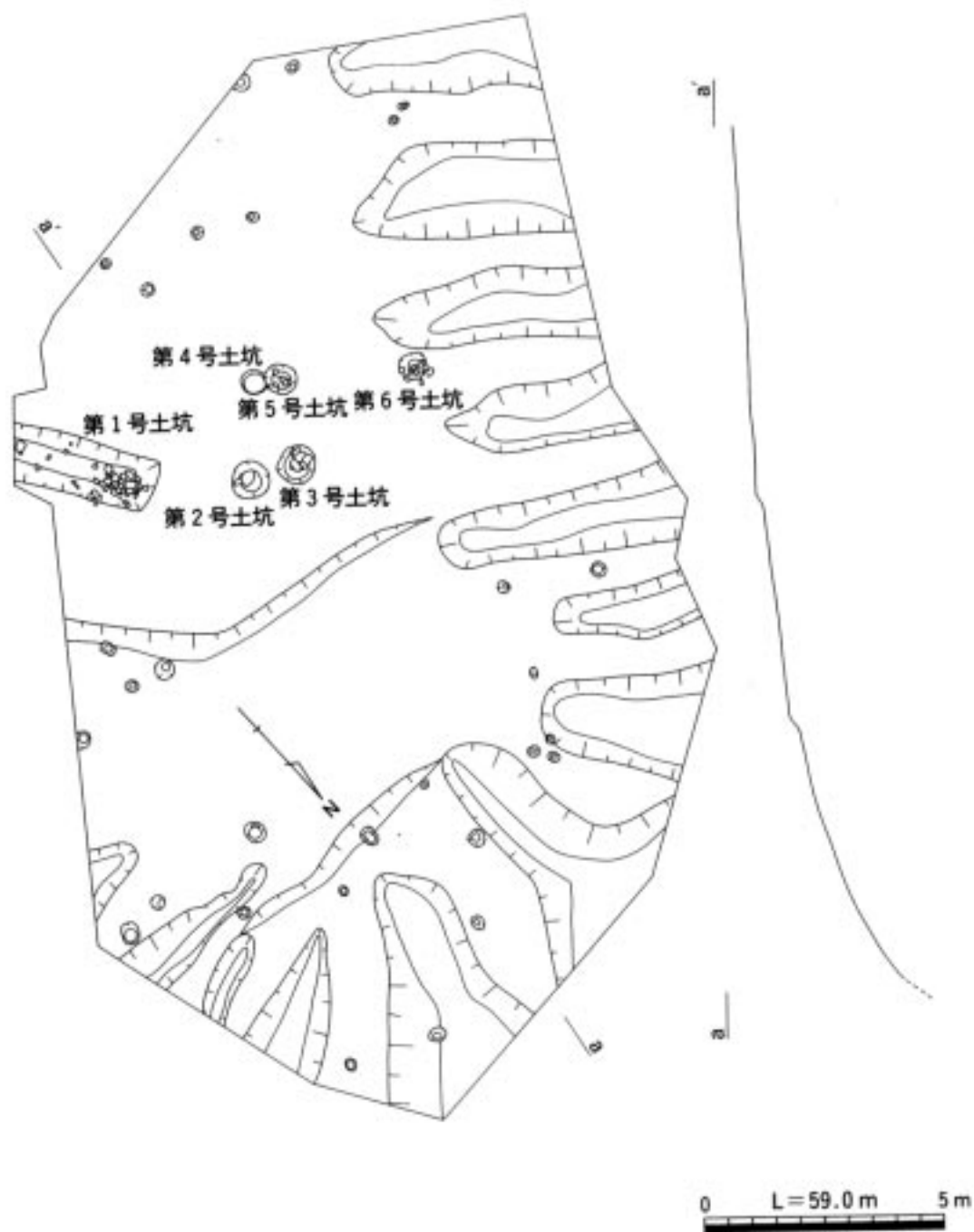
地山及び埋土による平坦面からは大小多数のピットその他、2か所から溝及び、井戸1基が検出され、先述のとおり堀の落ち際には石垣9が検出された。西側の溝はT字型を呈し、幅30～50cm、深さ20～40cm、堀に沿った方向の長さ約6m、堀と直交する方向の長さは約3mを計る。東側の溝は、概ね堀の方向に沿ったもので、幅約10～25cm、深さ約5cm、長さ約6mを計る。この溝の性格は不明である。

石垣9

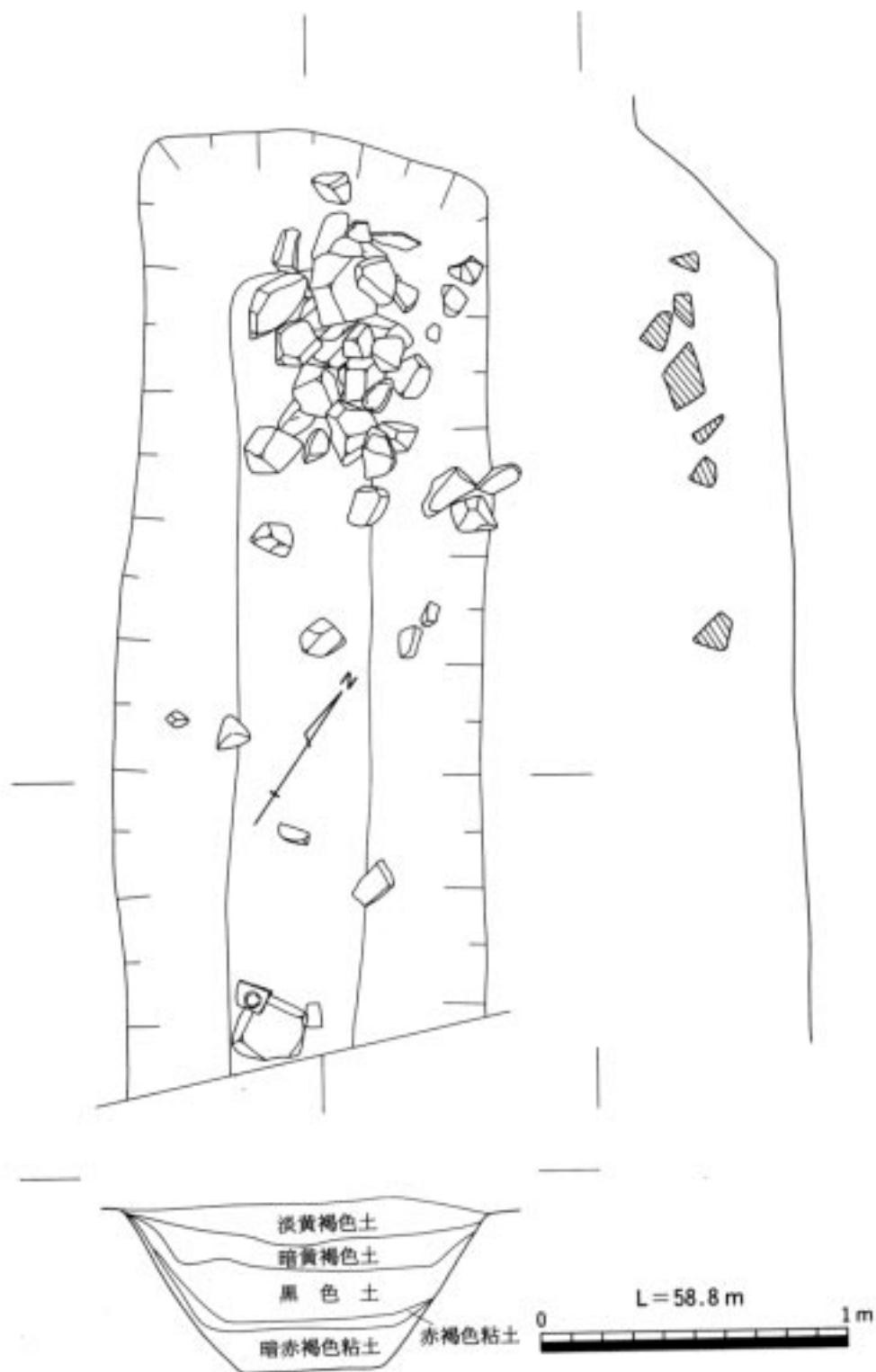
堀の築造に伴う石垣と考えられ、第5郭の南西側の地山が堀に沿って落ち込み始める所から約9mに渡って検出された。石垣は現況で高さ45～110cmを計り、ほぼ地山面から自然石を2～5段積み上げている。堀底から石垣の基底部までは約1.5mを計る。地山が落ち込んでいる部分に石垣が造られた理由は、先述のとおりこの堀が水堀であったため、堀の壁を補強するためと考えられる。なお、石垣の西側の裏側には2m四方の範囲で礫群が検出された。石垣と礫群の上面レベルはほぼ一致しているが、その性格は不明である。

第2号井戸

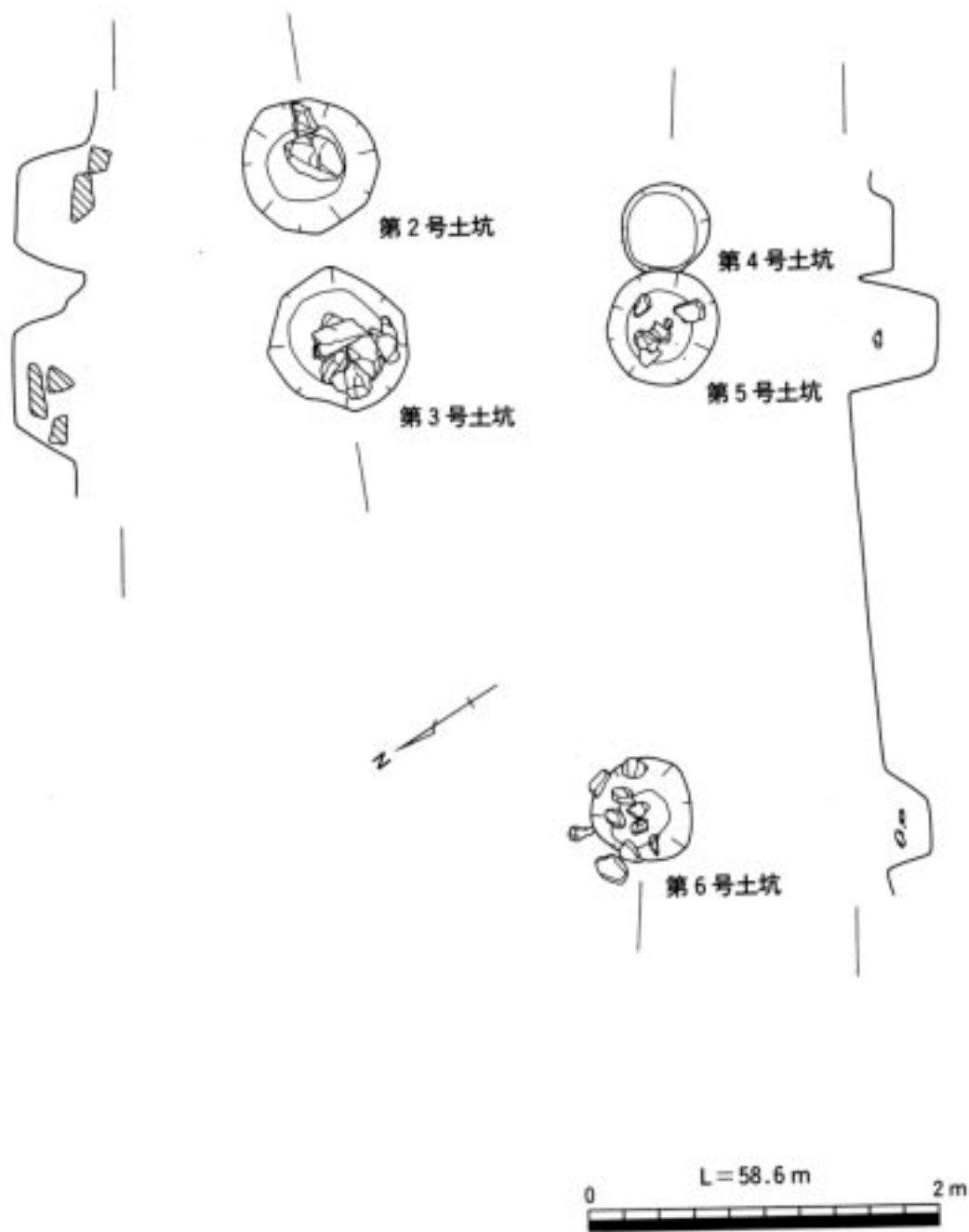
第2号井戸は堀が大きく変換する部分の北側から検出された。井戸南側の堀の落ち際には先述の礫群が検出され、井戸の西側からも石列が長さ約5mに渡って検出された。礫群、石列及び井戸の上面のレベルがほぼ一致していること及び、検出状況からこれらは一体のものとして造られた可能性もある。井戸は地山を掘り込み、石組みによって造られている。井戸の上面の内径は長径100cm、短径70cmを計り、底径は50cmを計る。深さは約1.8mを計り、10～11段の石が積まれており、石材は10～70cm四方の花崗岩の自然石である。また、井戸の底の地山面から湧水が認められた。この外、第5郭遺構面から備前焼甕(38)、備前焼播鉢(41)、白磁皿(73)、鉄鏃(96)等の他、備前焼、青磁等の破片が多数出土した。



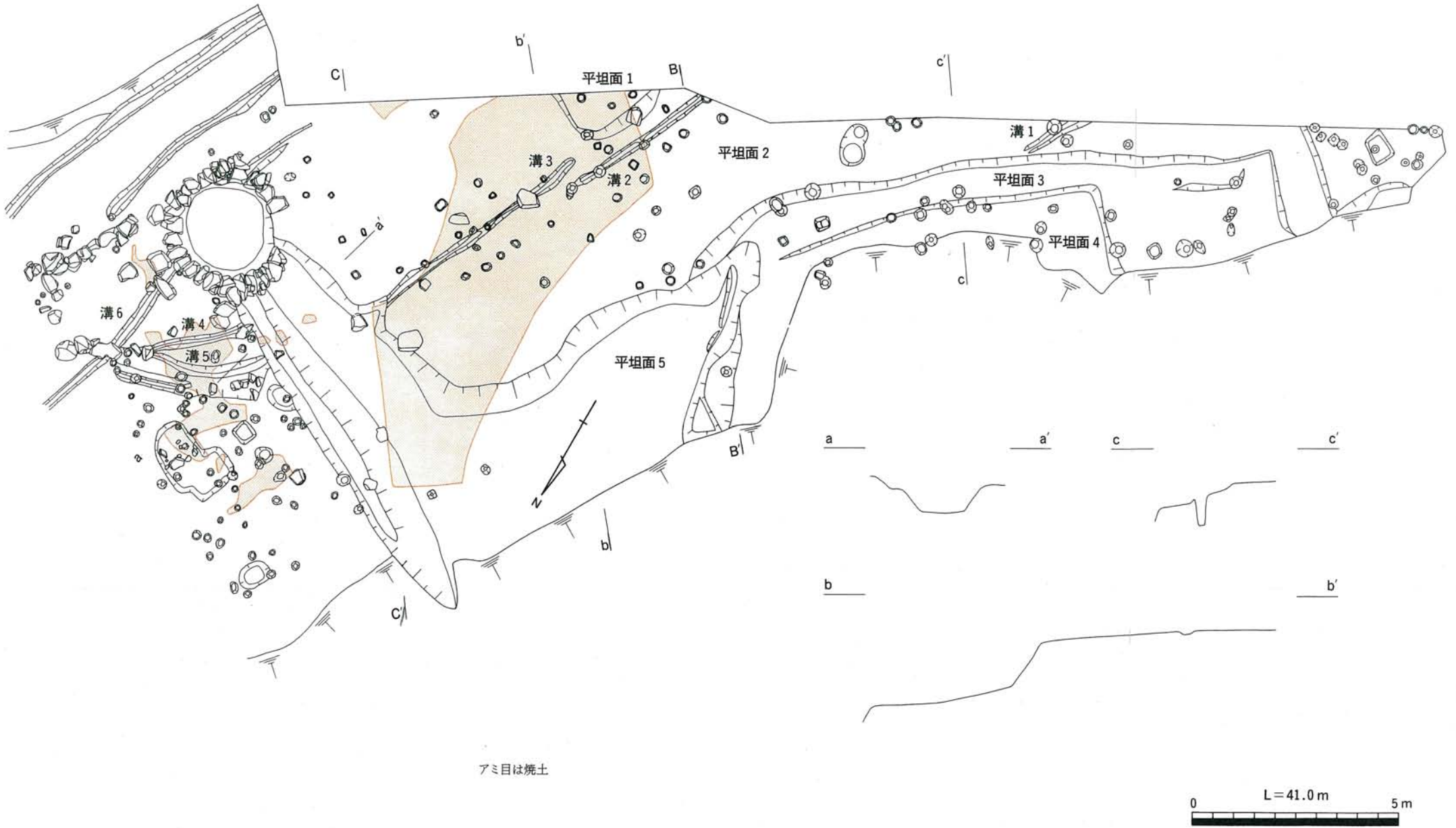
第5图 第1郭实测图



第6图 第1号土坑实测图



第7图 第2~6号土坑平面图

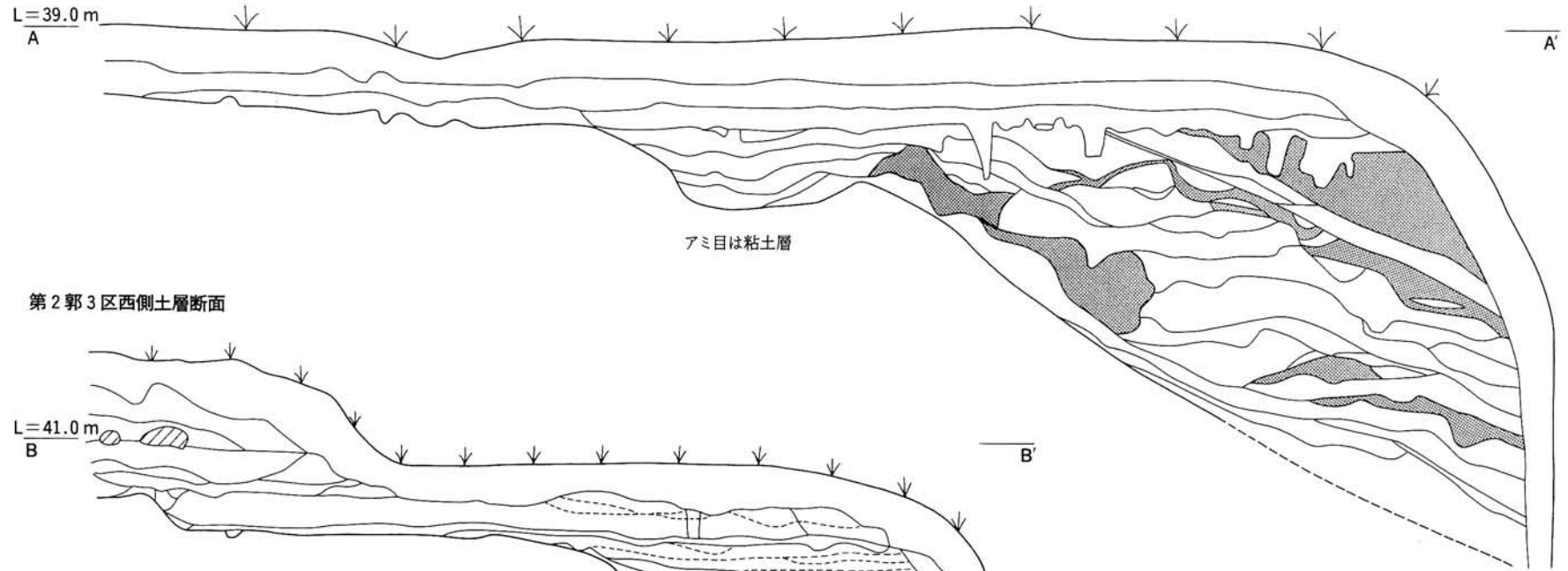


第8図 第2郭実測図(南西側)

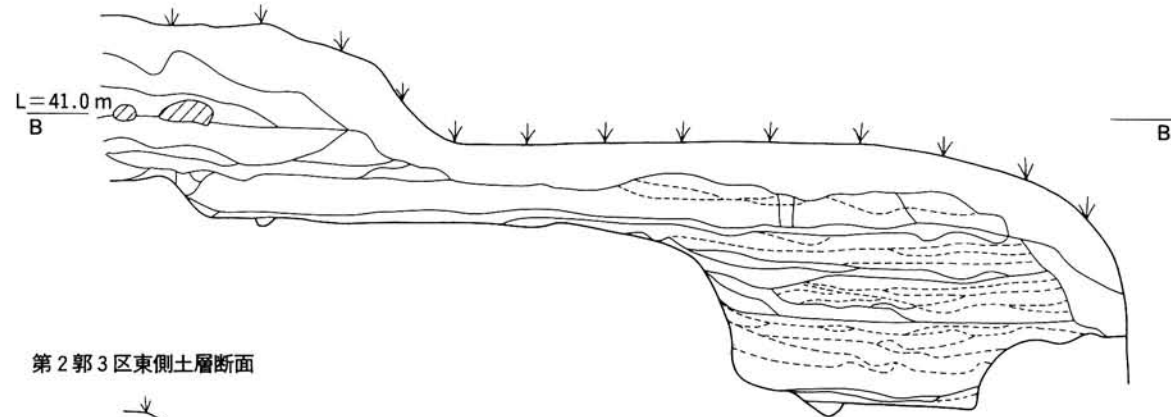


第9図 第2郭実測図(北東側)

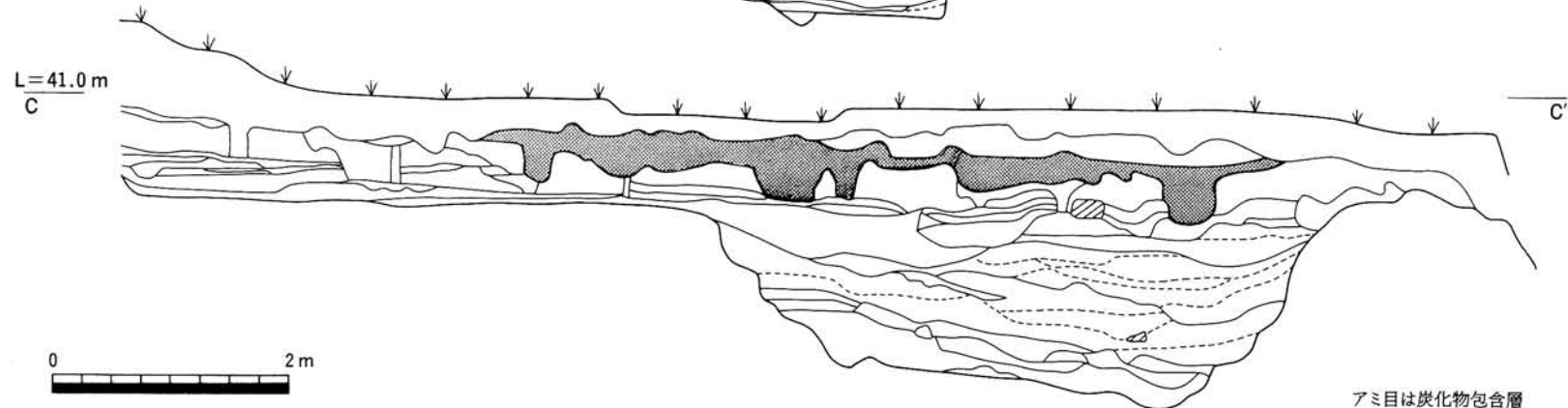
第3郭土層断面



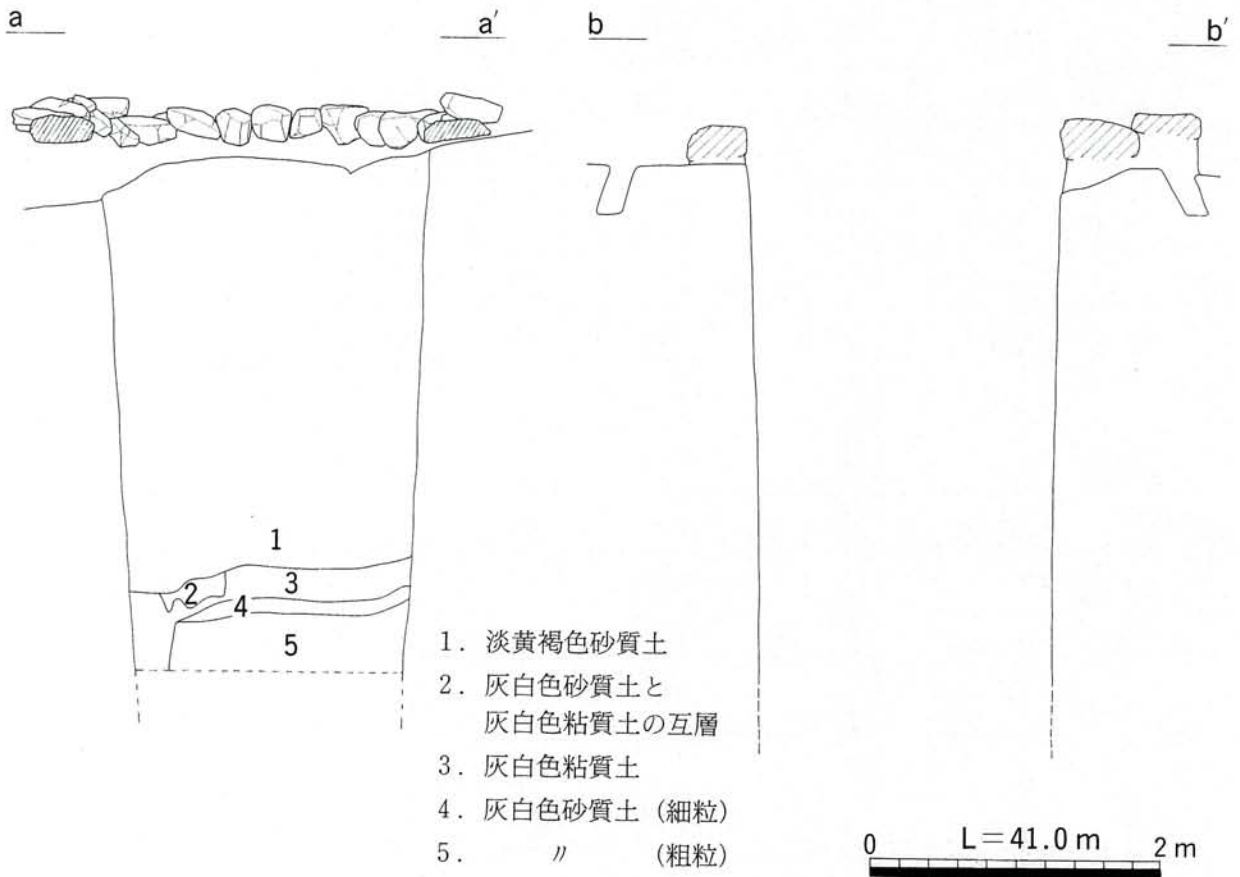
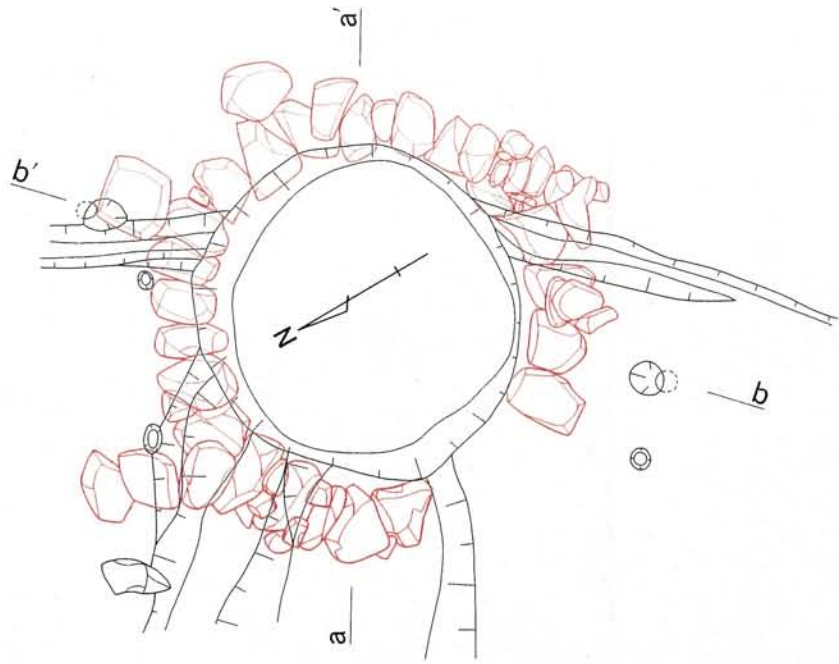
第2郭3区西側土層断面



第2郭3区東側土層断面



第10図 第2・3郭土層断面図



第11図 第1号井戸実測図

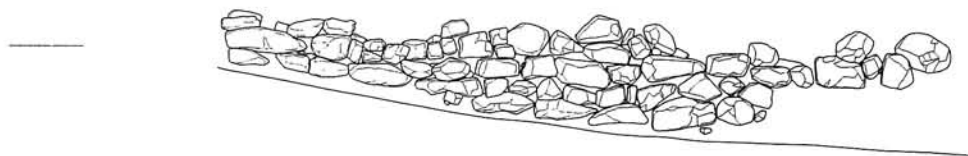


第 12 図 通路状遺構 2・木戸跡実測図

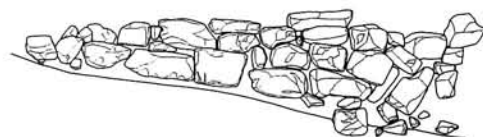


第 13 図 通路状遺構 2・石垣断面実測図

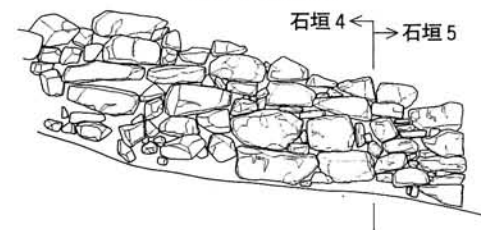
石垣2



石垣3 (南東面)



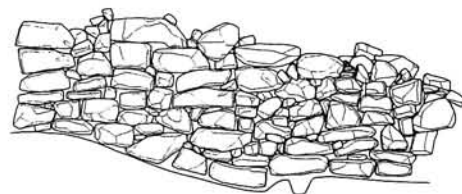
石垣4・5 (南面)



石垣4 (東面上半部)

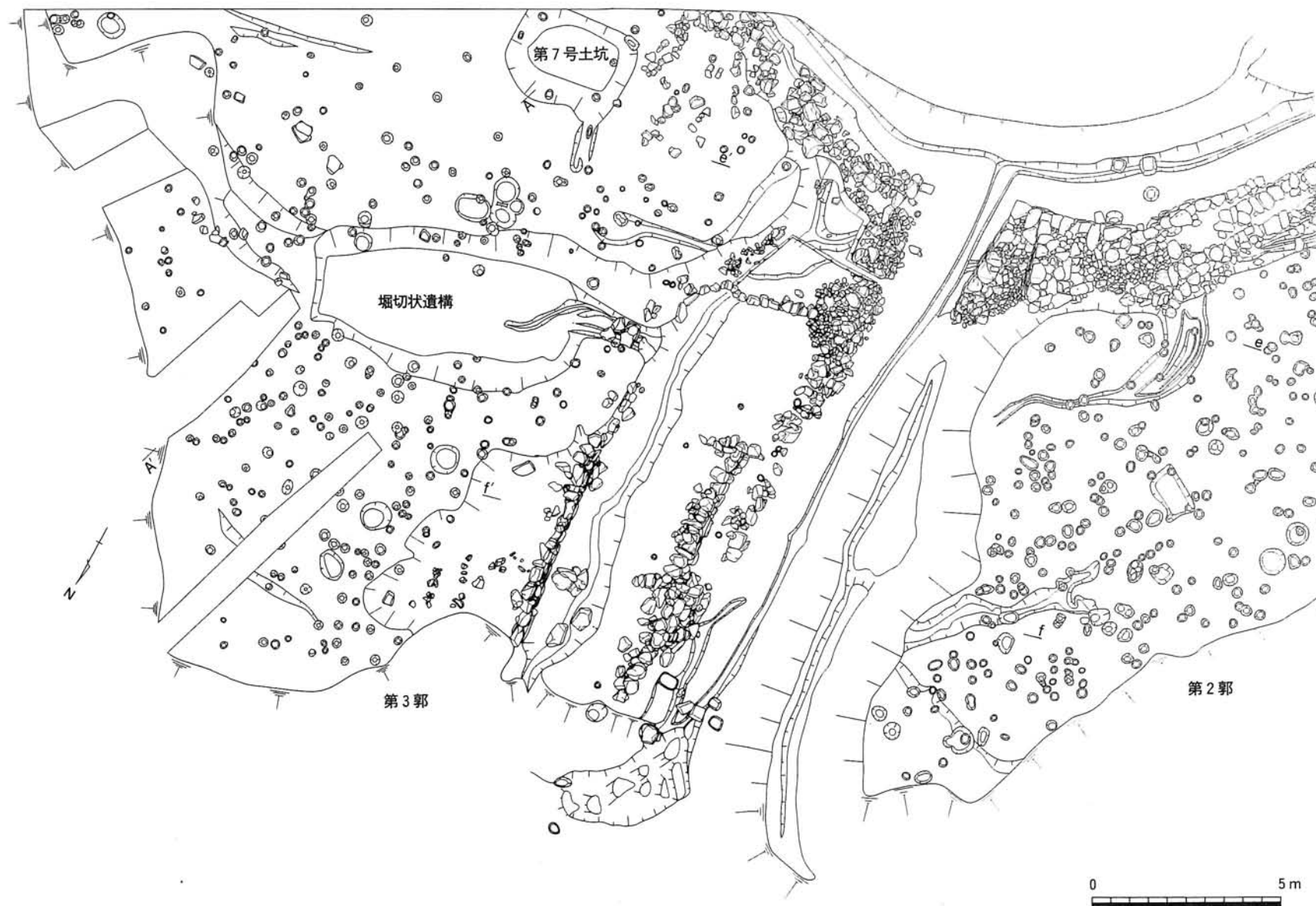


石垣5 (東面)

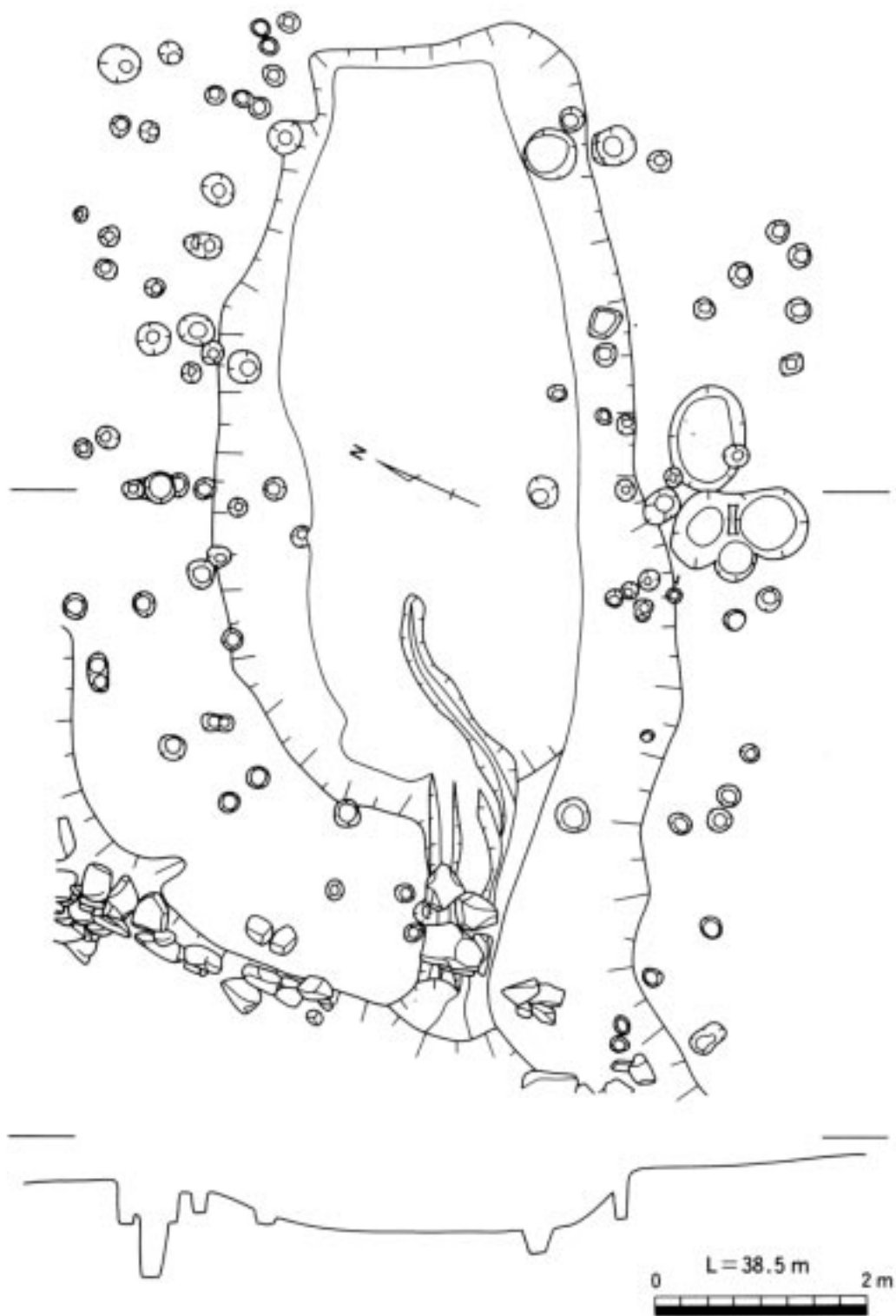


0 L=40.0 m 2m

第14図 石垣2～5 立面実測図



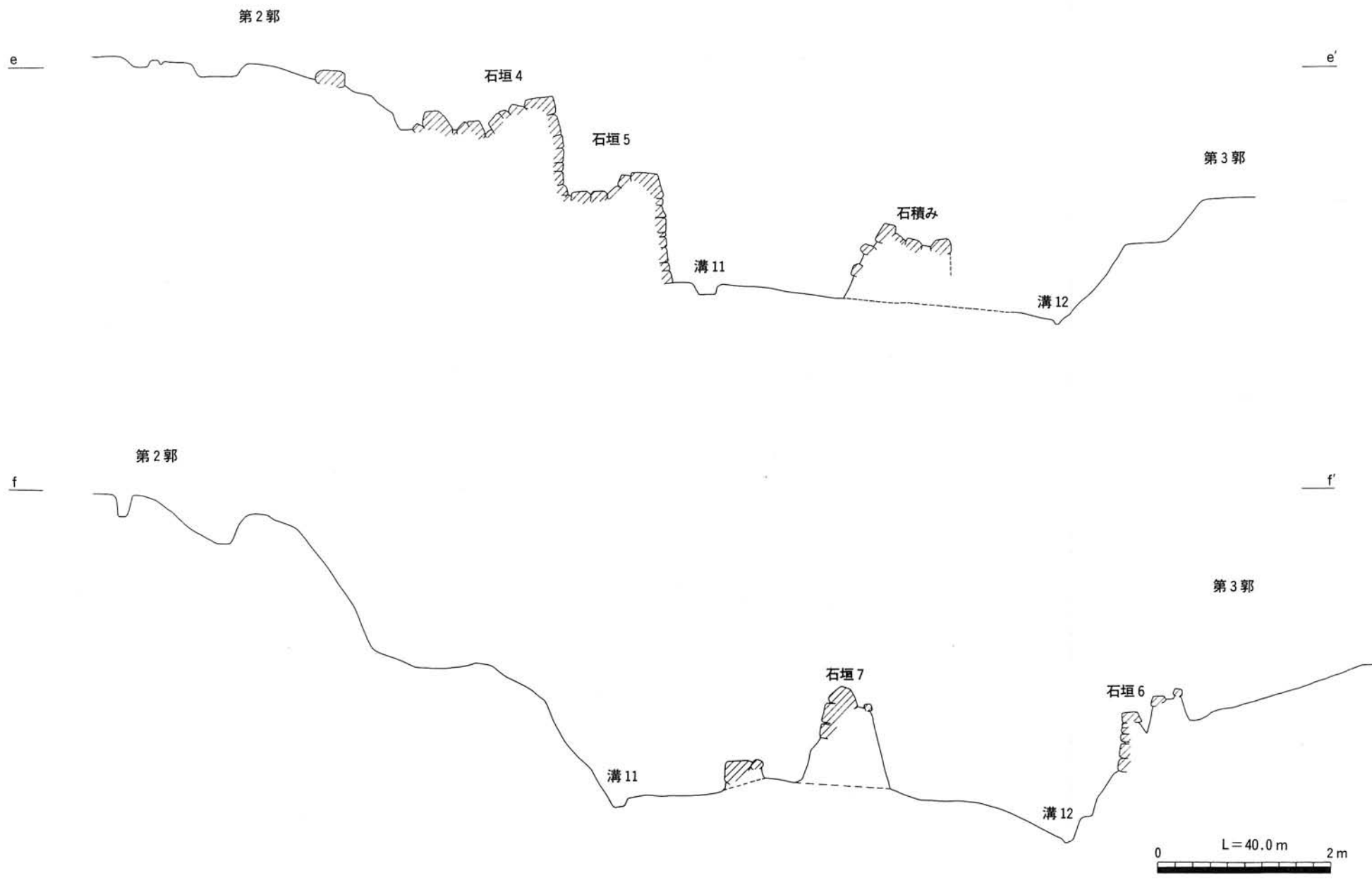
第15图 第3郭実測図



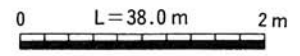
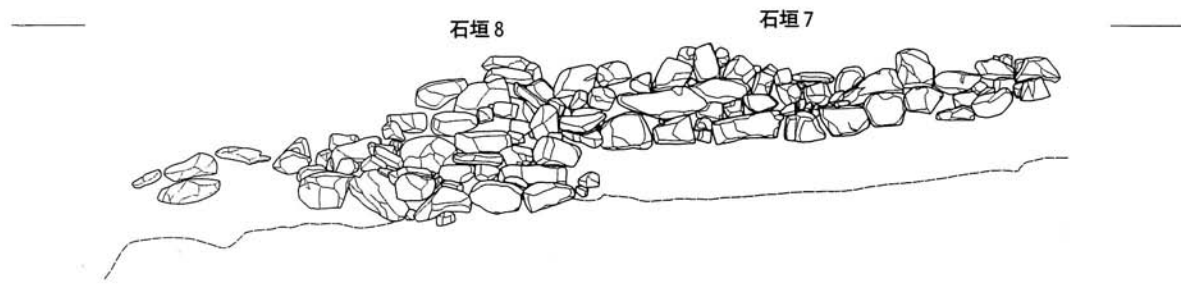
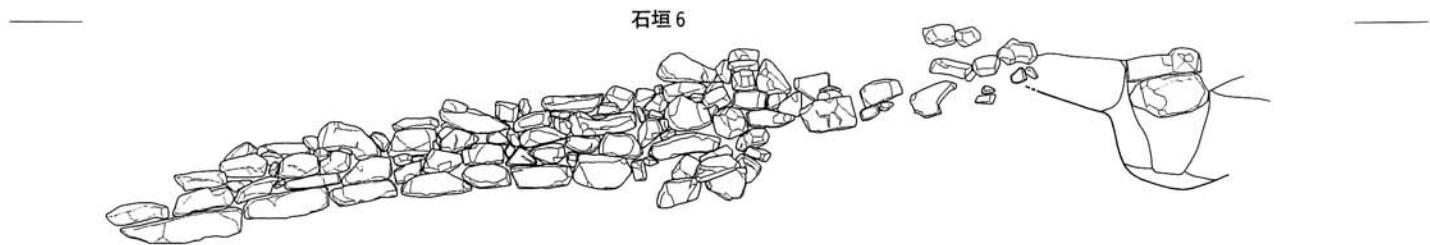
第16図 堀切状遺構実測図



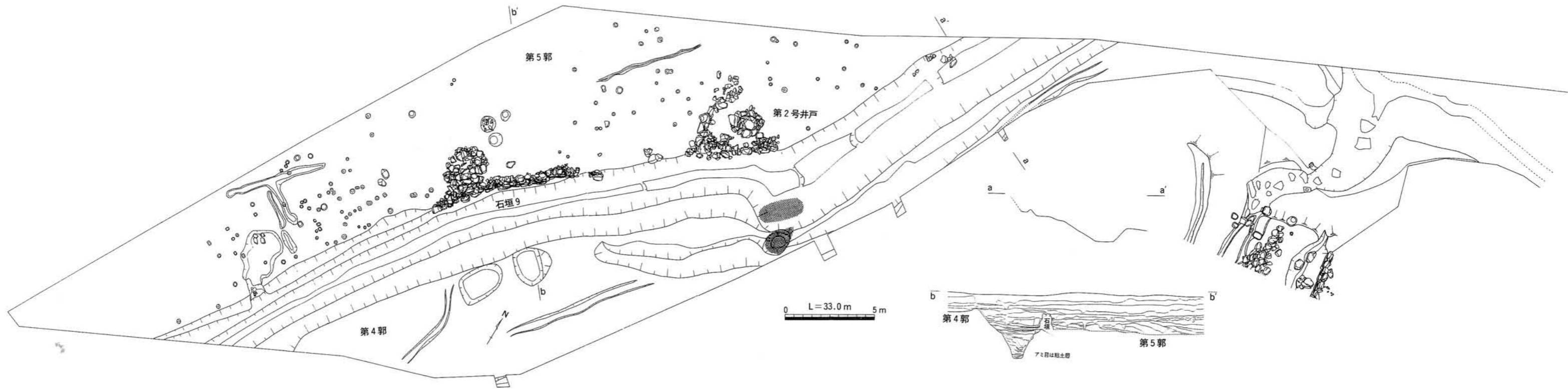
第17図 通路状遺構3実測図



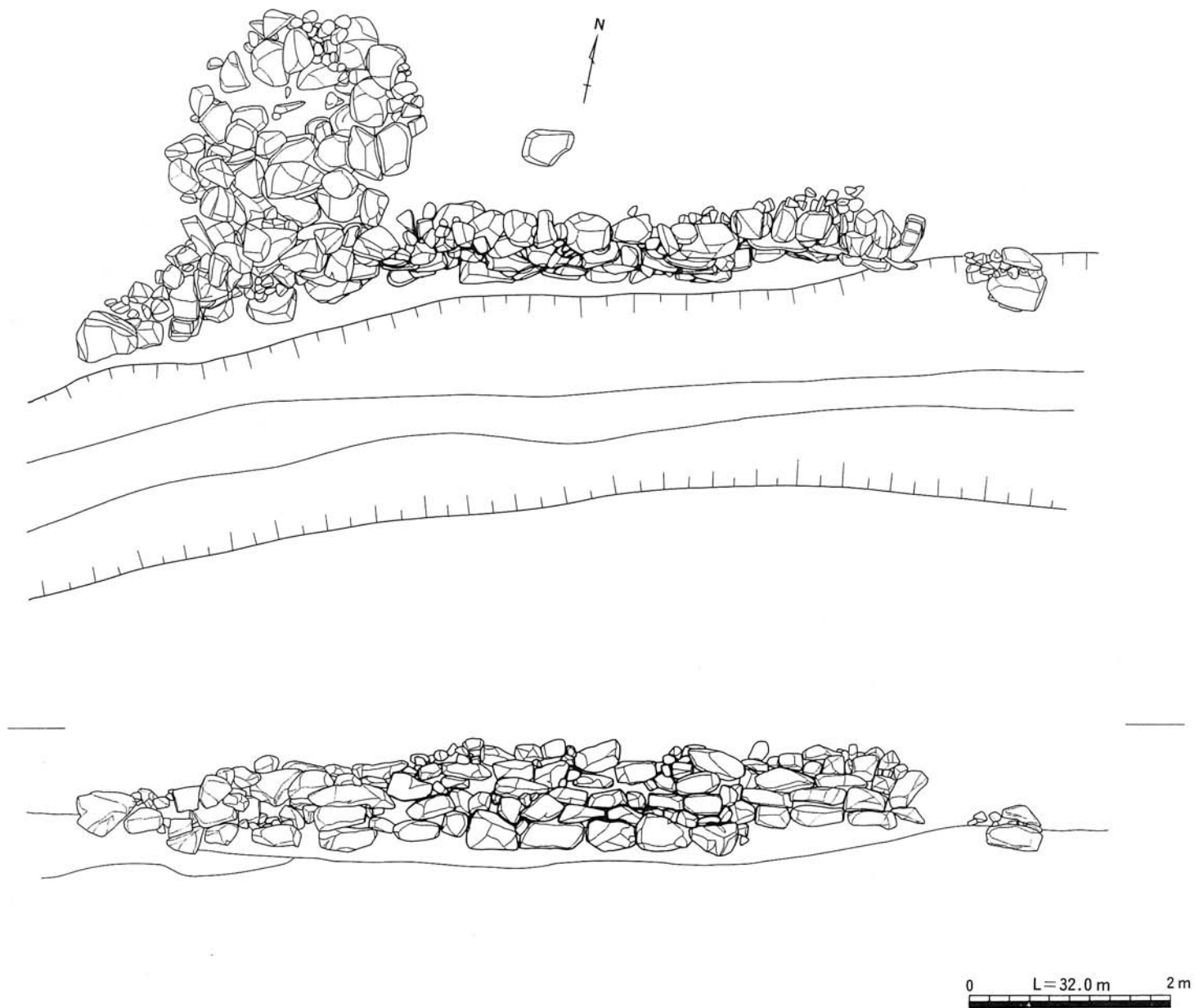
第18図 通路状遺構3・石垣断面実測図



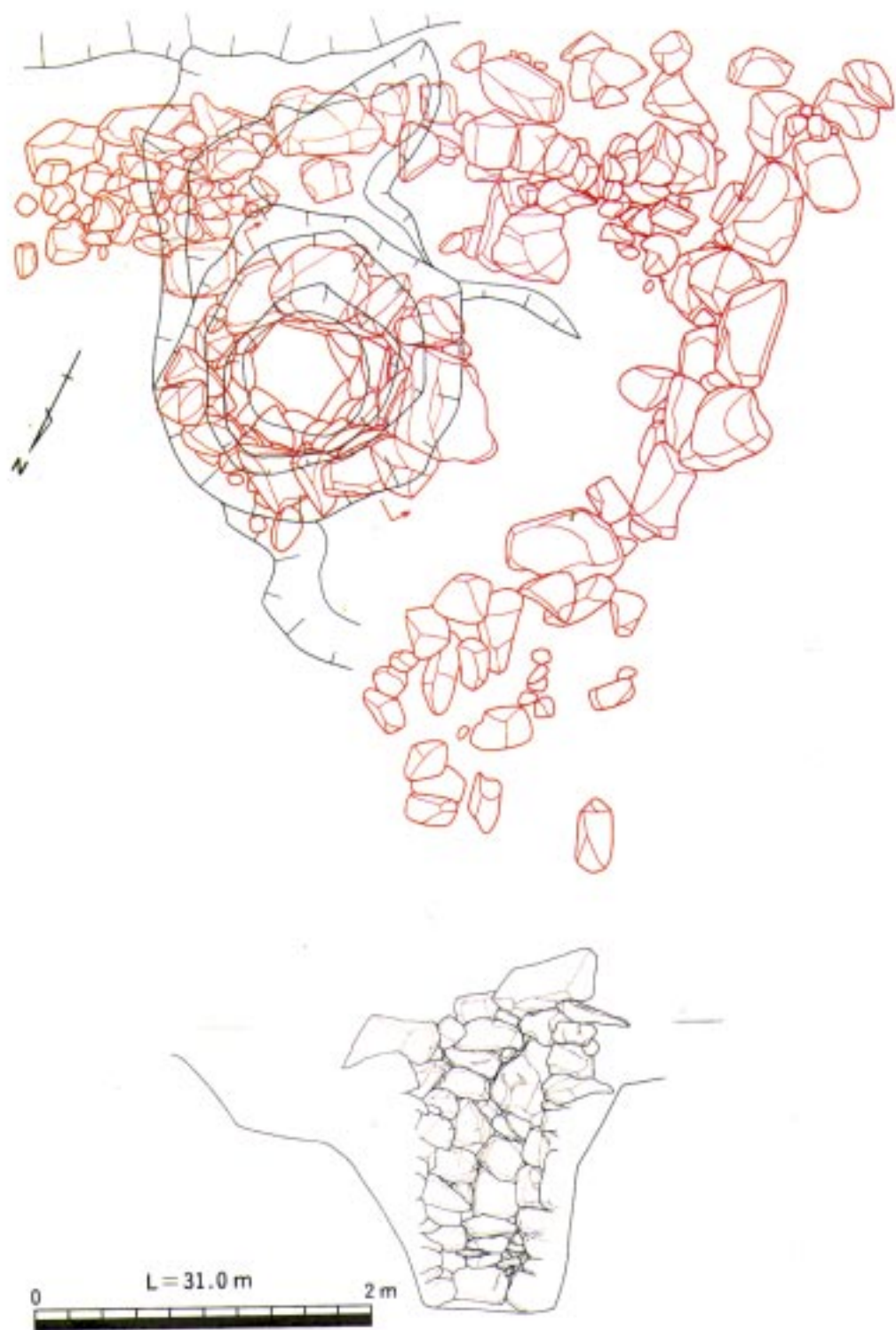
第 19 图 石垣 6~8 立面实测图



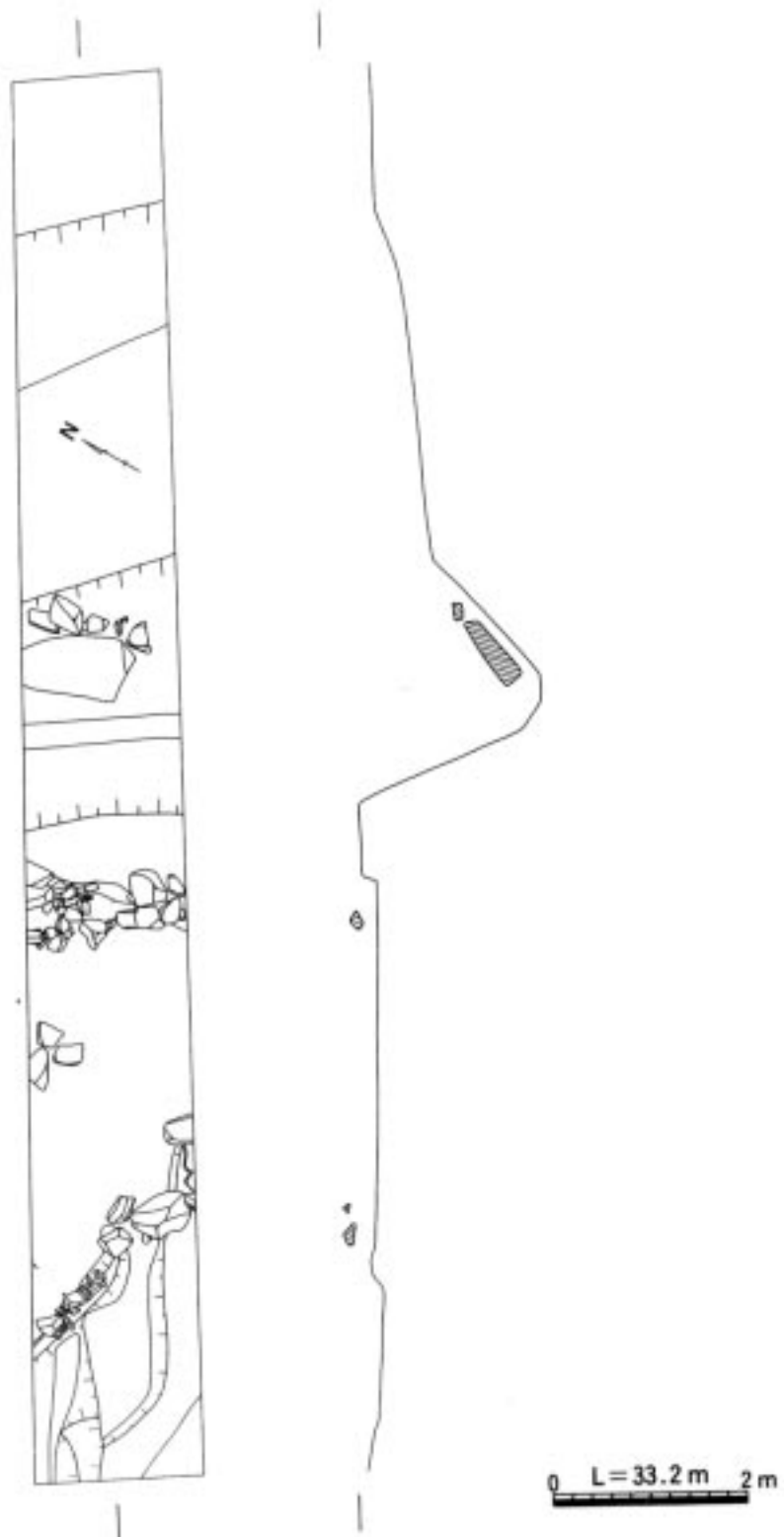
第20图 第4・5郭实测图



第21图 石垣9実測图



第 22 图 第 2 号井井架视图



第 23 図 トレンチ内遺構実測図

IV 遺 物

今回の調査により出土した遺物は、土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、土製品、石製品、金属製品などである。量的には備前焼を中心とする陶磁器が最も多く出土している。いずれの遺物もほとんどが細片であるため図示し得ないものも多く、その一部を以下の種類別の概要、及び観察表によってまとめてみた。

1. 土師質土器

土師質土器はいずれも皿であり、概ね口径6.5cm前後、器高1.3cm程度のものと、口径11cm前後、器高2.5cm程度のものが大半を占めるが、口径18.0cm、器高4.3cm(22)の大型のものが見られる。色調は赤褐色～淡黄褐色のものが多く、胎土は概して前者が粗く、後者が密である。また、焼成はほとんどが軟調である。体部の形態は、直線的なものが一番多く、次に内湾するものとなり、外湾気味のものは僅かである。成形は、いずれもロクロによるもので、底部切り離し方法は、回転糸切りのもの(1～3, 14～16, 19, 20, 25～27)、回転糸切り後ハケ目調整したもの(7, 28)、回転糸切り後ヨコナデしたもの(22)、回転ヘラ切りのもの(12, 17, 23, 24)がある。

皿の用途は、一般に供膳用とされているが、祭祀用としての用途も考えられており、本城跡の土師質皿がどちらの用途で使用されていたかは不明である。しかし、体部内面及び口縁部にススの付着が見られるもの(18)は、灯明皿として使用されていたものと考えられる。

2. 瓦質土器

瓦質土器には、鍋、搦鉢、香炉、火鉢がある。これらの土器は、褐色系～黒灰色系の色調を呈する。鍋は、口縁部は肥厚しながら外反させて端部を上方に拡張させ凹み気味に仕上げた亀山焼系の口縁部をもつもの(29)と、口縁部は肥厚しながら外反させて端部を平たく仕上げたもの(30)がある。29は第1号井戸跡付近の焼土層から、30は第2号井戸跡付近の堀底から出土しており、いずれも外面にススの付着が顕著に見られ、煮沸用と考えられる。搦鉢(31)は、口縁端部を短く内側へ折り曲げて断面三角形の突帯を巡らせ平たくおさめており、山口県、北九州地域の15～16世紀の遺跡からの出土例が多い。香炉(32)は、精良な粘土でつくられ、体部外面を丁寧な磨いている。底部にはおそらく三本の脚が付いていたと考えられる。火鉢は数点出土したが、細片のため図示し得なかった。

3. 陶器

陶器には、備前焼、常滑焼、唐津焼、輸入陶器がある。

大部分を占める備前焼には、壺(33～35)、甕(36～40)、搦鉢(41～45)が見られた。壺は、口縁部がほぼ直立するもの(33)と口縁部が外反し、肩部に櫛歯状工具により数本の条線を巡らすもの(34・35)があり、いずれもIV期(14世紀後半～16世紀初頭)に属すると考えられる。甕の口縁部は、ほぼ直立するか、やや内傾気味で長く折り返して幅広の玉縁をつくりIV期末の特徴をもつが、37についてはやや丸みをもつ玉縁であり、IV期後半と考えられる。また、40は2郭の通路状遺構2の溝10から出土したものであるが、胴部に突帯を巡らし輪状の耳を張りつけた形態から、

一般に水屋甕と呼ばれる器種と考えられⅤ期初頭（16世紀前半）に比定される。また、39は第1号井戸内埋土の灰白色粘質土から出土した甕の底部でありⅣ期に比定される。播鉢の41は、口縁端部を平たく仕上げてⅢ期末の特徴を具備する。42は口縁部が若干肥厚し端部を凹み気味に仕上げている。Ⅳ期の中でも先行する特徴をもつ。43・44は、口縁部を上方に大きく拡張させて下方にも粘土を垂らしたものでⅣ期の特徴を示しており、このタイプが最も多く出土している。45は口縁端部に面をとり平たく仕上げている。外面にロク口整形痕を巡らすことからⅤ期と考えられるが、胎土が比較的精良であるのでⅤ期でもかなり早い時期の特徴を示している。

本城跡から唯一出土した常滑焼の大甕（46）は、口縁部を大きく外反させ、口縁端部を上下に拡張させて幅広く平らに仕上げている。常滑編年のⅢ期の特徴をもち、13世紀後半～14世紀のものと考えられる。第3郭の埋土中から出土した唐津焼の皿（47）は、底部内面に鉄絵を描いた後灰釉を施しており、16世紀末～17世紀初頭の特徴をもっている。

輸入陶器には、李朝井戸茶碗（48・49）と中国製天目茶碗（50）がある。48は全体に灰白色釉を施し、素地の橙色に焼成した部分が淡く見える。49は、内面に淡黄白色釉、外面に淡灰白色釉を施している。前者は16世紀、後者は16世紀後半に製作されたものと考えられる。50は黒色釉を二度掛けしており、14～15世紀に製作されたものであろう。

4. 磁器

磁器には、青磁、白磁、染付がある。

青磁（51～70）は、いずれも龍泉窯系の碗、鉢、皿である。この外の器種として盤も出土したが、細片のため図示するにはいたらなかった。時期的な傾向をみると、概ね14世紀代に位置づけられるものが最も多く出土し、次に16世紀中葉～後半のものが多い。15世紀末～16世紀前半のものはあまり多くないといえるであろう。

碗の69は、復元口径16.0cm、器高9.1cm、高台径6.2cmを測り、淡緑褐色を呈する釉を施し、体部内面に雷文を描き、底部内面に4つの文字を陰刻したと思われるスタンプを押捺しているが判読しがたい。14世紀前半の製作と考えられる。52は淡緑色釉を厚く施し、外面に雷文が描かれている。67は淡青緑色釉を施し、底部内面に菊花文を描く。いずれも14世紀のものである。55は濃緑灰色釉を施し、外面に14の蓮弁文を描き、底部内面に「顧氏」の文字が型押しされており、61は淡緑色釉を施し、外面に幅広の4つの蓮弁文を描き、底部内面に菊花文がある。63は緑灰色釉を施し、貫入が見られる。いずれも14世紀後半のものである。56は淡緑色釉を施し、底部内面の釉を削り取って重ね焼き痕が見られる。57・64とともに14～15世紀の製作である。53は暗緑色釉を施し、外面に若干幅広の蓮弁文を描き、15世紀末～16世紀初頭のものである。62は淡灰緑色釉を施し、貫入が入る。68は濃緑灰色釉を施し、外面に蓮弁文を描く。いずれも16世紀前半と考えられる。54・58・59は灰緑色系の釉薬を施し、細かい蓮弁文を描き、16世紀中葉の製作である。65は灰黄緑色釉を施し、外面に不鮮明な蓮弁文を描いた16世紀後半のものである。

鉢の66は淡緑褐色を呈する釉を施し、外面に幅広い蓮弁文を描き、古い龍泉窯の特徴を呈する。13世紀末～14世紀初頭のものである。51は緑灰色釉を厚く施し、貫

入が見られる。14世紀後半の製作と考えられる。

皿の70は、淡緑灰色を呈する釉を施した15世紀後半～16世紀前半のものであり、60は淡青緑色釉を施し、波型に削り取った口縁端部をつくり口縁部内面に旋状に沈線を巡らした16世紀後半の製作である。

白磁には、碗(71)と皿(72・73)がある。

71は貫入した白色釉を施し、口縁端部を玉縁に仕上げた碗であり、12世紀前半(南宋)の製作である。72・73は淡緑灰色釉を施した皿であり、72は復元口径12.2cm、器高2.8cm、高台径5.5cmを測り、底部内面の釉薬を中心部を残してドーナツ状に削り取っている。いずれも14世紀前半(元)のものである。第2郭の焼土層から出土した碗(74)は、外面にコバルト顔料による波文を描き、口縁端部には口紅を施した景德鎮窯系の染付であり、16世紀後半の製作年代と考えられる。

5. 土製品

土製品では、2郭2区北西隅から土錘(75・76)が2本出土した。いずれも管状を呈する。75は淡赤褐色の色調を呈し、焼成・胎土とも良好であり、全長3.9cm、最大径1.0cm、孔径0.3cmを測る。76は淡黒褐色の色調を呈し、焼成・胎土ともやや不良であり、全長5.0cm、最大径1.1cm、孔径0.3cmを測る。魚網用の錘と考えられる。

6. 石製品

石製品には、硯、砥石、石臼、石鍋がある。石鍋は、細片のため図示するにはいなかった。硯(77)は、3郭1区の北東部埋土中から出土したものである。縦9.7cm×横4.0cm×高1.3cmの小振りな泥質岩製の長方硯であり、非常によく使い込まれている。砥石は3点出土した。78は3郭1区から出土し、泥質岩製で3面を使用している。79は2郭井戸内から出土したものであり、流紋岩製で4面を使用している。80は2郭2区の遺構面上から出土し、砂岩製で3面を使用している。石臼も3点出土した。81(3郭2区)・82(2郭3区)は安山岩製の茶臼の下臼受鉢縁片である。81の復元口径は31.8cmを測る。83は2郭3区から出土したもので、礫岩製の粉挽き臼の上臼である。長期間使用して磨滅したためか臼面に目がみられない。側面には挽き木を横から打ち込んだと考えられる挽手孔がある。外面は部分的に赤色を呈し、火を受けた痕と考えられる。

7. 金属製品

金属製品には、鉄製品・銅製品・鉛製品がある。

鉄製品では、釘、鏃、小札、刀子、鎌、毛抜き、締金具等が出土している。

釘(84～90)は、鉄製品のなかで最も多く、約570本出土している。郭ごとの出土数でみると、1郭[約40本]、2郭[約210本]、3郭[約210本]、4・5郭[約110本]となっている。身部はいずれも断面方形で、頭部は身部の端を片側に折り曲げて作り出されている。

鏃は、形態から鏃身が三角形を呈するもの(91～93)、Y字状に開いた二股のもの(94・95)、逆三角形を呈し刃部が雁股に若干開くもの(96・97)、逆三角形を呈し刃部が茎と直交するもの(98)に分けられる。8本のうち、6本は3郭から出土している。

小札（99～101）は、完形のものがないため全長は不明であるが、いずれも幅2.1cm、厚さ0.15cm程度で、0.2cm程度の小円孔を2列ずつ穿っている。刀子（102・103）は、刃部の断面が三角形を呈し、茎部については欠失しており不明である。鎌（104）は、刃部断面が三角形を呈する。毛抜き（105）は、先端部から屈曲部までの長さ9.4cm、先端部横幅1.4cmである。同様なものが、一乗谷朝倉氏遺跡本屋敷跡外濠から出土している。締金具（106）は加井妻城跡等からも出土しており、武器などの鉄部と木部の合わせ部分を締めつけ、はずれないようにするためのものである。

この外、鉄滓がかなり出土しており、城内で小鍛冶を行っていた可能性もあると考えられる。

銅製品では、筭、小柄、鋌、目釘、鞋、飾金具、古銭等が出土している。

筭（107～109）は、いずれも断面は片側を平らにし、その反対側に少し丸みを付けている。108は僅かに金の痕跡が残る。109の丸い側には連続した型押文がみられる。小柄（110）は、第1郭第1号土坑内で出土したもので、刃部は欠失している。鋌（111～113）、目釘（114）は、いずれも頭部中央が若干盛り上がる。114は鍍金された金銅製品である。鞋（115）は二つの紐穴があり、鎧の止め金具である。116は、表面に鍍金を施しており、長押等の釘隠として用いられる四葉金具の金銅製品である。

古銭は42枚出土し、銅製品のなかでは最も多い。このうち、判読可能なもの21枚を第3表に掲載した。時代ごとの内訳は、唐銭2種3枚、北宋銭10種16枚、南宋銭1種1枚、明銭1種1枚である。このうち、北宋銭は全体の約73%を占めている。C15（元豊通寶）は二文銭で他の元豊通寶より一回り大きく、日本では流通しなかったようである。C20（景定元寶）には「元」の背文がみられる。

この外、3郭南側の礫群中から銅滓が出土している。

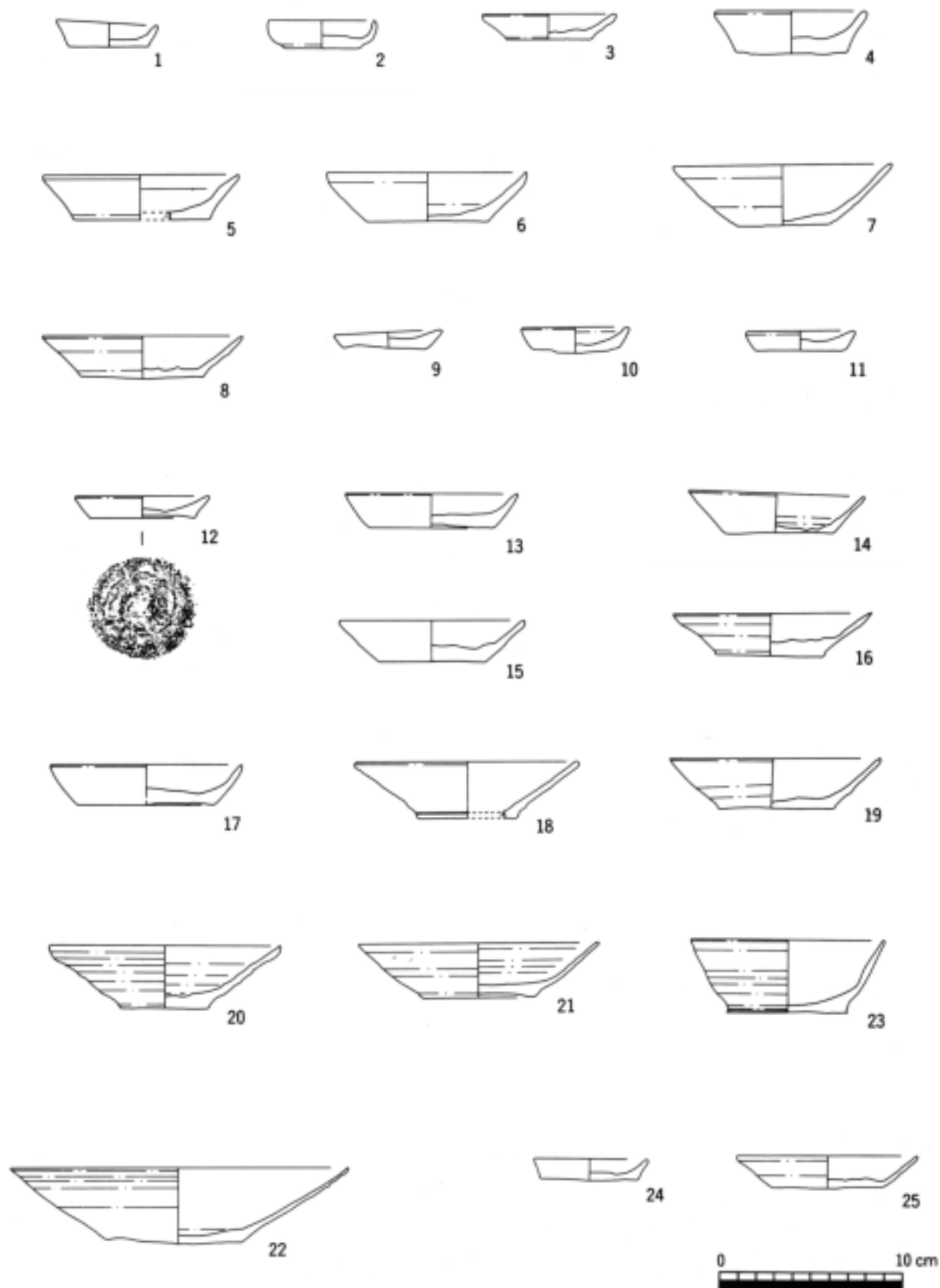
鉛製品では、火縄銃の玉（117）がある。5郭トレンチの堀外から出土したもので、直径約1.3cmの球形であるが、平らな部分が一か所ある。

注

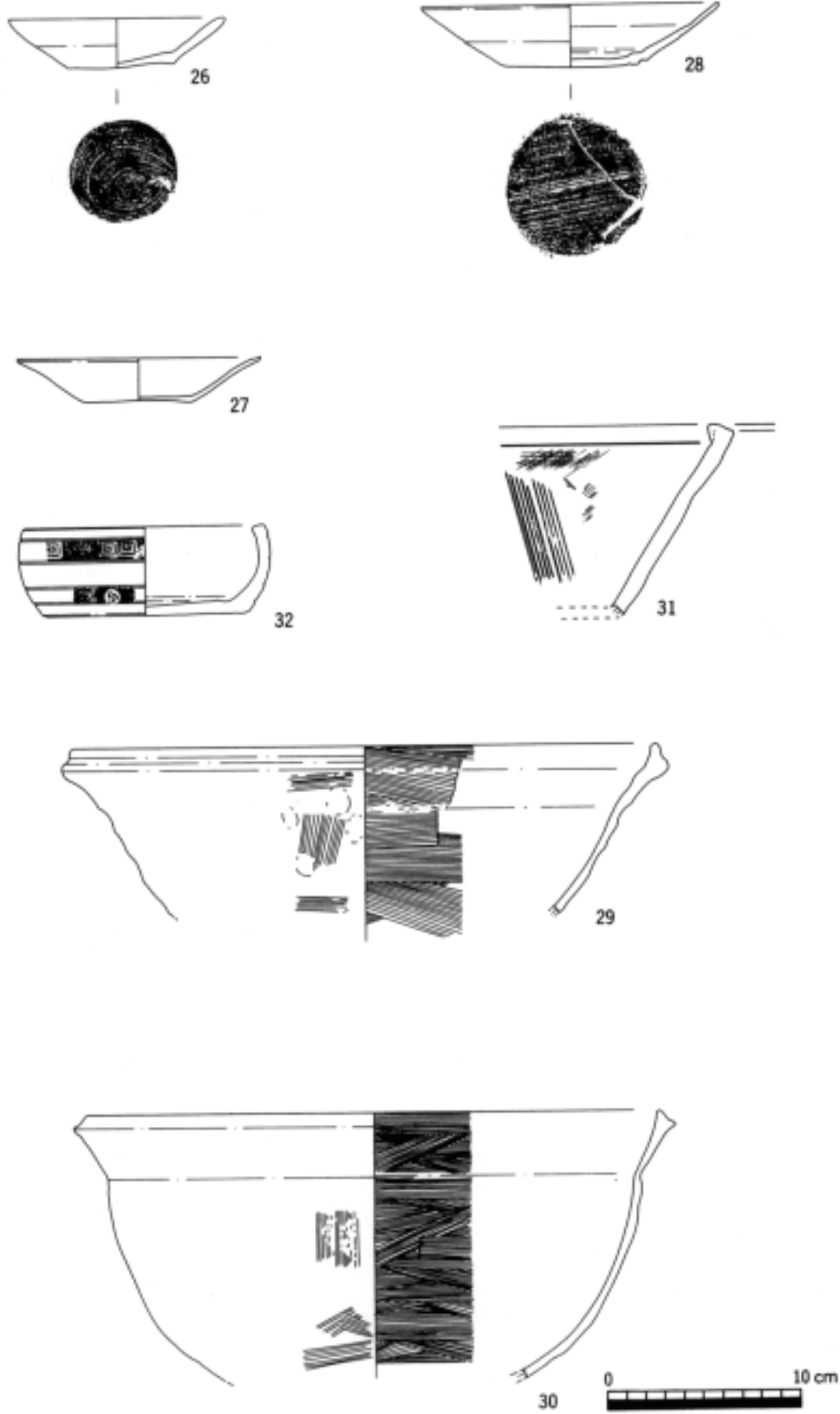
- (1) 草戸千軒町遺跡では、土師質土器の器種（皿、杯、椀）について法量を用いて分類しているが、当城跡の場合、資料数も少なく皿の範疇を外れるものはほとんどないと考えられるため便宜的に全て皿として取り扱った。
- (2) 鈴木康之「土師質土器の用途に関する研究ノート」(1)、(2)（調査研究ニュース『草戸千軒』No. 197, 198）1989
- (3) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 鈴木康之氏のご教示による。
- (4) 注(3)に同じ。
山口市教育委員会『大内氏館跡』Ⅶ1987
大分県教育委員会『安岐城跡』1988
- (5) 間壁忠彦『考古学ライブラリー60 備前焼』ニュー・サイエンス社 1991
- (6) 愛知県陶磁資料館 井上喜久男氏のご教示による。
- (7) 東京国立博物館陶磁室 矢部良明氏のご教示による。
以下、輸入陶磁器の製作時期、形態、窯名については、同氏のご教示による。
- (8) 広島県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(2) 1979

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡』 1979

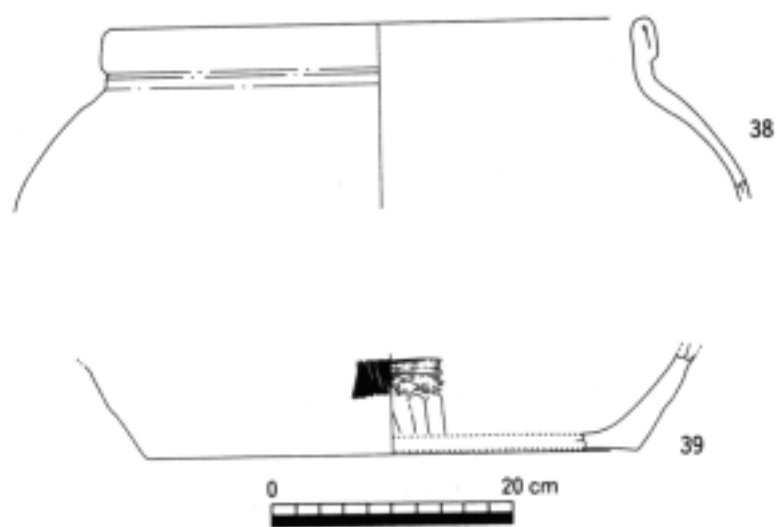
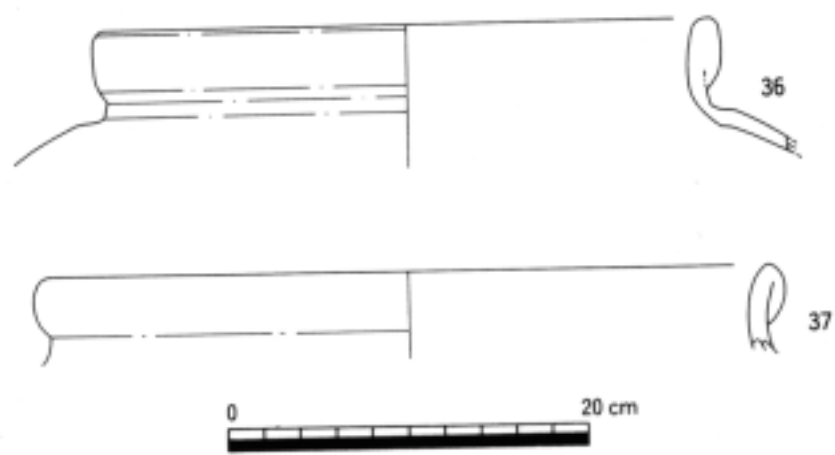
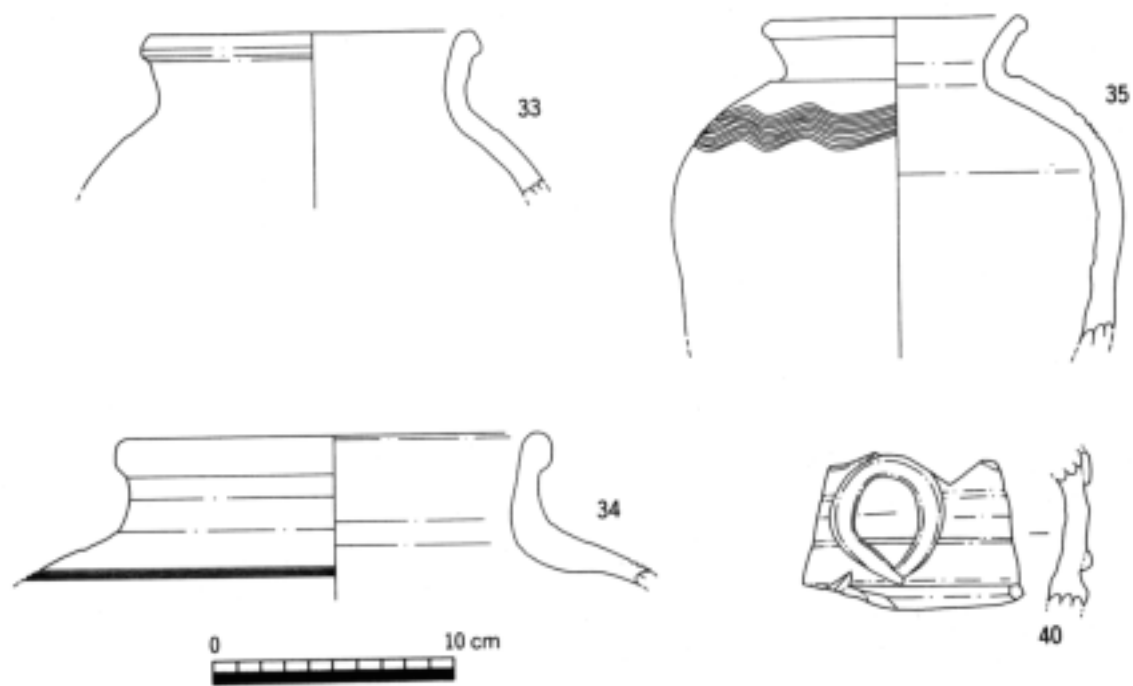
- (9) 尾形禮正「出土渡来銭の観察」『考古学ライブラリー45 出土渡来銭』ニュー・サイエンス社
1986



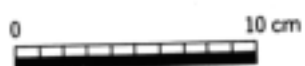
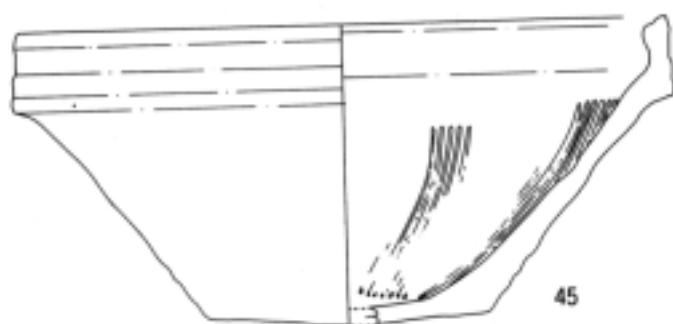
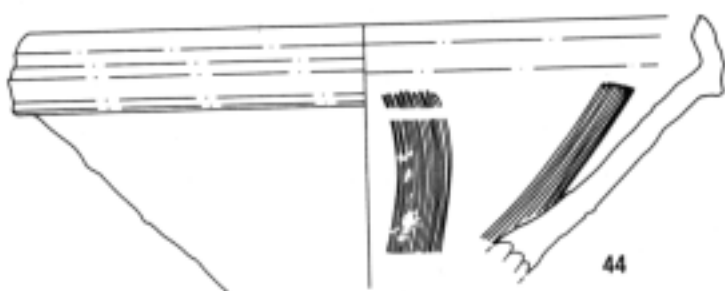
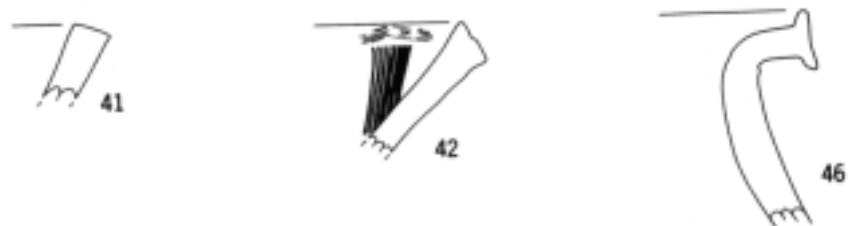
第 24 圖 土師質土器実測図



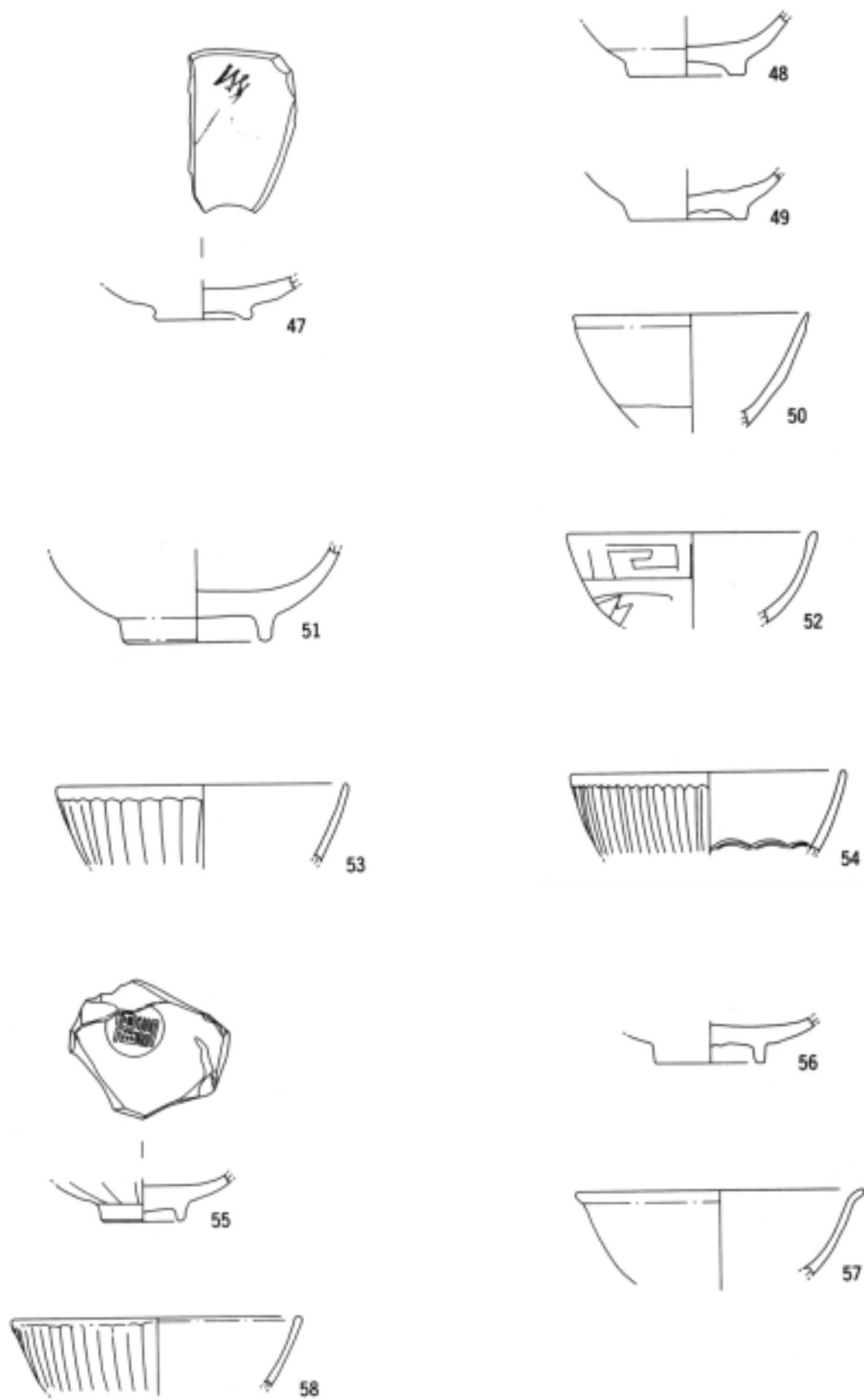
第 25 圖 土師質・瓦質土器実測図



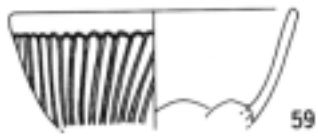
第 26 图 陶器实测图 (1)



第 27 图 陶器实测图 (2)



第28回 陶器・磁器実測図



59



1



61



60



62



64



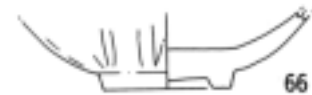
63



67



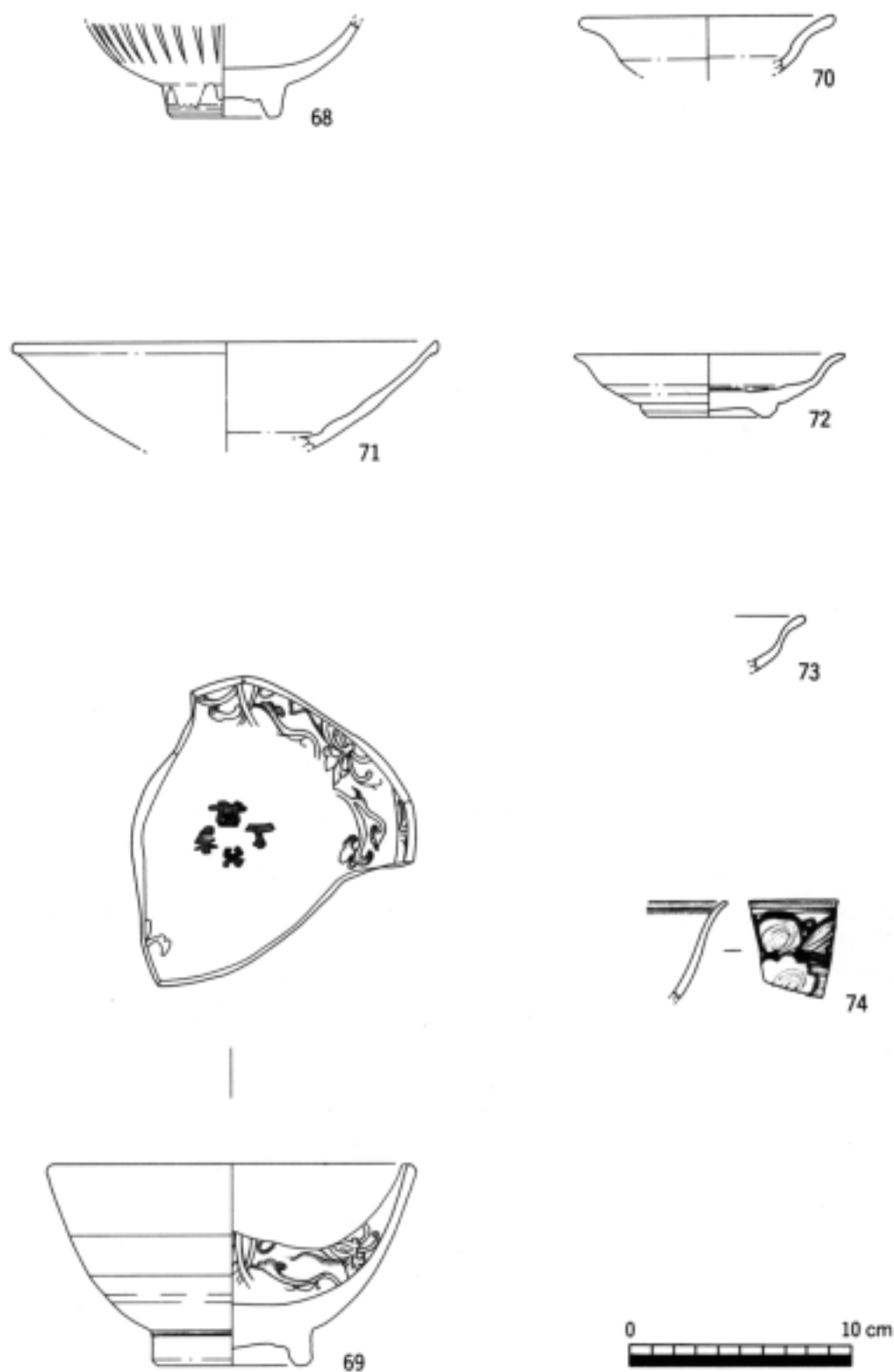
65



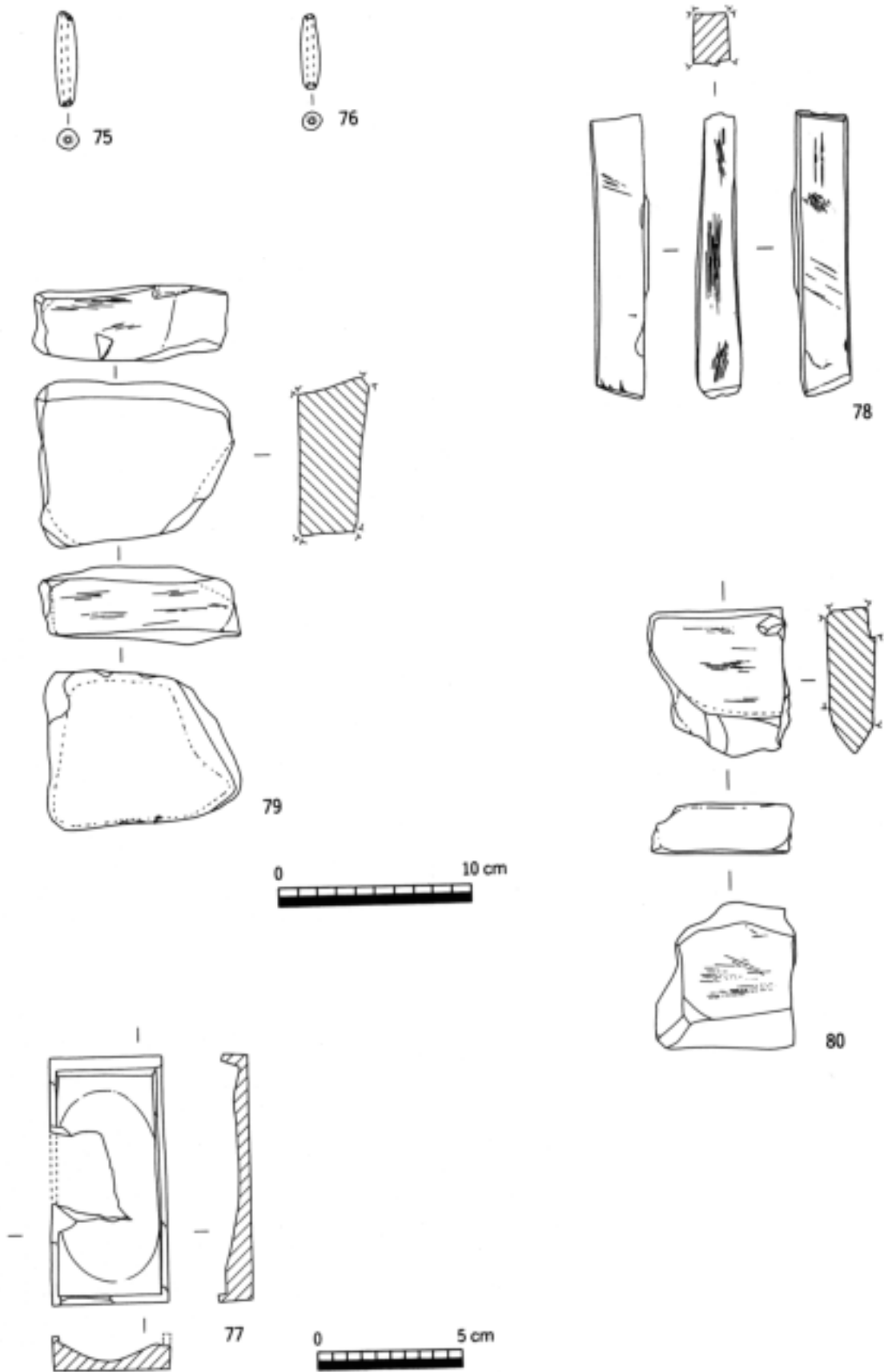
66

第 29 图 磁器实测图(1)

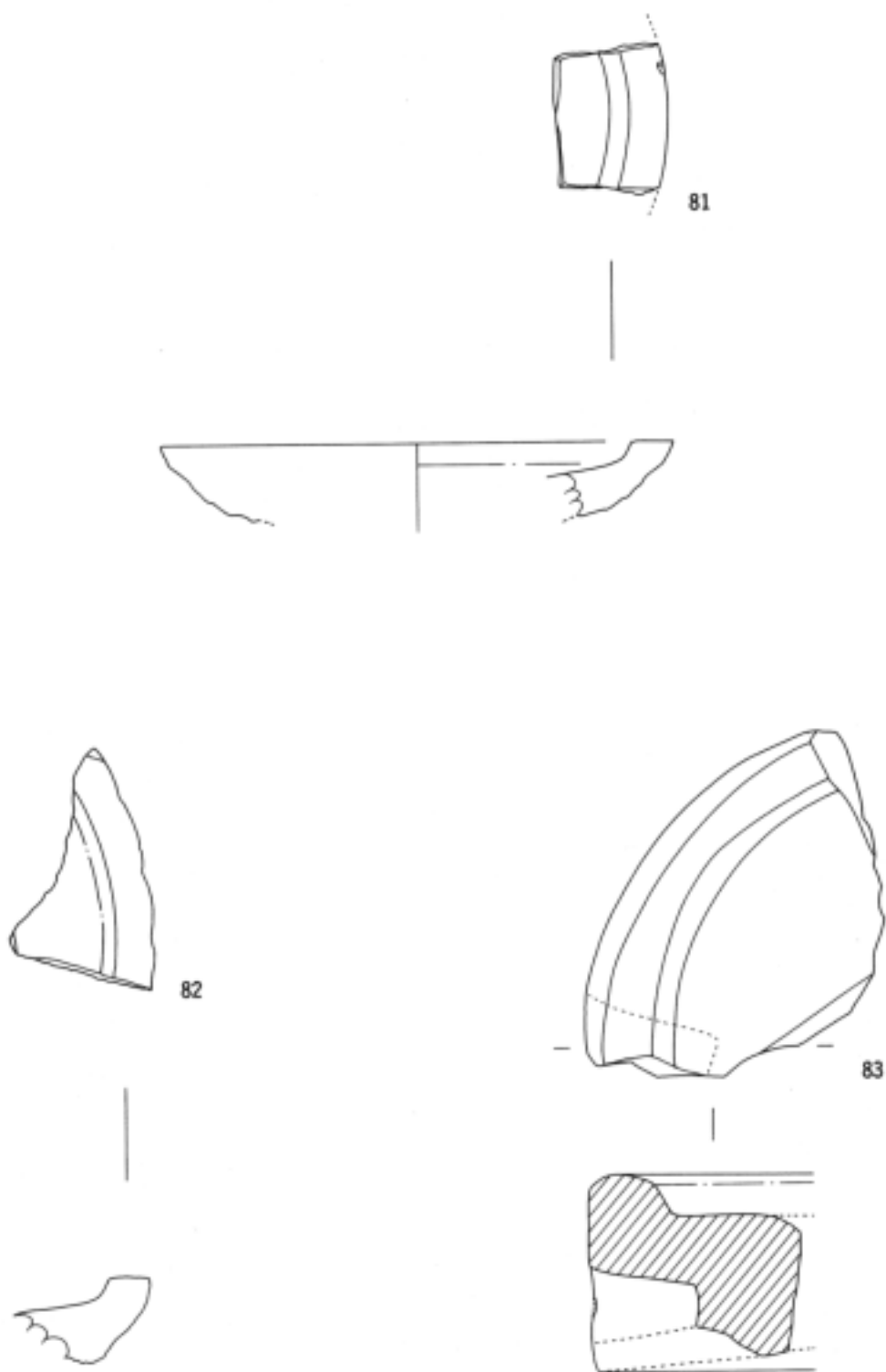




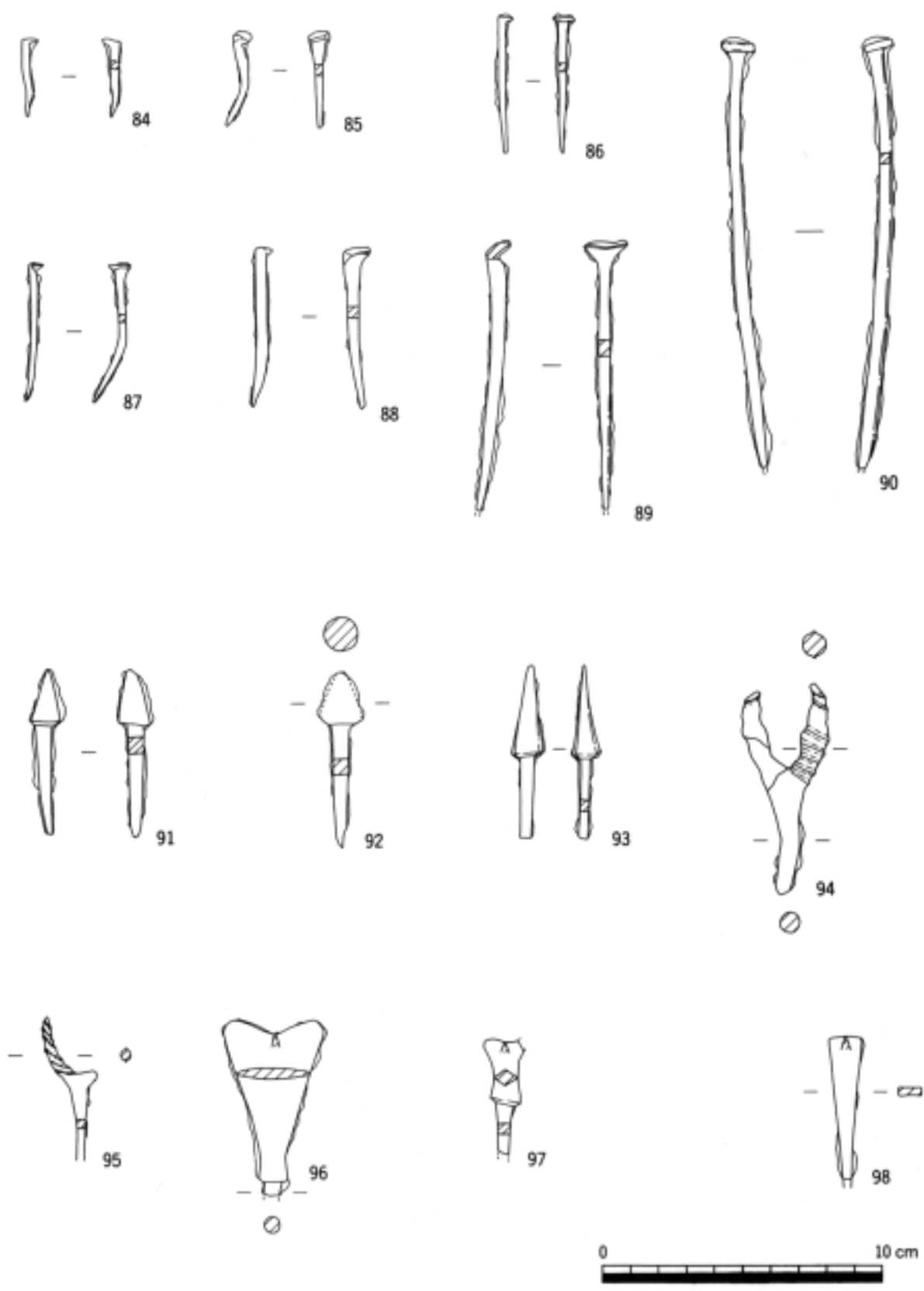
第 30 图 磁器实测图 (2)



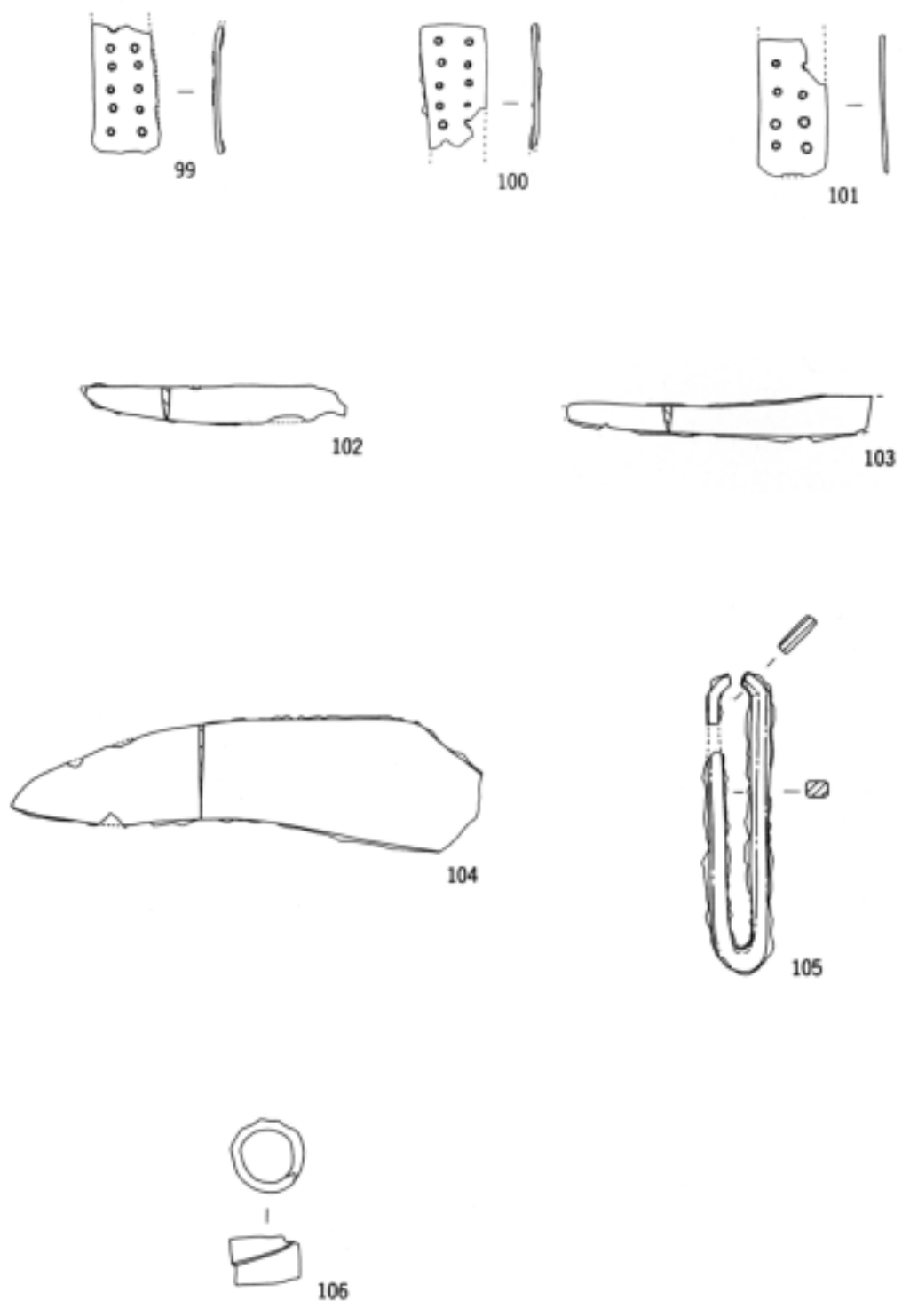
第31图 土製品・石製品実例図



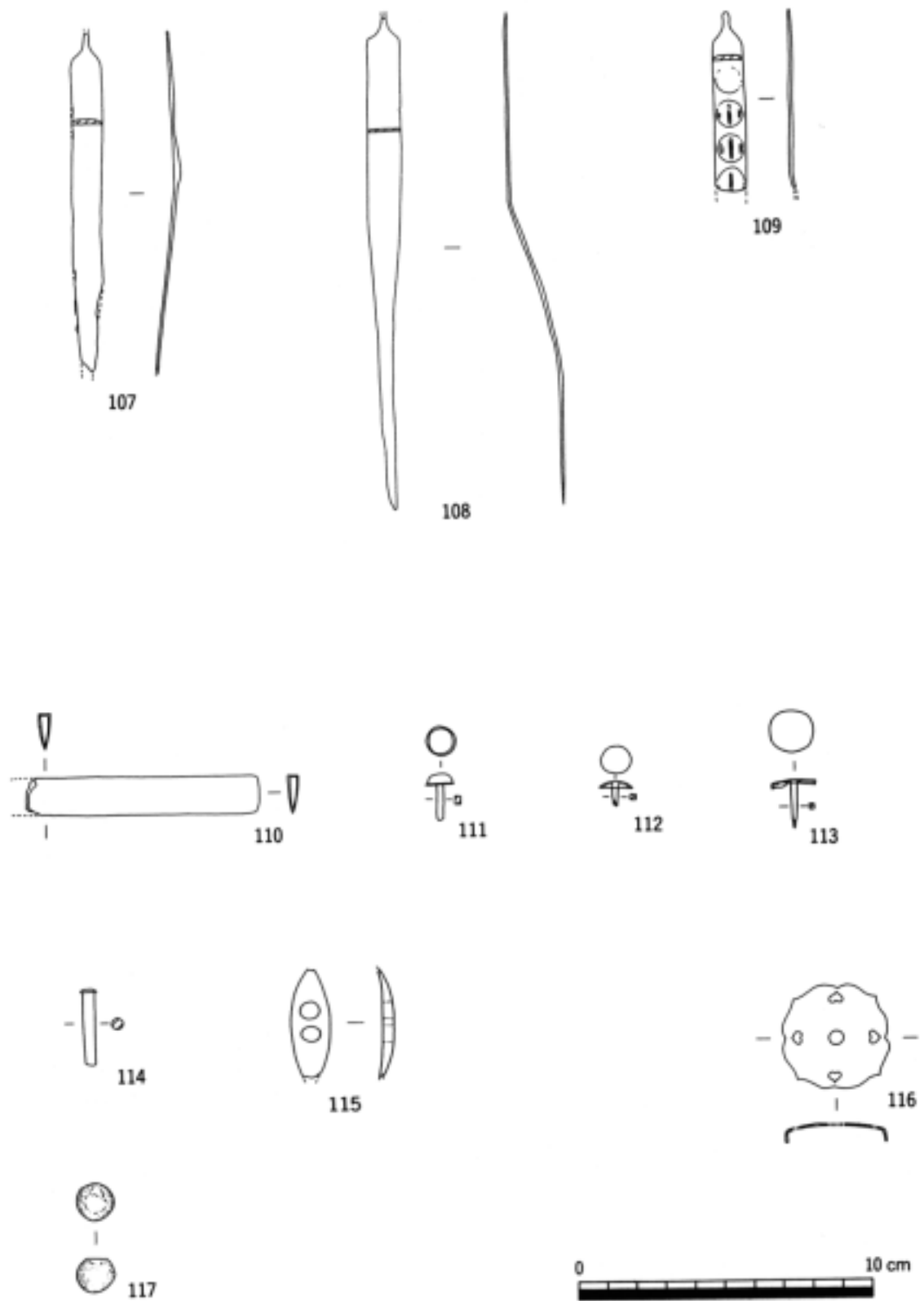
第 32 图 石製品実測図



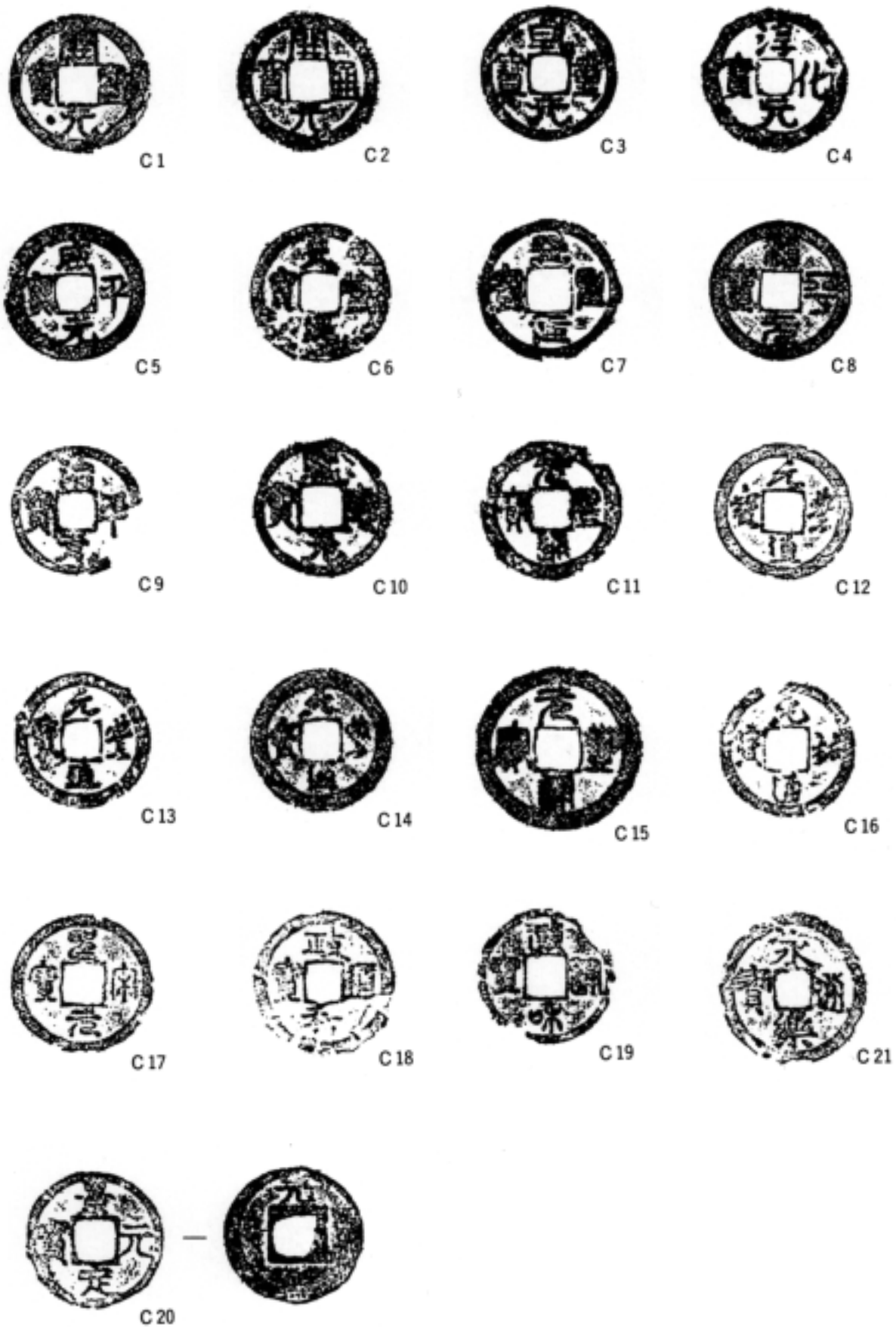
第 33 图 金属製品実測图(1)



第 34 图 金属製品実測図 (2)



第 35 图 金属製品実測図 (3)



第 36 圖 古錢拓影 (1:1)

第1表 有井城跡出土遺物観察表

| | 図面 | 出土地点 | 器種 | 法量(cm) | 形態 | 成形・調整 | 備考 |
|---|----|----------------|----|---|-----------------------------------|---|--|
| | 1 | 第1郭1区 第1号土坑 | 皿 | 口径 5.5 (推定) 底径 4.4 器高 1.3 | 体部は直線的に立ち上り、口縁端部は丸くおさめる。 | ロクロによるまきあげ成形後、体部内外面ともヨコナデ。 底部切り離し方法は、回転糸切り。 | 色調：灰褐色 焼成：やや軟 胎土：やや不良（砂粒多） |
| 土 | 2 | 第1郭1区 第1号土坑 | 皿 | 口径 6.8 (推定) 底径 4.1 器高 1.6 | 体部は内湾しながら立ち上り、口縁端部は尖り気味におさめる。 | ロクロによるまきあげ成形後、体部内面をヨコナデ。 底部切り離し方法は、回転糸切り。 | 色調：淡赤褐色 焼成：良 胎土：良 |
| 師 | 3 | 第1郭1区 第1号土坑 | 皿 | 口径 7.3 (推定) 底径 4.7 (推定) 器高 1.4 | 体部はほぼ直線的に立ち上り、口縁端部は丸くおさめる。 | ロクロによるまきあげ成形後、体部内面をヨコナデ。 底部切り離し方法は、回転糸切り。 | 色調：橙褐色 焼成：やや軟 胎土：良 |
| 質 | 4 | 第1郭1区 第1号土坑 | 皿 | 口径 8.2 (推定) 底径 6.2 (推定) 器高 2.4 | 体部はほぼ直線的に立ち上り、口縁端部は丸くおさめる。 | ロクロによるまきあげ成形後、体部内面ともヨコナデ。 底部切り離し方法は不明。 | 色調：赤褐色 焼成：やや軟 胎土：良 |
| 土 | 5 | 第1郭1区 第1号土坑 | 皿 | 口径 10.7 (推定) 底径 8.4 (推定) 器高 2.5 | 体部はわずかに外湾しながら立ち上り、口縁端部は尖り気味におさめる。 | ロクロによるまきあげ成形後、体部内面ともヨコナデ。 底部切り離し方法は不明。 | 色調：赤褐色 焼成：やや軟 胎土：やや不良（砂粒多） |
| 器 | 6 | 第1郭1区 第1号土坑 | 皿 | 口径 10.9 (推定) 底径 6.6 器高 2.8 | 体部はわずかに内湾しながら立ち上り、口縁端部は尖り気味におさめる。 | ロクロによるまきあげ成形後、体部内面ともヨコナデ。 底部切り離し方法は、回転糸切りの後、ヘラ工具で調整。 | 色調：淡赤褐色（外面一部黒斑） 焼成：やや軟 胎土：やや不良（砂粒多） |
| | 7 | 第1郭1区 第1号土坑 | 皿 | 口径 12.0 (推定) 底径 4.9 (推定) 器高 3.4 | 体部はほぼ直線的に立ち上り、口縁端部は丸くおさめる。 | ロクロによるまきあげ成形後、体部内外面ともヨコナデ。 底部切り離し方法は、ヘラ切り。 | 色調：赤褐色（底部内外面に黒斑） 焼成：やや軟 胎土：やや不良（砂粒含） |
| | 8 | 第1郭3区 第4号土坑 | 皿 | 口径 10.9 底径 6.6 器高 2.4 | 体部は直線的に立ち上り、口縁端部は丸くおさめる。 | ロクロによるまきあげ成形後、体部内外面ともヨコナデ。 底部内面は、左方向の回転ナデ、底部切り離し方法は不明。 | 色調：明黄褐色 焼成：やや軟 胎土：不良（1～2mm程度の砂粒多） |

| | 図面 | 出土地点 | 器種 | 法量(cm) | 形 態 | 成 形 ・ 調 整 | 備 考 |
|--------|----|----------------|----|-------------------------------------|---|---|--|
| 土 師 | 26 | 第3郭2区 (柱穴内) | 皿 | 口径 11.2 底径 5.6 器高 2.6 | 体部は直線的に立ち上り、口縁端部は丸くおさめる。 | ロクロによるまきあげ成形後、体部内面はハケ目調整、外面ヨコナデ。底部切り離し方法は、回転糸切り。 | 色調：淡黄色 焼成：軟 胎土：良 |
| 質 土 | 27 | 第3郭1区 | 皿 | 口径 12.7 (推定) 底径 4.8 器高 3.4 | 体部は外湾しながら立ち上り、口縁端部は丸くおさめる。 | ロクロによるまきあげ成形後、体部内面と口縁部はヨコナデ。底部内面は、ヨコナデ。底部切り離し方法は、回転糸切り。 | 色調：淡灰褐色 焼成：軟 胎土：良 底部外面及び底部内面、体部内面下半に黒斑。 |
| 器 | 28 | 第3郭1区 | 皿 | 口径 15.4 (推定) 底径 7.9 器高 3.3 | 体部はわずかに内湾しながら立ち上り、口縁端部は丸くおさめる。 | ロクロによるまきあげ成形後、体部内外面ともヨコナデ。底部切り離し方法は、回転糸切りの後、ハケ目調整。 | 色調：明淡黄色 焼成：軟 胎土：良 |
| 瓦 | 29 | 第2郭3区 焼土層 | 鍋 | 口径 30.2 (推定) | 体部は内湾し、口縁部は肥厚しながら外反する。口縁端部は上方へ拡張し、凹ませておさめる。 | 体部内面は横方向のハケ目。体部外面は縦方向のハケ目。口縁部、底部外面は横方向のハケ目。口縁端部はヨコナデ調整。 | 色調：淡黄褐色（内面） 茶褐色（外面） 焼成：軟 胎土：良（1～2mm程度の砂粒をわずかに含） 外面に指頭圧痕多い。 |
| 質 | 30 | 第5郭4区 堀底 | 鍋 | 口径 29.6 (推定) | 体部は内湾し、口縁部は肥厚しながら外反する。口縁端部は下方へ拡張し、平たくおさめる。 | 体部内面は横方向のハケ目。体部外面は縦方向のハケ目。底部外面は横方向のハケ目。口縁端部はヨコナデ調整。 | 色調：淡黄褐色（内面） 黒灰色（外面） 焼成：軟 胎土：良（砂粒含） 外面全体にスス附着。 |
| 土 | 31 | 第5郭4区 | 播鉢 | 不明 | 体部はほぼ直線的に立ち上り、口縁端部を短く内側へ折り曲げ、平たくおさめる。 | 体部内面は斜方向のハケ目調整後、ヨコナデ調整。体部外面は縦方向のハケ目。口縁端部はヨコナデ調整。縦方向に櫛歯状工具によって条線を施す。（下→上） | 色調：黒灰色（内面） 灰茶褐色（外面） 焼成：軟 胎土：良（砂粒含） |
| 器 | 32 | 第2郭2区 | 香炉 | 口径 12.5 (推定) 器高 4.6 (除脚) | 体部は内湾しながら立ち上り、口縁端部は平たくおさめる。底部内面は中心に向けて下がり気味。脚については不明。 | 内面はヨコナデ調整。外面は丁寧なナデ調整。体部外面には、4条のヘラ状工具による凹線が巡る。上部には雷文を3対以上ずつ施す。下部には円形巴文を施す。 | 色調：暗赤褐色 焼成：良 胎土：良（砂粒若干含） |

| 品種 | 番号 | 法 量(cm) | 形態・成形手法の特徴 | 備考（出土地点） |
|----|----|---|---|------------|
| | 84 | 全長 2.8 | 断面長方形，折頭形 | 第5郭5区 |
| | 85 | 全長 3.5 | 断面長方形，折頭形 | 第3郭4区 |
| | 86 | 全長 3.5 | 断面正方形，折頭形 | 第2郭1-3区柱穴内 |
| 釘 | 87 | 全長 5.0 | 断面正方形，折頭形 | 第2郭1-1区礫群中 |
| | 88 | 全長 5.8 | 断面長方形，折頭形 | 第2郭1-3区 |
| | 89 | 残存長 9.6 | 断面長方形，折頭形 | 第5郭7区溝内 |
| | 90 | 残存長 15.5 | 断面正方形，折頭形 | 第2郭2区 |
| | 91 | 全長 5.9 身部幅 1.1 身部長 2.1 茎部長 3.8 | 身部は四角錐形を呈する。 身部断面方形か。 茎部断面正方形 | 第2郭2区柱穴上場 |
| | 92 | 全長 6.3 身部幅 1.5 身部長 1.8 茎部長 4.5 | 身部は円錐形を呈する。 身部断面円形 茎部断面正方形 | 第3郭2，3区間畔 |
| | 93 | 残存長 6.2 身部幅 1.1 身部長 3.3 | 身部はほぼ四角錐形を呈する。 身部断面長方形 茎部断面正方形 | 第3郭3区 |
| 鏃 | 94 | 残存長 7.5 身部幅 3.1 身部長 3.7 | 身部はY字状に二股に開き，螺旋状に抉られている。 身部断面円形 茎部断面円形 | 第3郭1区 |
| | 95 | 残存長 5.0 身部幅（推定） 2.8 身部長 2.5 | 身部はY字状に二股に開き，螺旋状に抉られている。 身部断面円形 茎部断面長方形 | 第3郭3区 |
| | 96 | 残存長 6.5 刃部幅 3.5 身部長 6.0 | 身部は逆三角形を呈し，刃部は雁股に若干開く。 身部断面長円形 茎部断面円形 | 第5郭5区遺構面 |

| 品種 | 番号 | 法 量(cm) | 形態・成形手法の特徴 | 備考（出土地点） |
|-----|-----|--|---|----------------|
| | 97 | 残存長 4.2 刃部幅（推定） 1.4 身部長 2.3 | 身部は中央部から逆三角形を呈し、刃部は雁股に若干開く。 身部断面菱形 茎部断面正方形 | 第3郭3区通路状遺構3溝11 |
| 鉄 | 98 | 残存長 5.2 刃部幅 1.2 | 身部は逆三角形を呈し、刃部は茎と直交する。 身部断面長方形 | 第3郭4区 |
| 小 | 99 | 残存長 4.1 幅 2.1 厚さ 0.15 | 薄板状で、径約0.2cmの小円孔を2列穿っている。 | 第2郭2区地山直上 |
| | 100 | 残存長 4.0 幅 2.0 厚さ 0.15 | 薄板状で、径約0.2cmの小円孔を2列穿っている。 | 第2郭2区地山直上 |
| 札 | 101 | 残存長 4.3 幅 2.1 厚さ 0.1 | 薄板状で、径約0.25cmの小円孔を2列穿っている。 | 第3郭2区柱穴内 |
| 刀 | 102 | 残存長 8.1 刃部長（推定） 5.7 茎部残存長 刃部最大幅 1.1 棟厚 0.3 | 棟は真っ直ぐ伸びる。 刃部断面三角形を呈する。 茎部不明 | 第3郭3区 |
| 子 | 103 | 残存長 9.5 刃部最大幅 1.2 棟厚 0.3 | 刃部断面三角形を呈する。 茎部欠失 | 第3郭4区遺構面 |
| 鎌 | 104 | 残存長 14.7 刃部最大幅 4.0 棟厚 0.2 | 刃部は緩やかに湾曲する。 刃部断面三角形を呈する。 | 第3郭3区 |
| 毛抜き | 105 | 全長 9.4 幅 1.9 先端部横幅 1.4 | 断面長方形を呈する。 | 第3郭3区通路状遺構3溝11 |
| 締金具 | 106 | 外径 2.3 厚さ 0.4 | 両端の幅を細くした板状鉄製品（中央部最大幅1.0cm）を環状にかしめている。断面方形を呈する。 | 第3郭2区 |

| 品種 | 番号 | 法 量(cm) | 形態・成形手法の特徴 | 備考（出土地点） |
|-----|-----|---------------------------------|--|-------------|
| | 107 | 残存長 16.9 最大幅 1.1 厚さ 0.1 | ほぼ完形品。 断面は片側を平らにし、反対側に少し丸みを付けている。鍍金の痕跡が僅かに残る。 | 第5郭6区堀中 |
| 筭 | 108 | 残存長 11.9 最大幅 1.0 厚さ 0.1 | 断面は片側を平らにし、反対側に少し丸みを付けている。 | 第5郭5区堀肩 |
| | 109 | 残存長 6.2 最大幅 1.0 厚さ 0.1 | 断面は片側を平らにし、反対側に少し丸みを付けている。丸い側に型押文を連ねている。 | 第2郭3区焼土層 |
| 小柄 | 110 | 残存長 7.9 幅 1.3 厚さ 0.4 | 断面はやや丸みをもった三角形を呈し、中空になっている。刃部は欠失している。 | 第1郭1区第1土坑内 |
| | 111 | 頭径 1.0 頭厚 0.45 押し込み部長 1.2 | 頭中央は若干盛り上がる。頭端に突帯が巡る。 | 第2郭3区下段地山直上 |
| 鋏 | 112 | 頭径 1.0 頭厚 0.1 押し込み部長 0.6 | 頭中央は若干盛り上がる。頭内側は空になっている。 | 第2郭4区 |
| | 113 | 頭径 1.5 頭厚 0.08 押し込み部長 1.5 | 頭中央は若干盛り上がる。頭内側は空になっている。頭部表面に鍍金を施している。 | 第3郭3区遺構面 |
| 目釘 | 114 | 全長 2.6 頭径 0.5 径 0.4 | 頭中央は若干盛り上がる。 | 第1郭2区第2号土坑内 |
| 鞆 | 115 | 残存長 3.7 最大幅 1.1 最大厚 0.3 | 全体に緩やかに湾曲している。直径0.6cmの紐穴が2孔穿たれている。 鎧の止め金具 | 第2郭3区焼土層 |
| 飾金具 | 116 | 最大径 3.9 最大高 0.6 厚さ 0.1 | 4枚の花弁形（四葉）をもち、中心に0.5cmの孔と、花弁の境にハート型の孔が穿たれている。表面に鍍金を施している。 長押等の釘隠と考えられる。 | 第2郭2区柱穴内 |

| 番号 | 銭種 | 初鑄 | 年代 | 出土地点 | 備考 |
|------|------|----|------|----------------|-----------------|
| C 1 | 開元通寶 | 唐 | 621 | 第2郭2, 3区畔 | 対読, 楷書体 |
| C 2 | 開元通寶 | 唐 | 621 | 第5郭4区遺構 | 対読, 楷書体 |
| C 3 | 乾元重寶 | 唐 | 759 | 第3郭1区地山直上 | 対読, 楷書体 |
| C 4 | 淳化元寶 | 北宋 | 990 | 第5郭7区堀中 | 順読, 楷書体 |
| C 5 | 平元寶 | 北宋 | 998 | 第5郭6区遺構面 | 順読, 楷書体 |
| C 6 | 天禧通寶 | 北宋 | 1017 | 第2郭3区焼土層 | 順読, 楷書体 |
| C 7 | 天聖元寶 | 北宋 | 1023 | 第3郭4区 | 順読, 篆書体 |
| C 8 | 治平元寶 | 北宋 | 1064 | 第2郭1-3区 | 順読, 楷書体 |
| C 9 | 治平元寶 | 北宋 | 1064 | 第2郭2区 | 順読, 楷書体 |
| C 10 | 熙寧元寶 | 北宋 | 1068 | 第5郭6区 | 順読, 楷書体 |
| C 11 | 元豊通寶 | 北宋 | 1078 | 第2郭1-3区地山直上 | 順読, 篆書体 |
| C 12 | 元豊通寶 | 北宋 | 1078 | 第2郭4区 | 順読, 行書体 |
| C 13 | 元豊通寶 | 北宋 | 1078 | 第3郭3区焼土層 | 順読, 行書体 |
| C 14 | 元豊通寶 | 北宋 | 1078 | 第3郭3区 | 順読, 行書体 |
| C 15 | 元豊通寶 | 北宋 | 1078 | 第5郭6区 | 順読, 篆書体, 二文銭 |
| C 16 | 元祐通寶 | 北宋 | 1086 | 第3郭3区溝12 | 順読, 行書体 |
| C 17 | 聖宋元寶 | 北宋 | 1101 | 第4郭7区 | 順読, 篆書体 |
| C 18 | 政和通寶 | 北宋 | 1111 | 第2郭2区 | 対読, 楷書体 |
| C 19 | 政和通寶 | 北宋 | 1111 | 第5郭5区遺構面 | 対読, 篆書体 |
| C 20 | 景定元寶 | 南宋 | 1260 | 第3郭4区 | 対読, 楷書体, 「元」の背文 |
| C 21 | 永楽通寶 | 明 | 1408 | 第3郭3区通路状遺構3溝11 | 対読, 楷書体 |

V ま と め

有井城跡は、石内の谷の中央部に位置する独立丘陵と石内川の河岸段丘を利用して築かれた囲郭型の郭配置を持つ土居型式の山城であり、この辺りを支配していたと思われる領主の館の機能も併せ持つ居館城として捉えることができると考えられる。発掘調査の結果、当城跡は段丘上の二つの郭を中心に広がり、その背後の丘陵上には畝状縦堀群をもつ郭や帯郭があり、また、その前方には大規模な薬研堀状の水堀を巡らせ、虎口から中心の郭に向かう通路に沿って堅固な石垣を築いており、さらに2基の井戸や排水用と考えられる多数の溝も備えていることが確認された。

先ず、有井城跡の遺構の変遷過程について検討を加えてみたい。

今回の調査は、県道の改良工事に伴うものであったため有井城跡の推定される遺構範囲のほぼ中央部を断ち切るように調査範囲が設定されていたため、当城跡の全容を解明することはできなかったが、主要な遺構の多くは明らかになったものではないかと思われる。また、部分的な調査結果からではあるが、築城の過程についても次に述べるような3期に分けて捉えることが可能ではないかと考えられる。

I 期 当城跡が築かれた時期である。2郭中央部で検出された下の段（平坦面5）とそこから上の段へ登る通路状遺構1の部分、及び平坦面3・4がこれに当たると考えられる。特に、平坦面5と通路状遺構1から出土した遺物は、当城跡のなかではいずれも古式のものばかりであり、2郭がこの部分を埋めることによって拡張される次の時期までは、この遺構の形態的なものを考えれば、この遺構が当城の初期の虎口であったと想定することが可能であろう。また、3郭が東側へ拡張される前に機能していたと考えられる堀切状遺構も出土遺物の面から3郭のなかでは比較的古い遺構といえ、この遺構も2郭中央部の下段等とともに当城の初期の遺構として考えることができるであろう。これらのことから、1期の当城の2・3郭は細分化した小規模な郭によって構成されていたと想定することもできよう。また、1郭については、その位置関係から何らかの機能を1期から持っていたと考えられる。なお、4郭は遺存状況が悪いため、その築造過程は不明である。

II 期 虎口を当城跡の西側に位置する2郭から北側の3郭に移動するため、2郭北東端及び2郭と3郭の間を幅広く掘り切って通路状遺構2・3を設け、2郭の調査範囲内では通路状遺構1を埋めて概ね20～30cmの段差をもった東西二つの広い平坦面となって第1号井戸が造られ、更に3郭を大幅に拡張した時期である。このような郭に挟まれた鞍部となった所に大手道を入れる例は、安芸の国人領主の城でよく見られる縄張ではあるが、虎口の移動を中心とした大規模な改修であり、当城の基本的縄張はこの時期に確立されたと考えられる。特に、3郭は中心部にあった堀切状遺構を埋め、さらに北東側を切岸状に大きく拡張して郭の有効面積を倍増するとともに北西側の坂虎口に横矢を効かすようにして守りを固めており、また、3郭と2郭の比高差を約1.5m設けていることから当城の北方向を意識した改修であったことを窺わせる。

III 期 II期に造られた通路状遺構2・3に石垣を設ける時期である。2郭の石垣は、通路状遺構2を徐々に狭くしながら2期に分けて改修され、さらに3郭側に向けても2期

に分けて拡張しながら築かれ、全体としては4期に分かれる構築がなされたと考えられる。3郭の石垣及び石積みは、石垣6が築かれた後、通路状遺構3を3期に分けて虎口に向けて埋めて3郭を拡張・整備する過程で築かれたものであろう。各石垣の2・3郭間の新旧は明確にはし得ないが、溝の関係から通路状遺構3に伴う石垣(石垣6を除く)が通路状遺構2に伴う石垣に後出すると考えられ、また石垣裏の埋土から出土した遺物から考えると虎口付近の石垣が最も新しい可能性があるといえよう。なお、5郭中央部の地山の低くなった部分にも薬研堀を築造した後に堀肩の補強のために築かれたと考えられる石垣9がある。この石垣も石を使った当城のⅢ期の改修の一環と捉えることが妥当であろう。また石組の第2号井戸についてもこの時期のものと考えられる。

このように、Ⅲ期は通路を石垣を使用した郭の拡張によって狭くしながら当城の主要な防御ラインを徐々に前進させて最終的には虎口の位置とし、これと並行して石組井戸を持つ5郭と当城の最大かつ最も有効な防御施設としての水堀を整備し、2郭は最終の遺構面となる一続きの平坦面となった時期といえよう。

なお、石垣を構築し、坂虎口の城門と内柵型の原型とも考えられる通路を設けていることは、近世への過渡期の城郭として当城跡をとらえることもできよう。また、1郭のような多数の堅堀を並列させ、堀間を畝状の土塁となるようにし、斜面の移動を困難にして防御機能を高めた堅堀群は、市内においては阿曾沼氏の三ツ城跡に見られ、その構築は大永3年(1523)と推定されており、当城跡の堅堀群もほぼ同時期の戦国時代後半の築造と考えることができるため、当城跡のⅢ期の遺構としたい。

次に、出土遺物について整理してみたい。当城跡の遺物は、種類・量とも国人領主の居館としてふさわしいものと思われる。大量の瓦質土器や備前焼の出土は、多くの人々がこの城で生活していたことを想起させ、元代を中心とした磁器の出土の多さは市内の他の山城と比較して突出しており、さらに、金銅製の鋌や四葉金具などの出土もこの城の城主の豊かさを感じさせる。しかし、その出土遺物の製作時期にはⅣ章で既述したように偏りが見られる。備前焼ではⅣ期後半～末の製作時期のものがほとんどであり、その実年代は15世紀後半～16世紀初頭に比定される。Ⅴ期初頭の播鉢等も若干出土しているが、それ以降のものは全く出土していない。なお、古式のものとしては、Ⅲ期末(14世紀中葉)の播鉢や13世紀後半～14世紀の製作と考えられる常滑焼の甕が出土している。また、輸入陶磁器は14～15世紀を中心に、12世紀～16世紀後半のものまで幅広く出土している。しかし、12、13世紀代のもは別として、15世紀末～16世紀前半のものが比較的少ないといえるであろう。このような遺物の出土状況から考えられることは、次のようなことである。

- ① 当城の築城時期は、少なくとも14世紀代にまで遡ることができる。
- ② 当城の最盛期は、15世紀後半～16世紀初頭である。
- ③ 16世紀前半以降は、多くの人々が当城で生活していたとは考えにくい。
- ④ しかし、16世紀後半までは、当城は何らかの形で機能を保持していた。

ここで、中世の石道の国人領主として文献史料に登場する小幡氏の動向を押さえてみたい。

小幡氏関連の初見の文献は、Ⅱ章で触れたように文和元年(1352)の『足利義詮下文』等に「安芸国兼武名小幡右衛門尉跡」とあり、このことから南北朝初期までには

その一族が石道に拠を構えていたことが推測できる。また、応永11年(1404)には、安芸国人一揆契状に小幡山城守親行が国人領主の一人として名を連ねている。さらに、大永3年(1523)には、小幡興行外の一族8人が大内氏与党として武田氏に攻められて三宅円明寺で切腹させられており、一時その勢力が石道から衰退したことが窺われる。しかし、大永7年(1527)頃には大内氏が武田氏から奪回した石道新城の守将として小幡四郎の名があり、天文12年(1543)頃には小幡山城入道が石道に親関を設置し、小幡行延が洞雲寺領をめぐる紛争の当事者として登場する。そして、最後に確認できる史料の吉川元春の武将森脇 驒守春方が元和4年(1618)に書いたといわれる『森脇覚書』には、石道の小幡氏である確証はないが、大内氏が陶氏に謀殺された後、毛利氏と陶氏の対立が表面化した天文23年(1554)に、毛利氏から陶氏方へ現形した野間氏の矢野城に草津の羽仁氏とともに小幡氏が入り、後に毛利氏によって尽く討ち果たされたと記されている。これ以降、小幡氏に関する文献史料は見られず、その動向は全く不明であり、僅かに、石道の小幡氏の出身と考えられている毛利元就の後室(中丸・御東大方・小幡殿御領人東之御丸局)の生家について「家断絶、於干今ハ其父不詳」とあるだけである。なお、天文23年には毛利氏の家臣熊谷兵庫守信直が石道、五日市において陶氏方と合戦し、敵を68人討ち果たしており、このとき陶氏方となっていた小幡氏が断絶したと推察することもでき、2郭の中央部において広く検出した焼土と炭化物の層から出土した筭や靱、そして虎口や通路状遺構付近から多く出土した鉄鏃などは、石道の小幡氏滅亡の証と考えられることでもできよう。

以上のことから、有力国人領主の居館的色彩を色濃く持つという当城跡の城主としては、小幡氏をあてるのが妥当と考えられ、その場合城跡名としては、文献にしばしば登場する石道本城こそが当城跡にあたと推測される。この推測が正しいと仮定した場合、既述した検出遺構・出土遺物の状況はどう解釈し得るのであろうか。文献史料との関連から当城跡の変遷を概観すれば以下のとおりとなる。

まず、遺構のⅠ期は、小幡氏の初見の記録から、南北朝初期に小幡氏が当地に拠を構えた時期のものと推測され、これは第2郭の下段から出土した常滑焼の実年代とも符合している。次にⅡ期の開始時期についてであるが、その時期実施された大改修の契機として、15世紀中葉に始まる武田氏による石道の押領や長禄元年(1457)の石内付近での武田氏と大内氏・巖島神主家との大規模な武力衝突の時期があげられよう。この時期、小幡氏とこれらの事件を直接結びつける史料は伝えられていないが、石道に拠を構える小幡氏にとっても二つの大きな勢力の間で自己保全を図るための手段として防備を固める必要が急速に高まった時期と考えられ、遺物的にも当城跡の最盛期に対応する時期に当たることから、この推測はかなりの確度を有していると考えられる。つまり、Ⅰ期については14世紀前半～15世紀前半と考えることができ、Ⅱ期の開始時刻は15世紀中葉と考えられよう。次にⅡ期に次ぐ大改修の時期であるⅢ期の開始時期はいつであろうか。文献的に見て最も有力な時期は、巖島神主家の跡目争いに端を発し、大内氏と武田氏の間で激しい戦いの繰り返されていた時期に当たる16世紀前半があげられよう。この時期、大内氏側の武将として小幡氏の名が見られ、その拠城に想定される当城跡の重要性が増大したことが容易に推測し得る。また、大永3年(1523)に小幡氏一族が武田氏から大打撃を受けて一時的にその勢力が衰退したと考えられ、永正15年

(1518)～大永元年(1521)頃の築城と推定される石道新城に大永7年(1527)頃には小幡四郎が守将として入城していることから、この改修も大永3年を前後する時期にほぼ終了していたものと考えられる。これは、遺物の面でも16世紀前半以降の備前焼がほとんど出土していないことなどからも首肯できよう。

さて、当城跡の廃城の時期であるが、出土遺物から見れば虎口付近の石垣埋土中から出土した16世紀末～17世紀初頭の唐津焼の皿が最も下限の時期のものと考えられる。文献的に見れば、当城跡の城主と想定される小幡氏は、天文23年(1554)には既に滅亡しており、その後熊谷兵庫守信直が石道本城分90貫を知行したことが知られるなど、毛利氏がその家臣を石道においていたことが推察され、その拠点として当城跡が使われていた可能性が考えられよう。これは、16世紀後半以降の遺物も少量ではあるが出土しているという事実とも合致している。また、その廃城の時期についても、毛利氏が広島城を築き、家臣たちに広島在城を命じた天正19年(1591)を前後する時期と想定すれば、前述した唐津焼の時期についても首肯できよう。

以上のように、小幡氏の文献史料からの位置づけと当城跡の変遷過程は、軌を一にするものがあり、当城跡と小幡氏の関係の深さを裏付けるものといえよう。それはまた、文献上に登場する石道本城・石道新城との関係についても同様である。

従来、石道本城・石道新城とも現在の水晶城を示すものと考えられており、水晶城の名称は城跡から水晶が多く取れることに由来して近世から通称されていたようである。また、水晶城は石内の中では他の城跡の数倍の規模を誇り、安芸進出をもくろむ大内氏が武田氏に対抗するために築いたものと考えられている。石道本城或いは本城の文献上の初見は永正17年(1520)であり、続いて大永3年(1523)に見られ、その後その名称は時期を空けて天文21年(1552)と天文23年(1554)に現れる。また、石道新城或いは新城は大永6年(1526)が初見であり、大永7年にも見られ、天文9年(1540)を最後に見られなくなる。このことから本城・新城を同一の城として考えるならば、初め本城と呼ばれ、次いで新城となり、最後にまた本城と称されることとなり、幾分不可解なものを感じざるを得ない。本城・新城の言葉の表す意味を考察してみると、新城は以前からあった城に対して新しく築かれた城であろうが、本城もまた新しく築かれた、或いは築かれつつある城に対する本からあった城ということであろう。したがって、本城という名称は新城を築いたことにより出てくる名称となり、本城が史料として見られる時期には、新城の存在が推察し得るのではないだろうか。石道本城の初見は、前述したとおり大内氏が厳島神主領の直接支配を始めた永世17年に城番として杉甲斐守を置いたことに始まり、大永3年4月には自ら神主家と称した友田興藤に合力した武田氏によって石道本城の杉甲斐守は廿日市後小路で討ち取られている。同年11月には大内方の国人領主であった小幡氏一族が退城した後、三宅円明寺で切腹させられている。この小幡氏が退城した城が石道本城つまり有井城であった可能性を考えてみれば、当城が最も防備を固めた時期は16世紀初頭であり、小幡氏が大内氏の家臣的立場となっていれば城の大改修にかかる財政的負担もこなせるであろうし、大内氏の支城としての機能を有井城が持てば、この時期に当城が大改修されたことも首肯されるであろう。つまり、石道の国人領主である小幡氏の本拠としての有井城が石道本城であり、大内氏の神領の直接支配とともに永世17年までに築かれた石道新城が水晶城とい

う図式を想定することができる。

なお、天文10年(1541)の武田氏の滅亡後、大内氏が武田氏に対抗するために築いた石道新城はその本来の役割を終えたと考えられるが、天文12年頃に石道に関所を新たに設置し、石道における基盤を新たに整備し始めていたと考えられる小幡氏の本拠としての機能は継続していたと考えられよう。

さて、石道が毛利氏の支配を受けるようになってからは、前述の熊谷氏が石道本城分90貫を知行した後、熊谷氏の代官と考えられる細迫左京亮宛に書かれた児玉就忠書状に「有井ニ高井を替可申候」とあり、有井の小字は現在も有井城跡付近に残っていることからこの有井が石道本城分か、その一部ではないかと考えられ、このことも有井城跡が石道本城であることの傍証となる。

しかし、水晶城跡の全容を明らかにするような発掘調査が実施されていない現段階においてはその築城時期も明確になっておらず、水晶城跡が石道本城である可能性も否定できない。また石内の谷奥部の交通の要衝に位置する串山城跡の調査も未実施であるため、小幡氏の本拠が最初から有井城跡であったかどうか不明であると言わざるを得ない。したがって、今後これらの調査結果を踏まえたうえで改めて有井城跡の位置づけを検討する必要がある。

注

- (1) a 広島市教育委員会『山城』1982
b 河瀬正利「広島県における中世山城跡について」『芸藩地方史研究110, 111合併号』1977
平賀氏の御園宇城、天野氏の米山城、吉川氏の駿河丸城、毛利氏の郡山日本城などがある。
- (2) 13世紀後半～14世紀中葉の常滑焼大甕(46)や14世紀～15世紀の中国製天目茶碗(50)が地山直上から出土している。
- (3) 今回の報告には取り上げていないが、IV期中葉の備前焼播鉢が出土している。
- (4) 東広島市教育委員会『頭崎城発掘調査報告書』1992
小早川氏の新高山城、平賀氏の白山城、毛利氏の郡山旧本城、吉川氏の小倉山城などがある。
- (5) 広島市教育委員会『三ツ城跡発掘調査報告』1987
- (6) 『洞雲寺文書』5号, 21号
- (7) 広島県『広島県史』古代中世資料編I 1974, 所収
- (8) 『江氏家譜』下
『野坂文書』189号, 395号
- (9) 『熊谷家文書』128号
- (10) 『房頭覚書』15に「石道小幡興行防州家タルニ付」とある。
- (11) (財)広島県埋蔵文化財調査センター『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(Ⅲ)1986
この調査では、城跡の主要部分の発掘調査はされていない。
- (12) 『熊谷家文書』130号

- (13) 『萩藩閥閥録』卷94「小笠原弥右衛門」
 (14) 注(11)に同じ。
 (15) 石内村『国郡誌御用二附下知ラ遍書出帳写』
 (16)

| | 本 城 | 新 城 |
|---------------------------------|--|--|
| 関 連 文 献 と 年 代 | 永正17年(1520)『房顕覚書』14 大永3年(1523)『房顕覚書』15 天文21年(1552)『大願寺文書』72 天文23年(1554)『熊谷家文書』130 | 大永6年(1526)『房顕覚書』16 大永7年(1527)『大内氏実録士代』6 〃 『萩藩閥閥録』163 〃 『譜録』真鍋長兵衛安休1 天文9年(1540)『野坂文書』第132 |

- (17) 注(10)に同じ。「三宅圓明寺マテ落城」とある。
 (18) 『熊谷家文書』134号

参考文献

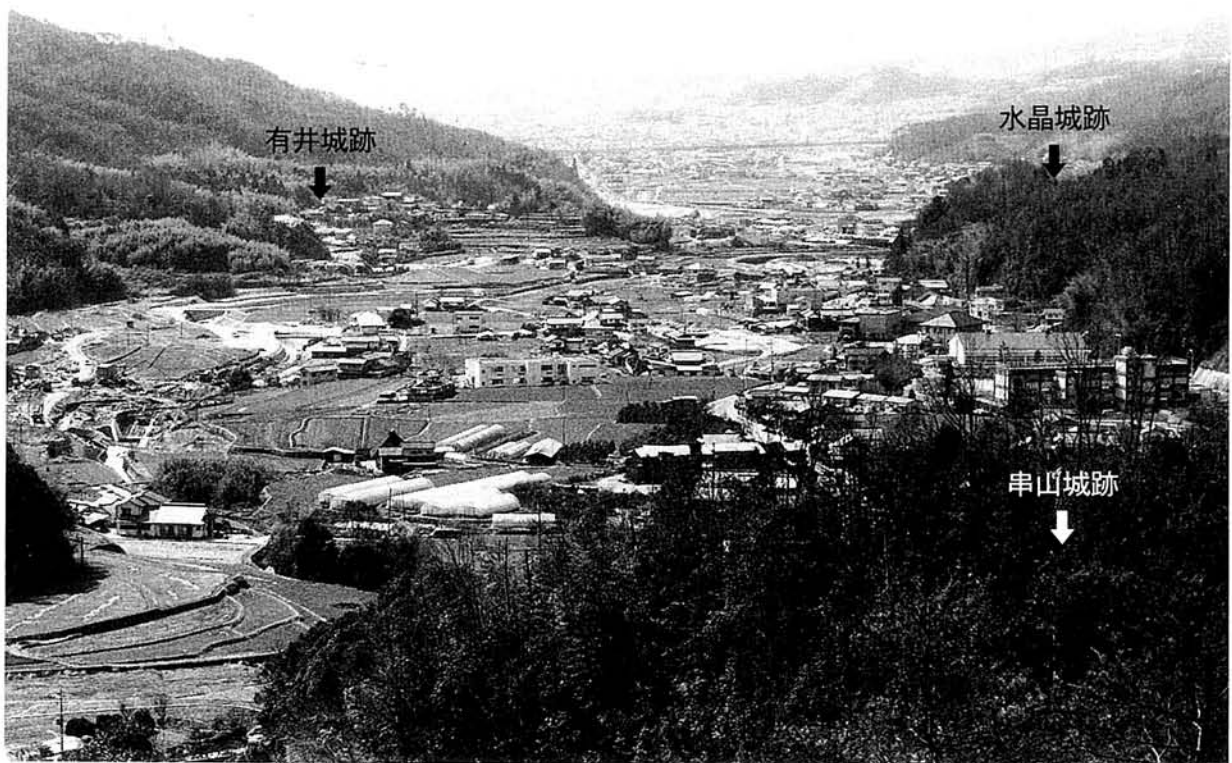
日本城郭体系13 広島・岡山, 別巻1

図

版



a. 有井城跡遠景（北東から・航空写真）



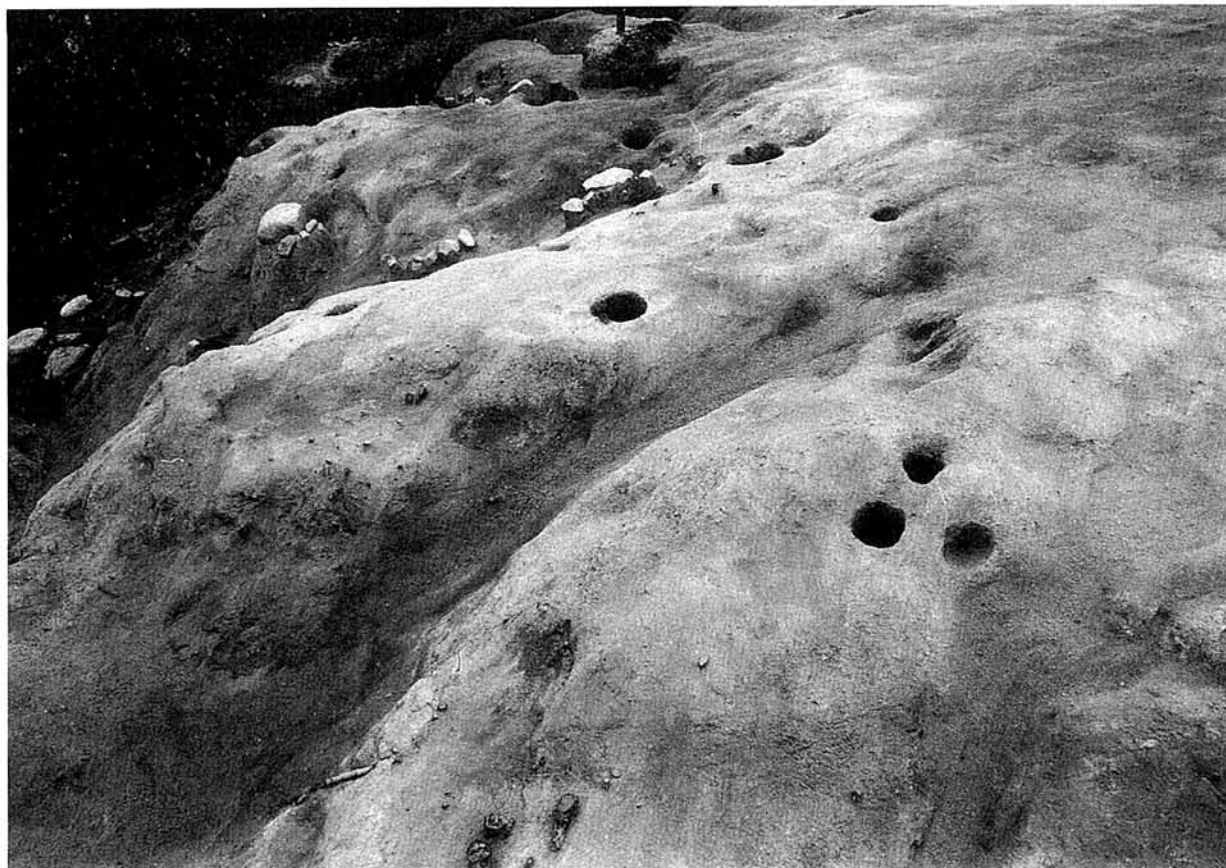
b. 有井城跡遠景（今市城跡から）



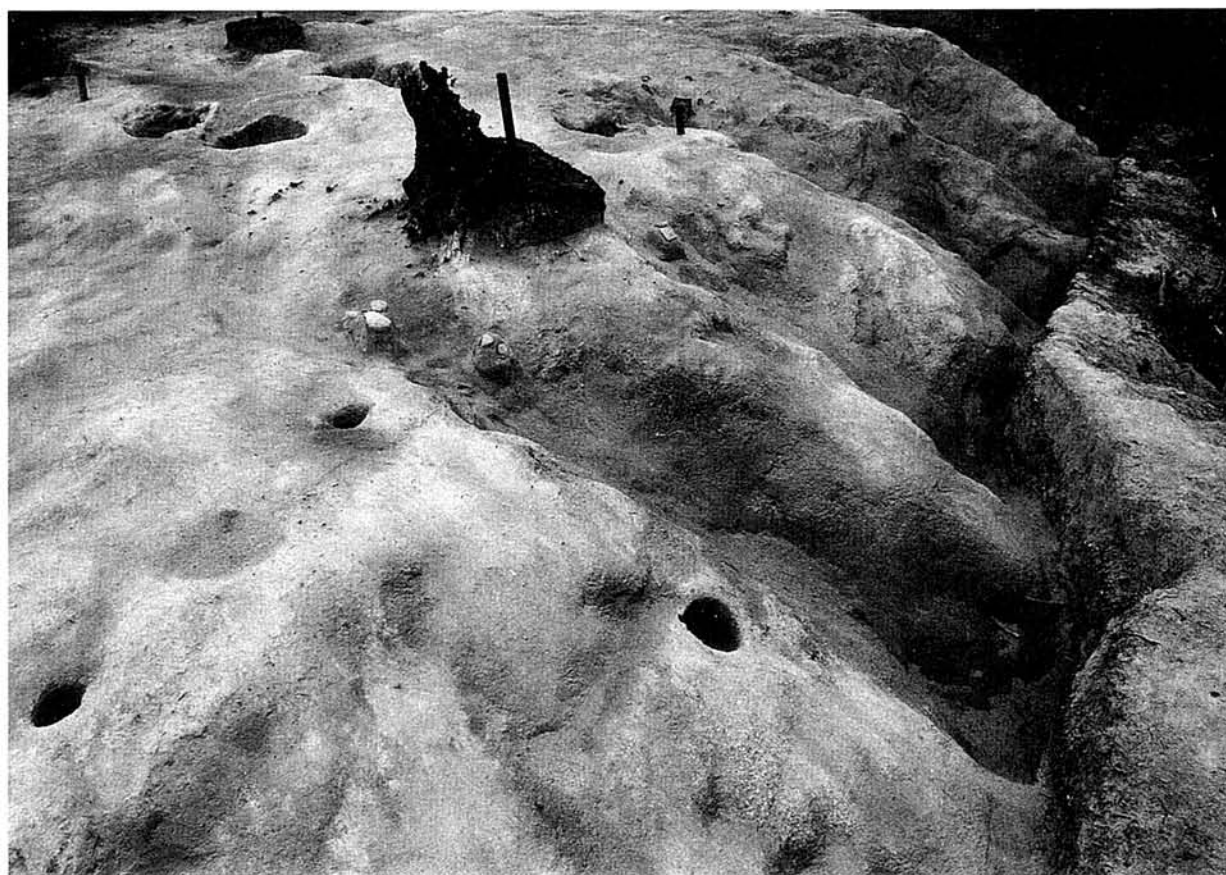
a. 有井城跡全景（北から・調査前・航空写真）



b. 有井城跡近景（北から）



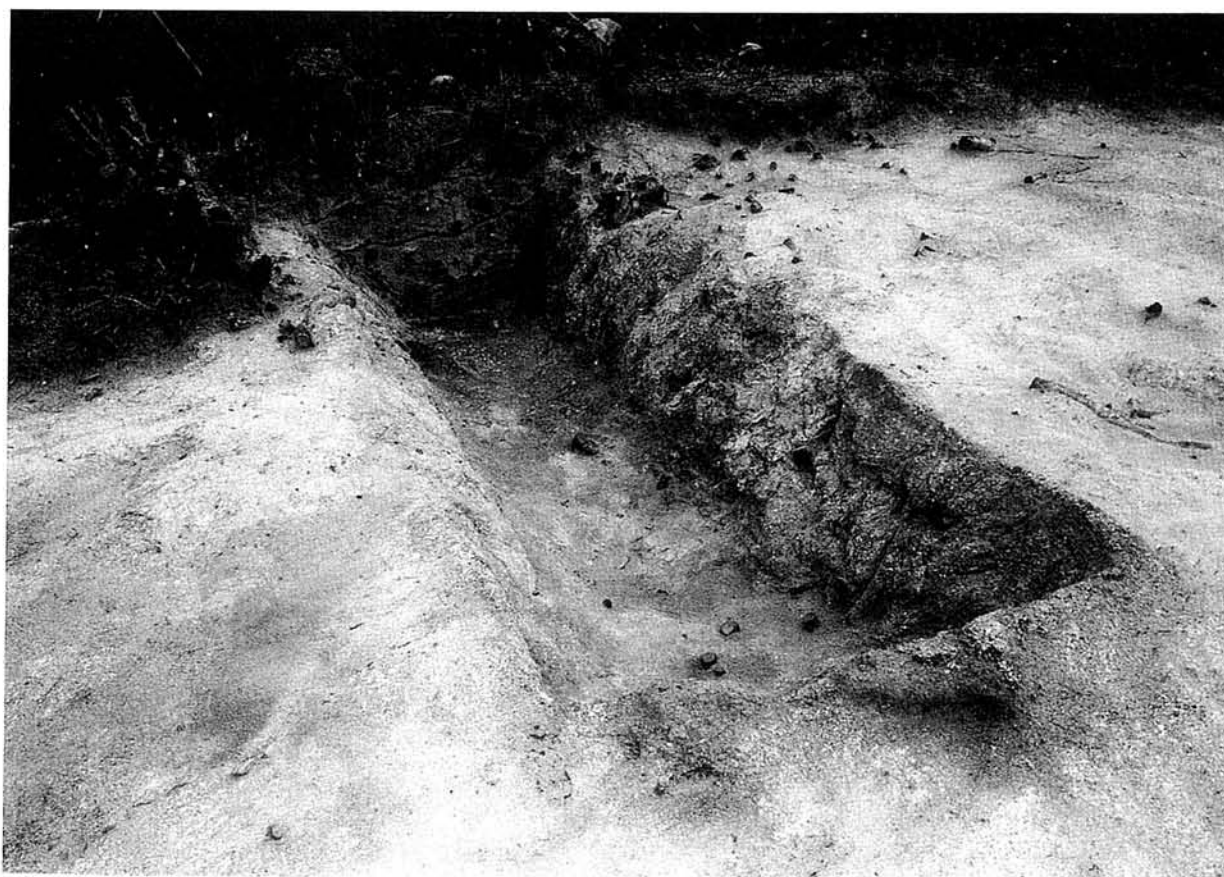
a. 第1郭畝状竖堀（西から）



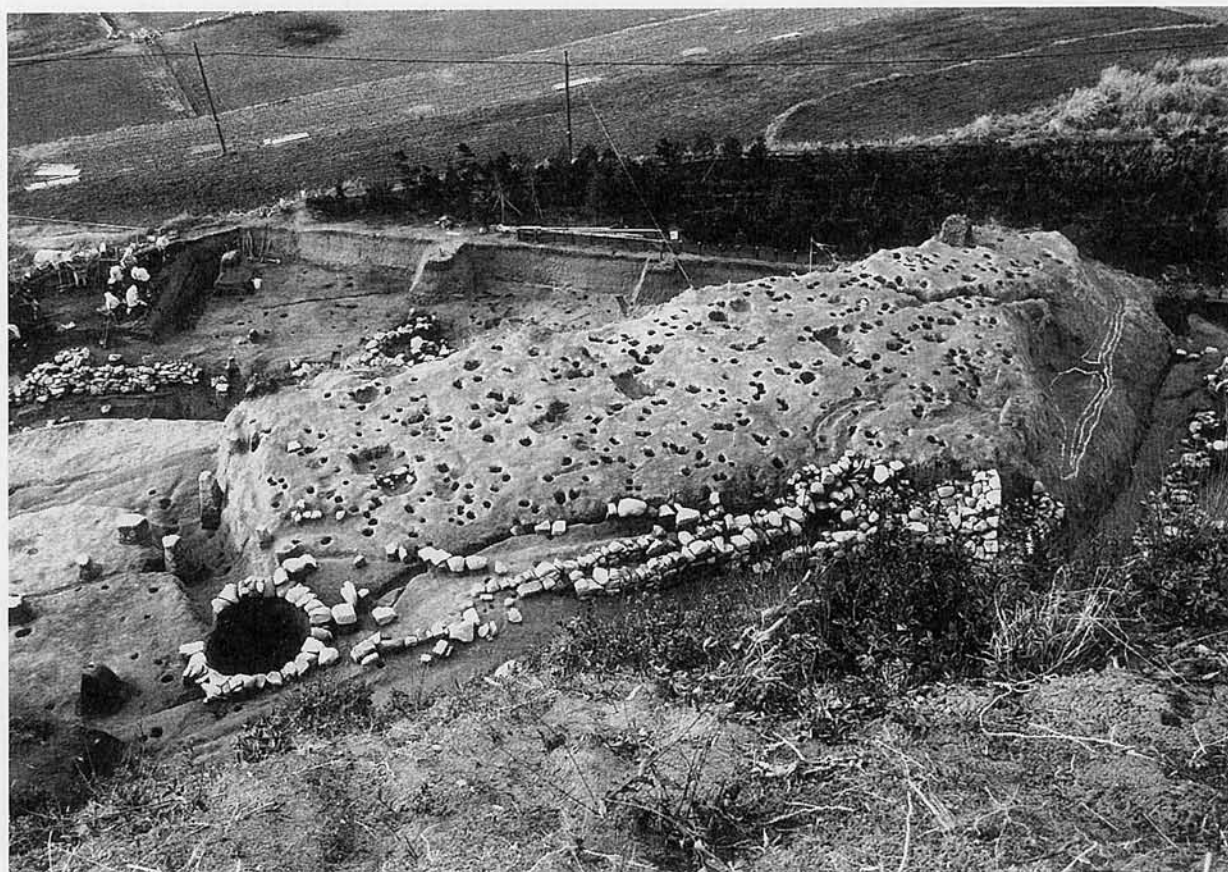
b. 同 上（北から）



a. 第1郭第1号土坑（東から）



b. 同 上（北から・完掘後）



a. 第2郭全景（南から）



b. 第2郭石垣検出状況（南西から）



a. 石垣の崩落状況（東から）



b. 第2 郭石垣及び通路状遺構 2（東から）



a. 第2郭石垣及び通路状遺構2 (南西から)



b. 第2郭石垣の構築状況 (左から石垣3・4・5, 南東から)



a. 石垣 3 北東面検出状況（北東から）



b. 同 上（北西から）



a. 通路状遺構 2 の木戸跡（北東から）



b. 同 上（北西から）



a. 石垣4断面（南西から）



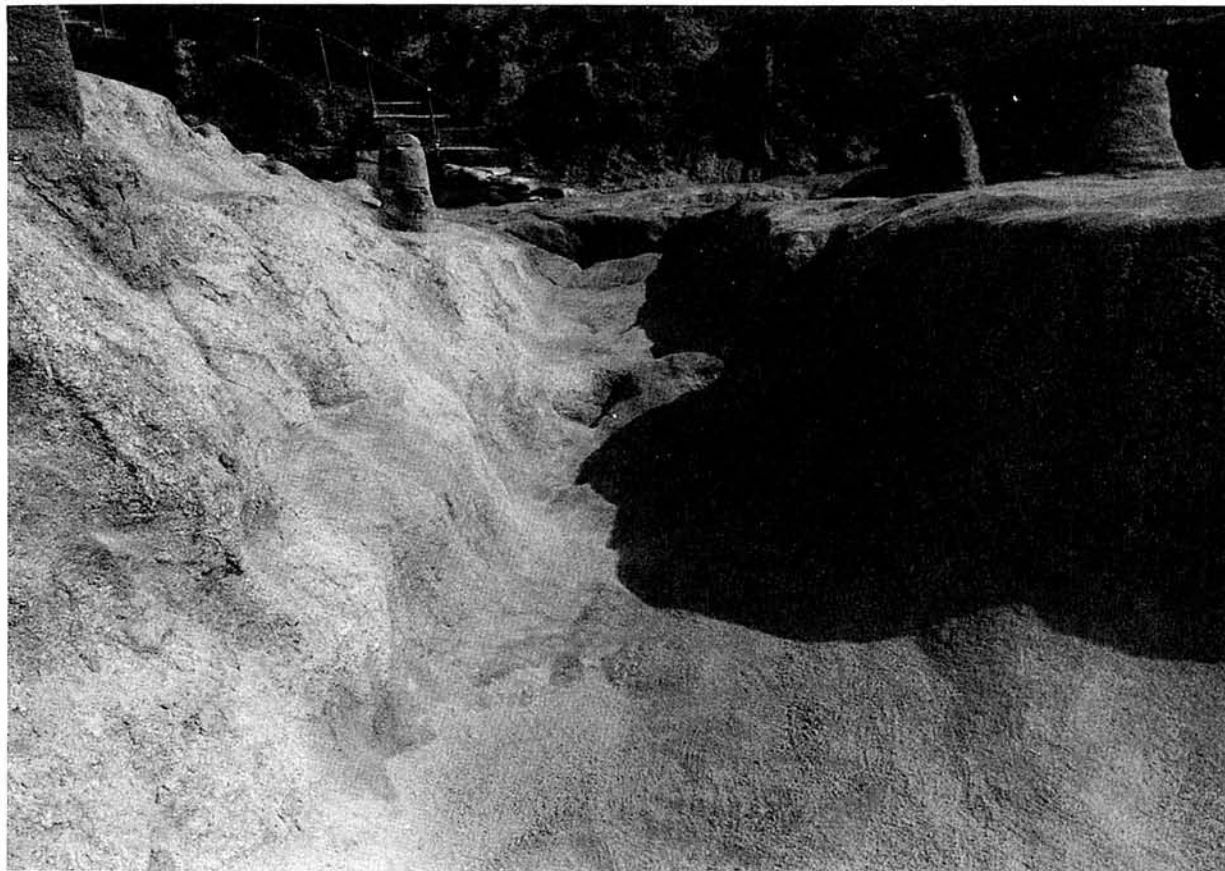
b. 石垣5断面（東から）



a. 第2郭3区東側土層断面



b. 第2郭3区西側土層断面



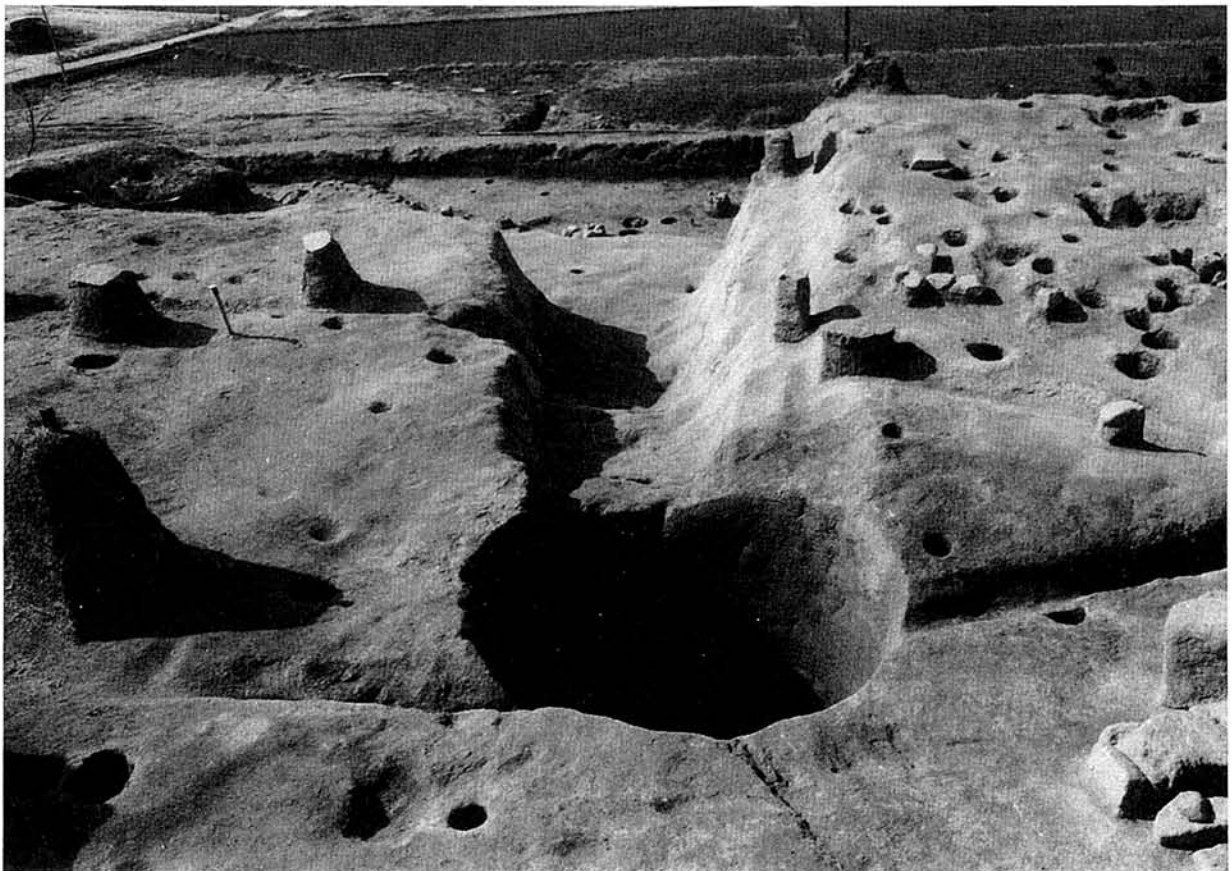
a. 通路状遺構 1 (北西から)



b. 第 2 郭西端部 (東から)



a. 第1号井戸（南西から）



b. 同 上（完掘後）



a. 通路状遺構 3 (南から)



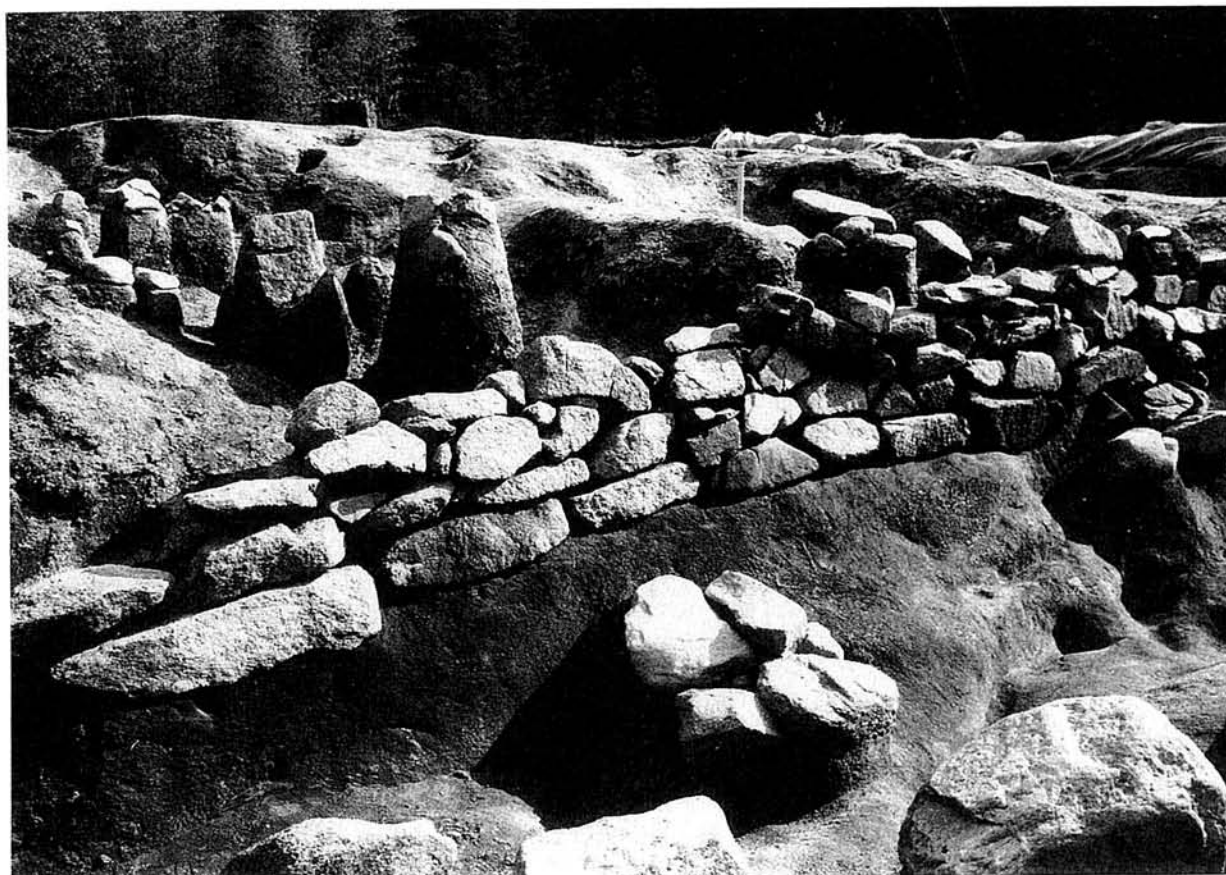
b. 第 3 郭石垣検出状況 (南西から)



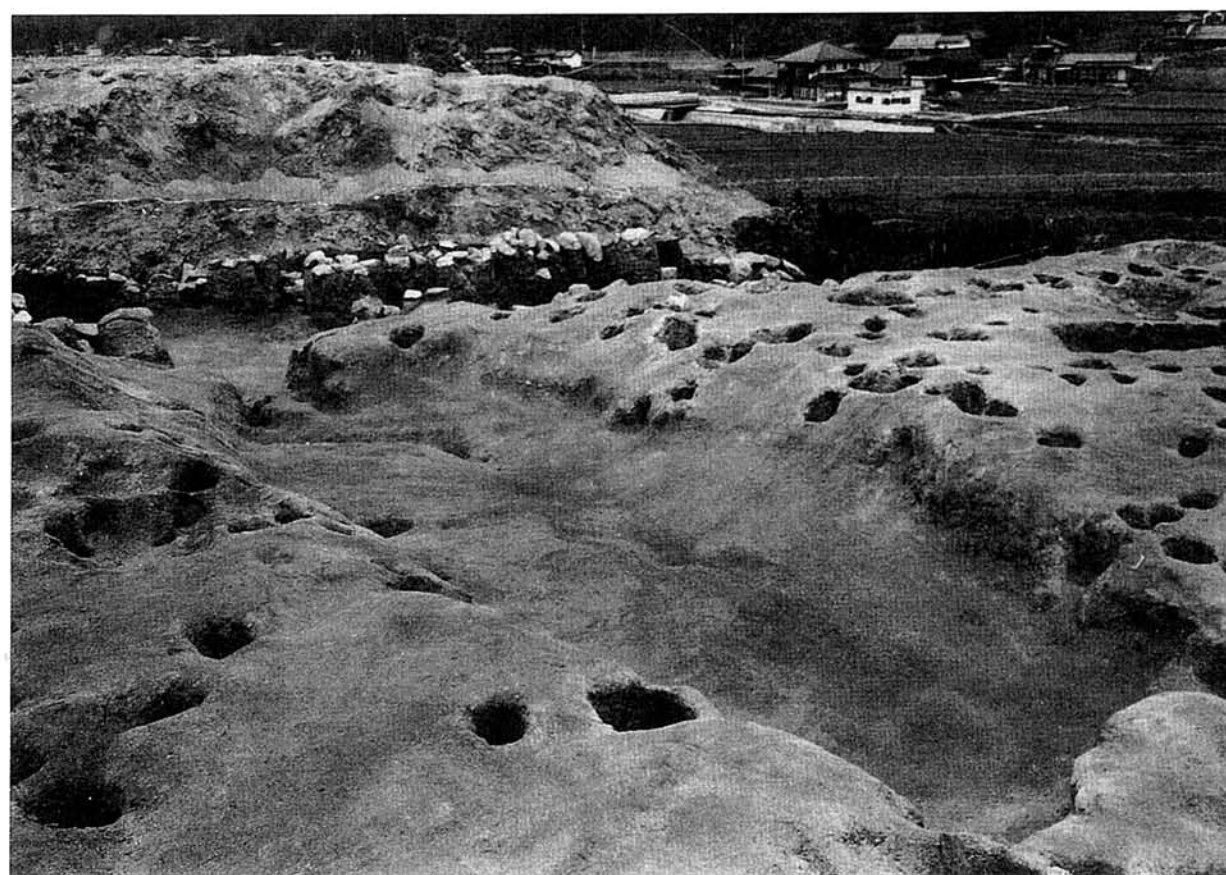
a. 虎口 (第2郭北端から)



b. 通路状遺構 3 (虎口から)



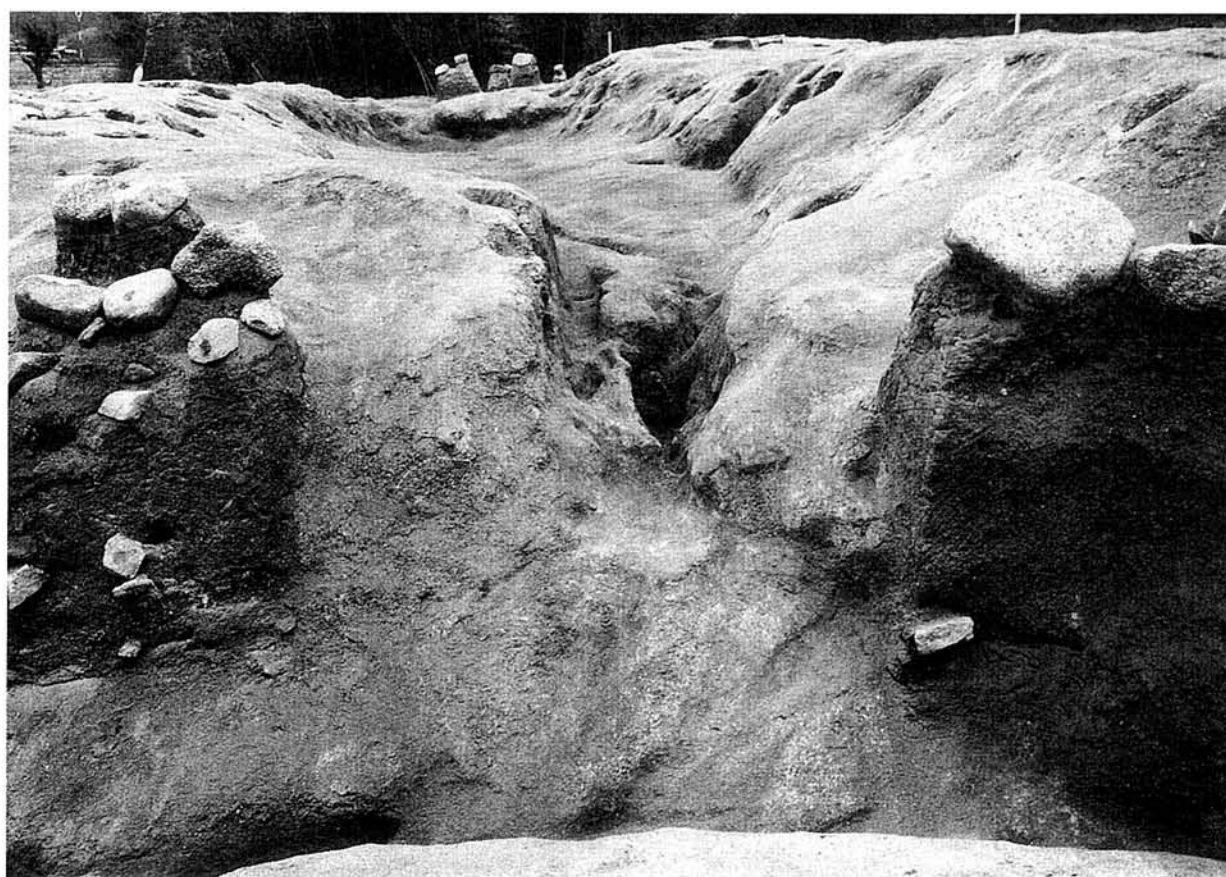
a. 石垣 6 (西から)



b. 堀切状遺構 (東から)



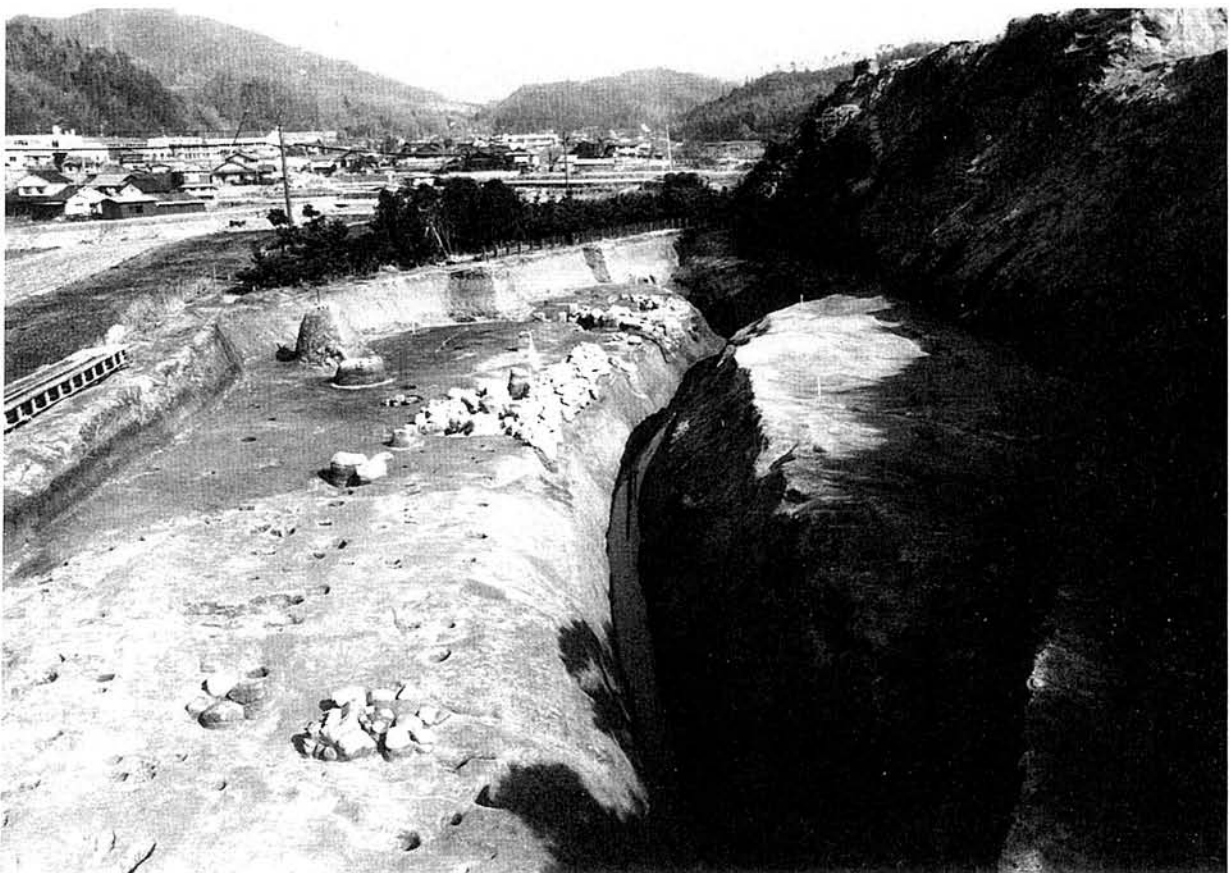
a. 堀切状遺構西端詰石検出状況（西から）



b. 同 上（完掘後）



a. 第4・5郭調査範囲全景（東から）



b. 同 上（西から）



a. 石垣9 (南から)



b. 第2号井戸 (東から)



a. 第2号井戸（完掘途中，東から）



b. 同 上（完掘後）



a. 第5郭堀中土層断面（東から）



b. 第5郭堀外土層断面（東から）



a. 虎口下掘中土層断面（東から）



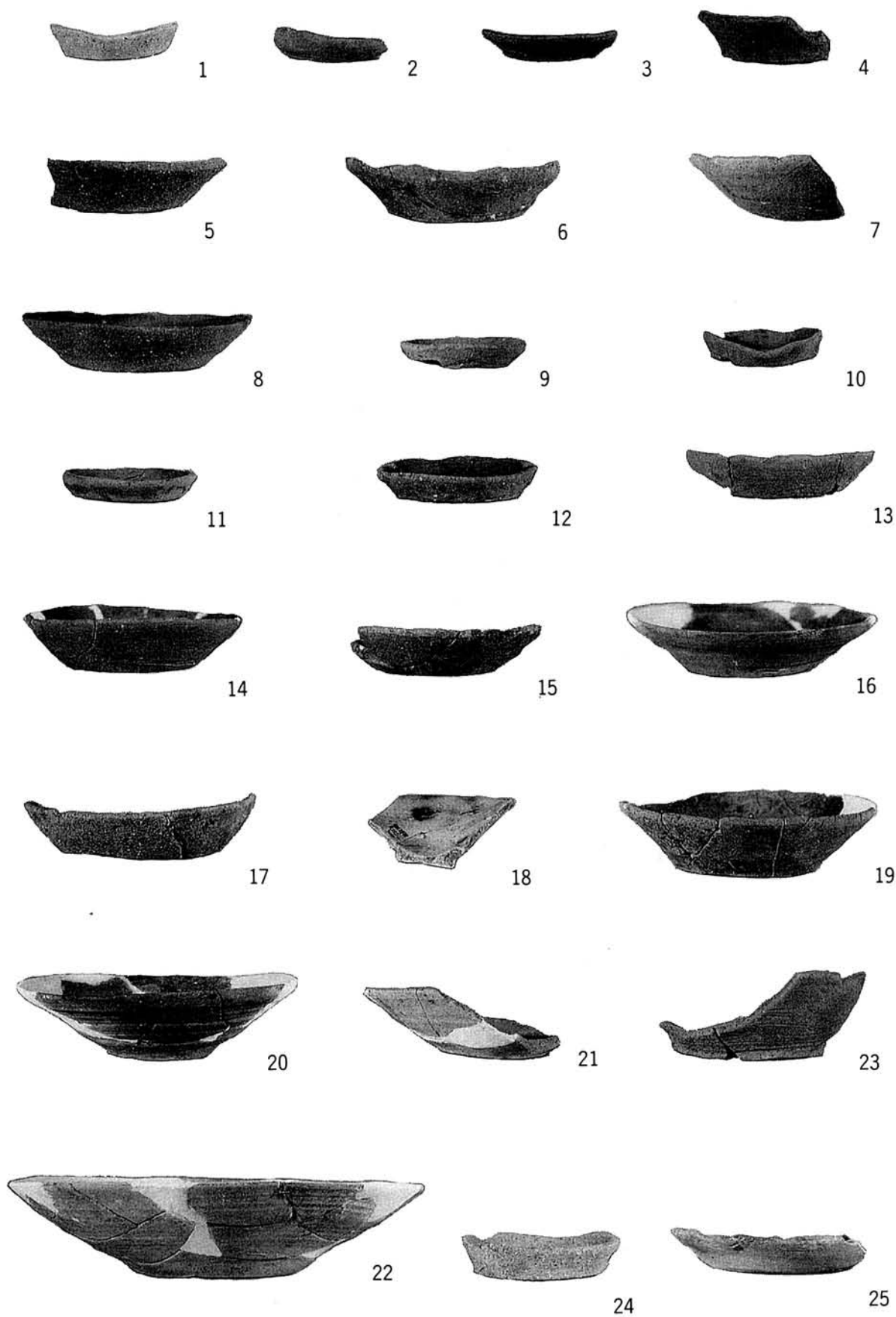
b. 虎口下礫群検出状況（北東から）



a. 虎口付近完掘状況（北から）



b. 第3郭東側トレンチ内堀検出状況（東から）





26



27



28



30



29



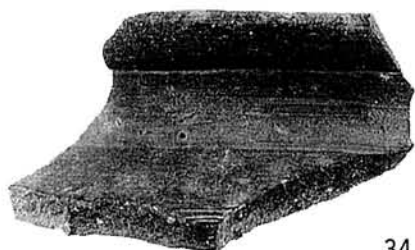
31



33



32



34



35



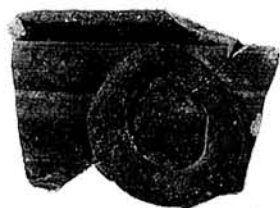
36



37



38



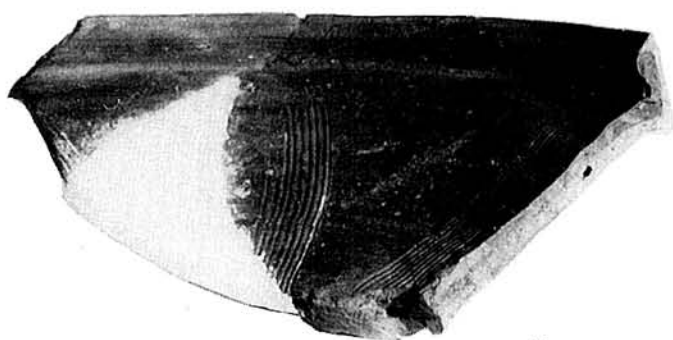
40



46



39



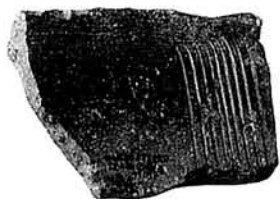
44



43



41



42



45



47



48



49



50



53



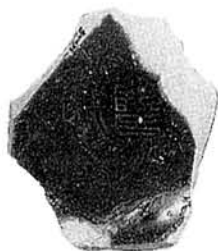
51



52



54



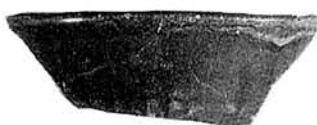
55



56



57



58



59

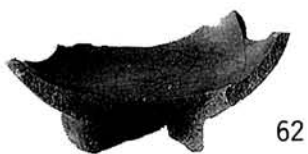


60



61

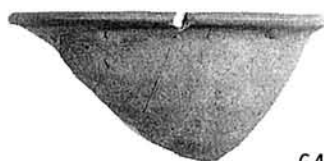




62



63



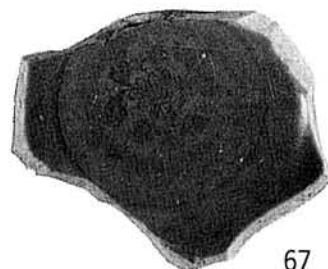
64



65



66



67



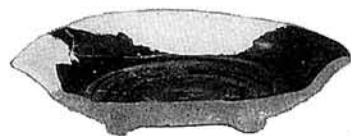
68



70



71



72



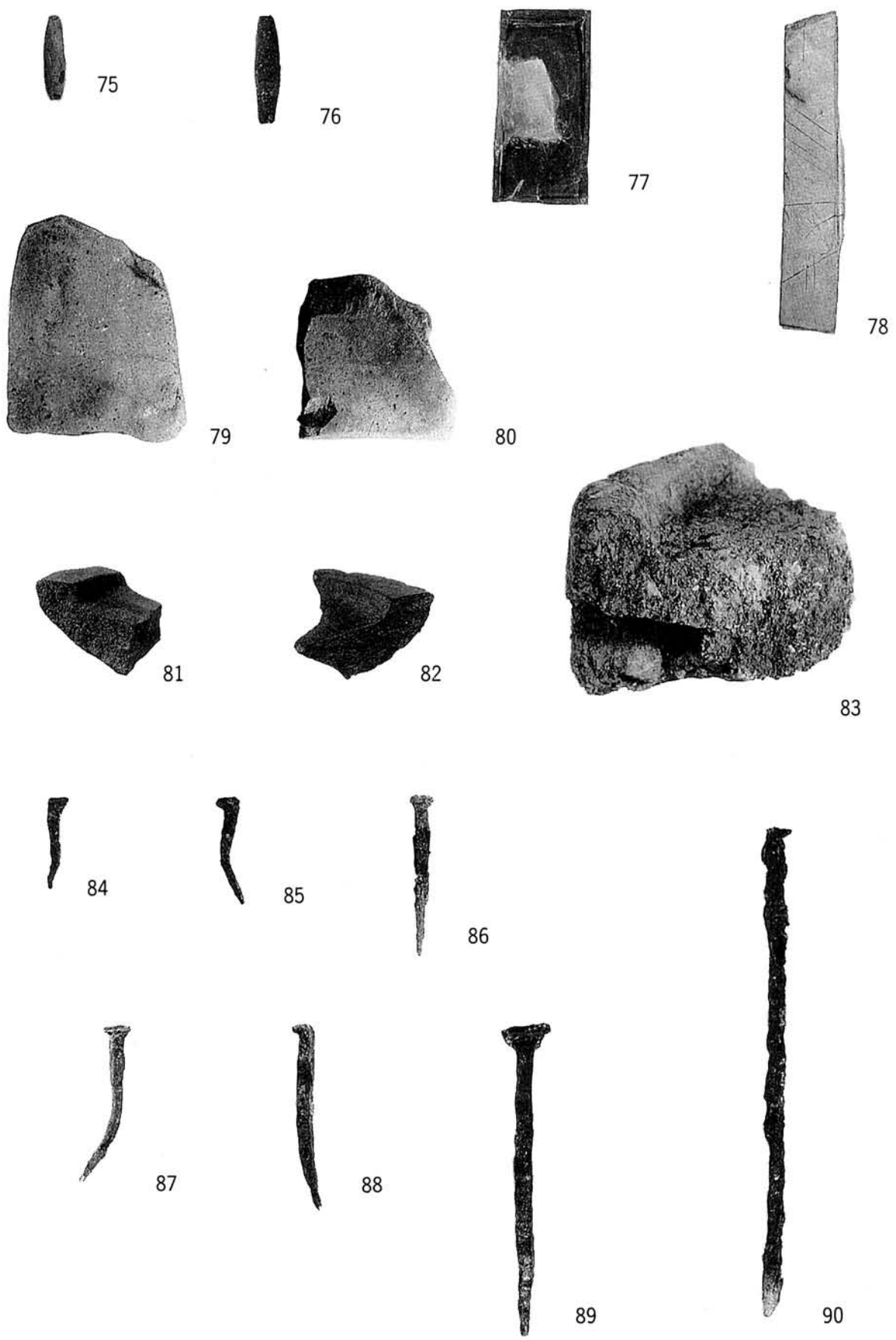
73



74



69





91



92



93



94



95



96



97



98



106



99



100



101



102



103



104



105



107



108



109



111



112



113



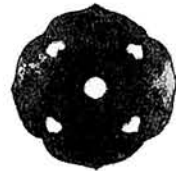
115



114



110



116



117



銅滓



C1



C2



C3



C4



C5



C6



C7



C8



C9



C10



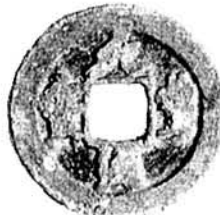
C11



C12



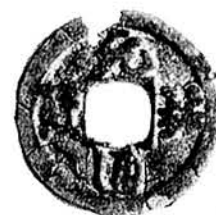
C13



C14



C15



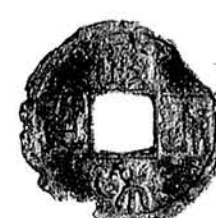
C16



C17



C18



C19



C21



C20



(財) 広島市歴史科学教育事業団調査報告書 第8集

広島市佐伯区五日市町所在

有井城跡発掘調査報告

1993年3月

編 集 財団法人 広島市歴史科学教育事業団
発 行

広島市中区国泰寺町一丁目4番15号

TEL (082) 248-0427

印 刷 電 子 印 刷 株 式 会 社

広島市中区堺町一丁目1番5号